
巫女と依巫

若宮 不二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巫女と依巫

【Zコード】

Z0703L

【作者名】

若富 不一

【あらすじ】

卒業間近の中学生3年生、永山雪羽 ながやま ゆきは は追い詰められていた。校舎の屋上から落ちた瞬間、異世界に召喚された。神の器である依巫 よりまし にされるはずが失格とされ……「今すぐに帰らないと、就職がつ！」雪羽は元の世界に帰れるのか？本人の意思とは関係なく、巻き込まれて……

注1）作者にとって初めての小説です。 注2）拙い文章だと思われます。 注3）試験的かつ思いつきで書いています。読んでて書いてみたくなりました。 それでも読んで下さる方のみ、お進み

さて。ママ潰してなれば幸いです。

1話 不幸な幸運（前書き）

その内『R-15』『残酷な描写あり』のシーンが出てくると思います。

1話 不幸な幸運

その時、私は諦めた。

(もひ、いこや……)

結局、自分には生きる場所などなかった。
あの日から。

(もう少しで逃げられると思つたんだけどな……)

「の地獄か。」

あと、3日耐えればよかつたはずなのに。
やつぱり上手くこかない。

でも、それも
もうすぐ終わる。

校舎の屋上から落ちたんじや、さすがに無事ではござれないでし
ょ。

死ぬかな?
死ななくても大怪我は確実。
痛いの、イヤだな。
すじく、痛いんだるつな。

田を硬く閉じて歯を食いしばる。

グシャツ！

ものすごい衝撃がした。

頭が痺れる。

クラクラする。

周りがピカーッと白くて強い光に包まれた気がした。

ああ、天使のお迎えだね……

ネロのようには、犬は迎えにこないけど、光に包まれて召されるつ

ていいな……

その後、ものすごい落下感とエレベーターが止まった時の感じが
した。

(? え？ 落ちた？ 地獄行きつてこと?)

…………。

！…………！

痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

死んでないわ。

体中、痛い。

あたし、
生きてる。

でもつ！

あああああ！ 無事じやな~~~~~い！···！
なんか、どつか
折れてる？

つていうか
全部痛い。

痛すぎて

息、できない！

全身骨折とかしてる？

なにつーこれつ！

死んじやう？

やつぱり、あたし死んじやうの？

死ぬならせめて、即死にしてつ！

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

ひひひひひひひひひひひひひひ~~~~~

あたしが、それでも、必死で息をしてたら

なんか、でつかい手で
髪の毛を鷺掴みされて

ぐつと頭を持ち上げられて
そのまま 叼り上げられて
あたしは、田ぶらりんになつた。

頭の皮が剥けそうで……

視界は真っ赤でよく見えなくて……

体中が痛くつて……

息ができないくて……

意識が朦朧としていた。もつゆう

なんか、わけわかんないこえ? がきこえるよ.....

ベジヤッ。

て
はなされた?

(せゅうせゅううたごいん じじては あらわすかめう……じ、じへ
かつていつてこと?)

あたしのあたまのなかは
きゅうに たゞくらくなつた。

1話 不幸な幸運（後書き）

初めまして。若宮不一です。

どこまで、自分の思うように書けるか不安ですが、がんばってみます。

すぐに挫ける脆弱な心なので、温かく見守って頂けると有難いです。

2話 召喚したもの 1 sideシード

召喚は成功するはずだつた。

奴が巫女を召喚し、俺が依座よりましを召喚する。

ただ、それだけの事。

150年ぶりの召喚で、前回の事を直接知る者はおらず、口伝と書物の知識での術式だが、そんなこと、関係ない。

確かに召喚術は高度な術だし失敗する確率も高い。
だからこそ、出来うる準備は、万端整えた。

はずだつた……

「ソレ」が魔方陣の中に現れるまでは！

先に術を発動させたのは、奴。

大神殿の地下にある召喚の間に、2つ並べて敷かれた魔方陣。
その片側が光を帯びる。
光が強くなり、光がはじける。

眩んだ目が元に戻り、魔方陣を確認すると

14・5歳の少女が、目を見開きながら立っていた。

周りからは

「おおお……」とか

「素晴らしい！」とか

「書物の通りだ！」とか

感嘆の声が上がる。

忌々しいが

成功したようだ。

まっすぐな黒髪は腰まで豊かに流れ
艶やかに波打っている。

怯えたように見開かれた瞳は
漆黒の闇をたたえ

神秘の神の世界へ誘うよう

ふつくらとした 紅い唇は
濡れたように輝き

熟れた果実を連想させた

これが「巫女」か……

少女の姿に神官のジジイ共は「満悦だな。

奴は自分の仕事に満足気で、俺の方を見て親指立てやがる。
エールでも送ってるつもりか…… 親友気取りのおうじ様。

さて。

俺も完璧に呼び出してみせる。
俺は出来る。

詠唱に入つて
魔方陣が光る

光が収まつて現れたのは……

?

赤と
白と
黒と……

ぼうぎれ？

いや、
違う。

「ソレは、かすかに動いている。

「なんですか？これは？シーウェルド殿」

耳障りな声がした。

奴の取り巻きの大貴族の息子、（俺が心の中で
呼んでる）ロイスが、瘤に障るほど丁寧に尋ねる。
そして魔方陣のソレを引きずり上げた。

取り巻きA と

!

子供だ！

召喚したのは女性なのだから、人間だと驚く方が間違いである。

しかし、その少女は
鼻や口からも血を流し
ぐつたりと

まるで狩られた兎のように
男の手でぶら下げられていた。

「失敗ですな」

嘲りを口角に貼り付けて
男が言い、少女を投げ捨てた。
確かに、神の器としての依巫よりましのイメージからは程遠い。
それにこの状態では、使い物にならないと言いたいのだろう。
しかし、それは 神の器として召喚されしこ女にする行為なのか？
涌いた怒りをかみ殺す。

その後も、最悪だった。

ジジイ共は薄ら笑いを浮かべながら
「まだ若かつたから無理だつた」とか
「高度な術だから、仕方がないさ」とか
「運が悪かつたんだよ」とか
日々に慰めとも嘲笑ともとれる言葉を、俺に放つた。

(貴様らも、同じ考え方……)

眼鏡に適つた巫女を喚べた、奴を讃え
見目麗しい、巫女を讃え

大神殿にある 迎賓館へゾロゾロと上がつて行つた。

3話 幸福な誤解 Side

(うーん)

なんだか、ポカポカする
あつたかい。

ふしきだなあ
背中が柔らかい。

ふかふかの、おふとん？

じゃあ、ここは保健室かあ

でも、今まで、こんなに フカフカだったかなあ？

それに、すごく、いい匂い。
洗濯洗剤の匂いじゃないね。

.....。

田を開くと、それは、知らない天井だった。

真っ白い 漆喰みたいなのが
天井と壁にも塗られている。

部屋を見渡す。

広さは6畳程。

窓、1つ。

石の壁が窓の形にくくりぬかれてて、細かく区切られ少し歪んだガラスが嵌め込まれたステンドグラスみたいな窓がついてる。

木の机と椅子が一つ。

床はフローリング。

そして、あたしが今居るのは
木のしつかりした造りのベッドで
フカフカのお布団の中。

なんだか、テレビで見たヨーロッパの古城ホテルみたい……
石づくつの建物みたいだし……

「ハル、 デリ?」

なんだ、あたし
ここにいる?

思い出す。
ええ~っと。

あたしは学校の屋上で殴られてた。
いつものように。

で、3日後が卒業式で
すぐ住み込みの仕事に就くから、髪の毛をそろえたんだけど
それが、どうもあれらの気に入らなかつたらしく

ジャキジヤキと刈られ

卒業記念に犯っちゃん
とか言って

制服脱がされ…… つてか破られたつ！
擦り切れた下着を見て嘲^{わら}われ

その隙に逃げて、

(それは、イヤ！イヤ！イヤ！！ 絶対絶対絶対絶対絶対絶対！イヤ！)
(最初の人は、好きな人！無理やり、集団でなんてありえない！し
考えたくない！)

(冗談じやない！ やだ！！ やだやだやだやだやだやだ！…)

屋上の柵超えたら

生意氣！

とか言われてモップの柄で突かれた。

絶えてたんだけど

誰も屋上見てくれる人もいなくて……

あいつらもだんだん興奮してきて

鼻にクリーンヒット。

目の前に火花も飛ぶよ。

思わず、

反射的に、

のけぞった。

で、
落ちて大怪我したはず。

病院じゃないよね？　□□。

(.....。)

そういうえば、体、痛くない。

すつごい！
あんなに痛かつたのに！
直ってるよ？
昨日殴られた青タンとかも消えてるし！
ありえないし……

(死んだな。)

これは、もう、決定？
でも地獄の感じじゃないよね？

じゃあ、ここは天国ですか？ 洋風だし……

いや～ ははははははは

イイ！！

良いです！！！

死後の世界、最高！！

傷のない世界！

今までどつか痛いところあつたからね～。

そして

布団で寝れるなんてえ～
気持ちいい～！

「じゅん、とふかふかの布団に寝そべったら、
なんだか眠くなつた……」

(あ 瞑つてもいいんだよね。だつて死んでるんだもん。)

あの女に蹴り付けられないんだよね……

(なんか、大事なこと忘れてる気がするけど……)

(思い出せない…… 眠い)

あたしは再び眠りに落ちた。

4話 小さな決意 ~sideラライア

ドアを軽くノックする
返事は無い。

まだ眠っているのかしら?

そつとドアを開け、中に入る。
ベッドを覗くと、小さく丸まつてよく眠っている。

良かつた。

うなされてもいなし、痛そうでもないわ。

2日前、シーウェルドが召喚に成功した依座様を見た時は 驚いたわ。

まさか依座様が、こんな子だなんて……

まだ小さい子供。

傷だらけで、汚れて、瀕死の状態で……

治療法師の サリエスに呼び出されて、集中治療室で治療をする
際に裸を視た時、

昔の記憶が呼び起こされて、心臓を握り潰された様に 締め付けられた。

わたくし
私の中の消えない記憶。

忘れてしまいたい、でも忘れない愛しく悲しい思い出と、田の前の痛々しい少女が、つい重なつてしまつ……

いいえ、これは、依座様。

私の可愛かつた、あの子じや あない。

そう自分に言い聞かせて、サリエスを手伝つた。

依巫様は

何處か高い所から落ちたみたいに骨が数ヶ所折れていた。鼻も折れていた。

それと、打撲。

しかも、それだけじゃなく身体中痣だらけで酷かつた。

明らかに殴られた跡だわ。

小さい火傷の跡も沢山あつた。

昨日今日でできた傷じやない……

一体、どうしたらこんな非道い事になるのかしら。どんな暮らしをしていたのかしら?

奴隸の焼き印は無かつた……

親に捨てられた
浮浪児かしら?

分からぬけど

分からぬ。

私がお世話を以上、もう酷い目に遭わせませんわ。わたくし

サリエスが治癒魔法を施しましたもの。

傷はすっかり癒えたでしょう？

起きたら美味しい食事にしましょうね。

栄養を取つてゆっくり休めば

力サ力サの肌も、艶のない髪も、痩せこけた体も

良くなるわ。

だから、今はゆっくり
おやすみなさい。

(「～」)

よく寝た。

こんなに、めりくり寝たの初めて？
田を開けても なんかボヤける……

皿を「パン」「パン」あつて じょじょあると
パンが合ひました。

天国のままだ。

よかつた。夢じゃなかつたんだ。

うーんと伸びをする。

(気持ちいいなあ～)

お布団でたづぶり寝たのって何年ぶりだろ？

お父さんに女が出来て出てつてからだから5年？6年？

目覚めて何処も痛くないなんて！

天国万歳！

べべべべべべ

お腹、鳴った。

お腹が鳴ったよー。

へえー

死んでも お腹、空くんだ……

つていうか

すつゞこペコペコなんだけどっ！

空っぽだと胃が壊れちゃうよ？

死後の世界で胃潰瘍 気にするつて変だけど。

なんか、なんか、なんか食べたい！

天国なんだから、食べ物あるでしょ？

少なくともリンゴはあるよね？

自信なわけです。

とりあえず、起きよつ。

この部屋に食べ物は無さそうだし……

どつかに食堂とかあるんじゅない？

天国なんだから無料だといいなあ。

ベッドから降りて 部屋を出ようとしたら
ペシャリ。

あつれ？

足が立たない。

ベッドに掴まって立ち上がりつとしたり
足に力が入らない！

なんで？

つてバタバタもがいていたら ベッドカバーやら布団やらが絡まつて

床の上に 山が出来た……

「うううううう。

なぜだ?

コンコンコン

ドアがノックされた。

びっくりして凍りつく。

解らない言葉がして、ドアが開く。

入ってきたのは、男の人。

そう、例えるなら……

スター○オーズのジョ○イの騎士な人だ。ちっこい縁のお爺ちゃんじゃないよ!

年齢は30歳位かな?

くるぶし位まである丈の長いフードつきのマント?みたいなのが

羽織つて、

厚手の黒い布マントの裾とかふちには銀糸で刺繡がされていて、映画より上等の感じがする。

騎士?魔法使い?

長身180cm超えるよね190位あるのかな? スラッシュとして
いても、でつかいなあ。

ここが天国なら、この人は天使?神様?

どちらにしても、そのイメージからは外れるような……

なんて事を固まりながら考へていると
向こうもあたしの状態に気付いて、ぎょっとしたみたいだつた。
そして、つかつかとあたしに近寄ると

解らない言葉を一言かけて、あたしの手首をつかんだ。

ビクッと体が震える。
あたし、人に触れられるのヤなんだけど！

(何すんの?あたしこんなことした?この男の人表情が怖いよつ
かお

ジヒ○イのちゅうと怒ったような顔に、じわりと恐怖心が持ち上がる。

(放してつつ!)

手を振り放そうと、もがくけど放してくれない！

(ハハハハハヤだよハツ一 審ニヨウ)

(言葉わかないよっ！ もう！放せよっ！)

（あれ？ 手に力入んない？ そういえば立てなかつたし……）

自分の体の状態と、人に触れられるという最も苦手な状況にフリーズしかけていたら、手を開かされ、指に何かをはめられた。

(指輪だ)

何？ 何だ？ なぜ指輪？

「これで言葉が通じるはず。俺の言っていることが解る？」
低いけれども、涼しげなよく通る声でその人は言った。

「……あ。日本語。（覗き込まれるよう）」、じつと見つめられて恐怖とは別の緊張感が込み上げてくる。

「……はい」

なんとか一言搾り出せた。

手も放してくれた。

「よかつた。言葉違うから……その指輪が通訳してくれる」
ジエ〇イがフツと軽く微笑む。

う。

この人、かつこいい！

恐怖と緊張で気が付かなかつたけど、かなりの美形ですよ。
真顔はキツイ感じで心底怖く感じるけど、笑うと印象変わるなあ～
他人に微笑まれることなんか無い人生だったから、こんな男前さん
に笑いかけられるだけで、赤面してしまつ……

笑つてなかつたら、ちょっと、いや、かなりとつつき難い雰囲気なんだけど、笑うと目つきの鋭さがフッと緩む。ギャップが凄し！瞳の色が 薄めのオリーブグリーンで髪の毛の色は……

暗い金髪？黒に近い茶？端っこのはうは金にみえるよなあ何色つて言うんだろ？色抜けしていくのかな？

なんて、つい まじまじと見ていたら

ぐ～ぐぐう～～

またもや
腹が！

はっ！はずかしいいい！

人生初、男前に微笑まれておいてなぜに

鳴るよ？あたしの腹。

お約束ともいえるが、あたしは超絶美少女でも最強でもないぞ……

案の定、ジエ〇イはブツと噴出すると、表情をかなり柔らかくして「元気になつた証拠だな。俺の名は、シーウェルド・レスコス。よっこそ、アースリング！」

そう言つと握手した。スッと握つてパツ放す軽いもので、気づけば離れてた。

立ち上がりれない、あたしを支えて立たせてくれたテーブルまで連れてきてくれた。

人に触れられるのは苦手なんだけど、なんだか すぐそつと支

えてくれてる感じがして

不思議なことに、もう恐怖感は無くなつてた。

「少し待つていて。何か持つてこよ」

と、さわやかに出て行つた。

声出せなかつた…… ありがとうとか…… 人としてダメだろ、あたし。

そしてシーウェルド・レスコス、親切すぎ。こんなに親切にされて逆に居心地悪いよ……

親切馴れしない あたしは不安になる。

待てと言われたので、椅子に腰掛けて待つが ふと疑問に思ひつ。

（アースリングって何？ 場所？ 天国にも地獄あるとか？ またか……？）

そう、死んだにしては やけに感覚が生々しいのだ。

腹は減るし

自分の手をつねつてみても、痛いし
息、してるし

止めると苦しいし……

やだな……

あたしは、やな展開の予感に暗くなつてきた……

そういうえば、あたし下着だつたはずなんだけど、長袖でゆつたりしたワンピースを着せられていた。

白で、厚手のたぶん木綿地、所謂天使服？お笑いコントの天使が着ている服のまんま。生地は滑らかで、上等そう。

寝巻きなんだろうか？

ブラははずされていたけど、元から胸は無いから問題ないけど……悲しいかな、ブラをしてないと、丸つきの子供だ。

ドアがノックされた。

はいと答えると

さつきのレスコスさんと、小太りの小母さんが入ってきた。
ちょっと前はすんごい美人だつたっぽい、その小母さん女がトレ
ーにのせた食事を出してくれた。

「おまたせしました。

私はお世話係りのライア・パークインスでございます。ライアとお
呼び下さいまし。

姫様。 も。 冷めない内にじびつを召し上がり

元美人小母さんが言う。

(姫様つて！何？！)

「あ、わたし 永山 雪羽と申します」
あわてて名乗り、お辞儀をする。

(姫じゃないですつつ)

それにして、すごい顔一杯笑顔だ！ライアさん！

満面の笑みつてまさに「コレ！」

こんなに笑顔で話しかけられたのも、親切にされたのはじめて「す！」

はい。

ましてや見ず知らずのお方に……

目一杯微笑まれて、相手が小母さんでもドキドキしてしまいます。

「ナーガ・ヤーマ・ユキハ様。……ナーガ様とお呼びしてもよろしいですか？」

発音しつぶやこうにライアさんは言つた。

(しまつた。外国语っぽく 逆に言わなきゃ)

「永山が姓で、雪羽が名前です。ユキハ・ナガヤマです。ユキハでいいです」

「失礼いたしました。では、ユキハ様とお呼びしても？
ユキハ様はここに召されて2日間、何も口にされてないので、今はこんな食事で申し訳ございません……
あまりしつかりした物だと体が受け付けませんので。お許し下さいませ」

ライアさんが、すぐさまなに言つた。

(そそそそ、そんな丁寧な言葉遣いであやまらないで下をこ)

「いえ。様なんて付けないで下をこ。 おいしそうです。いただきます」「もう、どう対応していいのかわかんないのでとにかく、食べる、いただきます。

メニューはポタージュみたいな具のないスープと、皮の柔らかいパン、コップに入ったミルク。

お腹が減っていたつてのもあると想ひ。でも

五臓六腑にしみわたるう~~~~~つて、じつこいつとなんだって分かった。

スープはきっといろんな材料が溶けて入ってるんだろうなと思わせる、栄養ありそうな味がした。

パンは 白パン？ 皮も柔らかくって まだ ほんのり温かかった。

ミルクは……牛乳じゃないと思つんだけど、濃厚で美味しかった。

あんまり美味しくて、もくもくと食べてしまつた……

最後のミルクを ふはつと 飲み終えると、なんだか恥ずかしくなつた。

一人とも、ほんわかした目で見てくれていた。

「いきさつをました。 美味しかつたです。ありがとうございます」

照れてしまつて、うつむたまま お礼をどうにか言えた。
お口にあつて良かつたと、またまた笑顔で対応され
どうやら迷惑に思われてないようなので、ちょっと安心して

思い切つて、自分から聞いてみた。

「あのう。ここは何処ですか？ なんで私は此処に居るんでしょう？」

返ってきた答えに驚いた……

あたしは死んだわけじゃなくて、召喚されたらしい。

召喚つて！ 何よつとつ？？？

あんまり突飛な内容で現実味が無い。

（わあ）。 小説にありがちな異世界召喚物じゅくん。
なんか、すつごに最強になつたりするの？あたし！ 魔王やつ
つけちやつ・勇者？逆ハー？王子様？）

とか、ちょっと期待したんだけど……
微妙な立ち位置であるような……

とにかく

レスコスさんが説明してくれた内容を整理してみる。

ます

「これは魔法のある世界で、大陸全土を巻き込む大戦争がおこりそ
うで、

この国（アースリングって國名らしい）は負けそうである。

で、神の力を借りて攻めてくる敵を追い払おうと

昔から伝わる方法で

神の声を聞き、伝える、巫女と
神の器れ物になり戦神と成る、依巫を
魔法で召喚することにしたらしい。

この世界の人間なら、みんな持つていてる魔力が邪魔をして
巫女や依巫になれないそうで、仕方なく他の世界から召喚するの
である。

ところが、巫女は普通に召喚されたが
依巫^{よひまし}はボロボロのあたしが召喚されてしまい
新たに召喚するかどうか検討中だそな。

あたしが嵌^はめている指輪は依巫用^{よひまし}の物で新しい人が来るまでは貸
してくれて
衣食住も保障してくれる。

レスコスさんの職業は上級魔道師。この人があたしを召喚した。
ライアさんは女官長であたしの世話係もしてくれる。

とりあえず、今聞いた情報はこれ位。
ゴメン、一気にいろいろ説明されても無理だから……

あまり展開についていけないあたしに
「心配しなくて大丈夫。今は体を治すことだけ考えて」と ライア
さんは気遣つてくれた。

(やさしい人だなあ)
あたしつつてお人好しだろうか?
怒つたりするとこりなんだろうか?
でも、怪我治してくれたしなあ……

そして、ライアさんは ひまわりみたいな明るい笑顔を振りまい
「疲れたでしょう、ゆっくり休んで下さいね」と、
レスコスさんをそのふくよかな体で押し出すよつとして出て行つ
た。

……疲れた。

実は、まだ治つきっていないんだりつか……
体がだるい。

考えること、こつぱいできたのこ、頭がぼおつとする。
といつあえず、すぐじどうじゅうわけ、しゃなみみたいなので、寝
てから考えることとした。

(あたし、寝てばっかりだなあ～)

まあ、眠れる内に寝とくのが悪くないと思つ。

体力回復と、頭の中を整理するために、あたしはとつとつと寝た。

5 読む？？？～sine die（後書き）

読まれる時に読む人が、食べられる時に食べておくのが書の基本です

6話 召喚したものの 2～sideシード（前編）

2話の続きをの話です。

6話 召喚したものの 2 sideシード

取り巻きA IJとロイス・エッカートに、その子供を投げ棄てられた時、俺は頭が沸騰するかと思つた。

まず、この子供を粗雑に扱つた事に、ものすゞく腹が立つた。ジジイ共の言つていることにも腹が立つた。

(俺の召喚した娘は、依巫^{ようまし}で、尊ばれて当然の希なる存在のはずだ
!)

(巫女と比べても、決して劣る存在ではない!)

そう心の中で叫んでいた。

早く駆け寄つて、助け起こしたかったが、
俺が頭で考えているのとは別に、俺の心は 今の状況に少なからずショックを受けていたようだ

不覚にも固まってしまい 動けずに、ただ突っ立つていた。

皆がぞろぞろと出て行つて、呪縛が解けたように 俺はあわてて少女に駆け寄つた。

よかつた。

まだ息がある……

応急処置で治療魔法をかける。

得意の分野ではないが、一刻を争いそうな状態だった。
見た目より、容態は悪いのかもしれない。

念話で治療法師のサリエスに助けを求める。

転移ですぐ来てくれた。

院に移して集中治療してくれることになり、彼女を抱えた。

あまりの軽さに怖くなる。

体の冷たさに背筋が凍りそうだった。

なぜ？

今、初めて会ったのに。

なのに、この命が消えるのが恐ろしい。

助かつて欲しい。

俺の召喚魔法が不完全で、彼女をこんなに傷つけたのだろうか？

自分が呼ばなければ、死の淵をさまようことも無かつた？

俺のせい？

俺のせいなのか？

なぜ、こんなに心が乱れるのだろう？

自分が召喚した少女が、瀕死の状態だから……

只、それだけなのだろうか？

サリエスはチームを組んでくれて、彼女は集中治療室の中。

サリエスはこの国で最も優秀な治療法師だ。大丈夫。

きっと助かる。

祈ることしか出来なかつた。

（どうか、助かつてくれ……）

あのサリエスをして、治療には数時間を要した。

だが、幸い命に別状は無く、骨折や内臓の破裂なども粗方治した

そうだ。

あとは、2・3日治療を続ければ完治するとのことで、安心した。個室に移したところで、依巫よひましであるこの少女の看病と世話は、女官長のライアが受け持つてくれることになった。

ライアなら大丈夫。

安心して任せられる。

サリエスが手配してくれたのだらう。

(感謝しないといけないな。)

そして、俺は召喚と応急治療で魔力をほぼ使い切り、フラフラになりながら、報告の為に執務室へと向かった。

魔道府まどふ ラズモント執務長官に今日の報告をしようと執務室に入ると、長官は既に帰宅していて、副長官に明日報告するよう言われた。

サリエスの治療中に念話で報告はしていたので、召喚の結果は皆に知らされているようだ。

俺からの報告以外の筋書きが、執務室内に飛び交っているらしく「大変だな。頑張れよ。」などと執務室の面々から励まされた。

(どんな話になつてるんだらう……)

頭をかかえながら、部屋に戻つて今日はもう寝ようと居住棟へ向かいかけたが

ふと あの子がちゃんと眠れているか気になつた。

(ライアが付いているんだから、大丈夫に決まつているのは判つている……)

でも、一度気になつた事は頭から離れない。
疲れているのに、こんなことで悩むのもバカバカしい。

(もう。 ちょっと、気になつたから容態を聞きによつただけ……)

病室に向かつ廊下で、ライアに出くわした。

容態を聞きに寄つたと言つと、生温かい目で微笑まれ
「安定してゐるわ。 今は、よく眠つてらつしゃいます。 でも、折
角來たんだから、お顔だけでもご覧なさいな」
と半ば強引に部屋に連れ込まれた。

少女は、よく眠つていて規則正しい寝息が聞こえた。

丸くなつて眠る姿は、まるで猫だ。

ライアに、ようじしくと頼んで、俺は疲れた足を引きずるように自
由に戻り、ベッドに倒れこむと そのまま深い眠りに落ちた。

濁つていく意識の中で、少女が目を開けたらどんな顔になるのか
と ぼんやり考えていた。

7話 初めての会話 Sideシード（前書き）

5話のシーウェルド視点です。

7話 初めての会話 sideシード

召喚から2日後、俺が少女の部屋に入ると、彼女はシーツの上に埋もれていた。

少女と目が合つ。

濃い茶色の瞳を潤ませて、びっくりしたように俺を見ている。

黒目がちでこぼれそうな大きい目を、長い睫毛まつげがくっきりと縁取り、影を落としている。

不揃いに刈られた黒髪と、瘦せてこけた頬。

唇だけがふつくらとして 赤いサクラランボが付いているようで、可愛いのに かえつてそれが ひどく不釣合いな印象を醸かもし出している。

ここで双方固まつっていても、埒があかない。

長官から預かつた通訳の指輪を嵌めなければ、たぶん言葉は通じない。

「ちょっとゴメン」

理解できないだろうが、一応声をかけて シーツから出でる手首を掴む。

少女はビクンと体を震わせて、手を振りほどこうとする。でも、その抵抗は あまりにも弱々しく、少女の体が衰弱していくことが見て取れた。

「怖がらないで、指輪を嵌めるだけだから……」
なおも?き、連れようとする その手を開き指輪を嵌めた。

「これで言葉が通じるはず。俺の言つてこなうことが解る?」
少女に尋ねてみる。

少女は答えない。

(あれ?解らないのか? それともしゃべれないとか?)

「…………はい」

少女が少し掠れた声で返事をした。
その声が耳に入った瞬間、ゾロリと背骨を這い上がる何かを感じた気がした。

今まで感じたことのない奇妙な感覚をじまかすように

「…………よかったです。言葉違つから………… その指輪が通訳してくれる」「と、つつかえながらも言つて、滅多にしない愛想笑いを貼り付ける。

(…………。)

少女は無言だ。

そして、俺を凝視している。

痩せて小さい顔に目だけが異様に目立つ顔で、外を伺つ猫の様に目を光らせて、じつと俺を観察しているようだ……

(何か言わなくてはっ! ええっと…………何を言つたか、考えてきたの

(一)

いつも冷静沈着なはずの俺の心臓の音が煩い。

背中が、変な汗で湿ってきた。

今まで誰に、どれだけ見られようが、焦ることなどなかつたのに……

(そもそもなぜ、俺が焦らないといけないんだ?)

突然、

「ぐ～ぐ～ぐ～

少女の腹が鳴った。

俺は呪縛じゅばくが解けたように感じた。

そんな自分に呆れるのと、少女の顔が一瞬あかで朱く茹ふきだで上がるのを見て、思わず噴出ふきだした。

気が楽になつて

「元気になつた証拠だな。俺の名は、シーウェルド・レスコス。よ
うこそ、アースリングへ」
練習していた通りに言つて、握手した。

少女の手は小さくて、細くて、荒れていた。

力を入れると折れてしまいそうで、すぐに手を離した。

シーツに絡まつて床にうずくまつてしまつた少女を立たせると、どうやら足が立たないらしい。

あれだけの怪我をおつていたんだ、魔法で治療されたとはいえ、まだ完治してないんだろう。

椅子まで抱えるようにして連れて行く。

最初も思ったが、すごく軽い。壊れそつだ。

頬が何故か熱くなつている気がして

「少し待つていて。何か持つてこよう」
言い捨てるように、慌てて部屋から出た。

ライアと共に少女に食事を運び、血口紹介との世界の話を少しした。

少女は永山 雪羽ながやま ゆきはと名乗った。

まだ小さいのに、受け答えはしっかりしていて、言葉少ないながら礼儀正しかった。

そして、物を食べる仕草が、とてつもなく可愛らしい……
ちいさいサクランボの口に、パクパクと食べ物が消えていくさまは、まるで仔リストのように可愛くて、ずっと眺めていたかった。

話を聞いている時も、時々眉間に皺しわを寄せるのが可愛くて、もつと居たかったのに……

ユキハが疲れたろうからと、ライアに追い出されてしまった。

あたしがアースリンクで召喚された。口笛。

意識もはっきり戻ったし、体力面ではまだまだだけじ 怪我は治つたようだつた。

確かに体に痛むところは無いけれど、ものすごくだるい。

朝、飯もまだだし、着る服もなこので ベッドでローロしていふと 朝一番から部屋を移された。

前の部屋は病室だつたそりで、普通の部屋に引っ越しをするのだそりだ。

別に荷物はないので、自分で移動。

昨日は天使服だったけど、やっぱり寝巻きだったみたいで ライアさんは着替えを用意してくれていた。

ピンクとオフホワイトで、スカートの部分がふわっと膨らんでいる（内側に何層もレースみたいなのが付いている）ワンピース。

さらには
纖細なレースが

フリフリと付いていて

とっても

可愛らしい、乙女なデザインで……

着る前は、ちょっと嬉しかつたりしたんだけど 鏡に映つたのは……

「ホラー……入りましたあ……」

思わず何処かの大衆居酒屋（行つた事ないけど）のセリフを真似てしまいたくなる程の 恐ろしい物体で……

一言で言えば

『お嬢様のミイラ』

お父様に愛されすぎたお嬢様が、不慮の事故で命を落とした後も、娘の死を受け入れられないお父様に毎日世話をやかれ、彼女が生前好きだったドレスを着せ替えられたりしてゐる……

そんな、イメージ。

我ながら、悲しい。

でも それくらい、恐怖を感じる程に似合わなかつた。

だつて……

髪の毛は屋上で切られたままで、不揃いかつ歪なショートカット
だし、
顔はざつそりしてゐるし……（いつの世界に来てさうに頬ほほけ
てしまつた）

何より、肌が力サカサで 色が黒いので、乙女なピンクと合わないのだ。

もつと地味なのをライアさんにお願いしたら、ライアさんも似合わないと思ったのか、用意しますと言つてくれた。取り合えず、新しいのが用意できるまでは、この服で過ごさないといけないんだけど……

(誰にも遭^あいたくないです。)

あたしが気にしていると、
ライアさんが大判のスカーフみたいな布を
ライアさんが着ているドレスの前に付いてる襞^{ひだ}の中から するり
と取り出して、
あたしの頭に被^{かぶ}せた。

(どこに隠してたの？？？)

あたしが、びっくりしていると

「女官の制服には、『隠^{かく}し』があるのですわ。」

とペロリと襞^{ひだ}をめくって、見せてくれた。
そこにはポケットが沢山あって、いろんな物が入っていた。

プロの、七つ道具つてやつですか！

女官の服はデザインが決まっていて、見習い以外は 比較的自由
に生地が選べるそうです。

役職とかは胸のブローチの花の数で分かるようになつていて ゼ
ロから女官長の5つまで……

ライアさんは当然 花5つです。

ライアさんのドレスは臙脂色^{えんじ}でしっかりした生地だけど光沢は抑
えた感じ。

ライアさんの濃い色の金髪によく似合っています。
ドレスの裾^{すそ}が床に付きそうな長さなのに、全然動きに支障がない。

踏んだりしないし、ひっかけたりしない。（単に、着慣れているから？）

『隠し』に道具なんかが いっぱい入ってたのにドレスがふんわりしているだけにしか見えない……

恐るべし、女官服！

あたしが感心していると

「男性には『隠し』のことは秘密ですよ」と口止めされた。

なんでも、「せつかく澄まして、ドレスの中が道具だらけだと思われては、興ざめだから」なんだそうだ。
そういうものなんだろうか？

まあ、顔はスカーフで見えないようになつたんだから、一安心で
ショット、

車椅子に乗せられて部屋を出た。

部屋の外に男の人が2人立っていた。

「移動します。宜しくお願ひします」

ライアさんが2人に頭を下げた。

いかにも、警備員みたいな がつしりとした体型の人たちは、無言で軽く敬礼して

あたしとライアさんの前後に付いた。

ライアさんがあたしに、

「警護の衛兵ですわ」

と教えてくれた。

薄い布ごしに見える範囲でだけど なるほど、そんな格好です。
剣？下げるし、服も軍服っぽい。 甲冑とかは着てないんですね。

(「)の人たち、ドアの外にずっといたのかな？ SPみたいに？)

自分はそんなに危険なのだろうかと、ちょっとドキドキしながらエレベーターホールみたいな所に押して行かれた。

衛兵さんが壁の操作盤を押すと、床の模様が光って、ヒュツ 軽い浮遊感と落下感を感じたら 同じような場所にいた。

車椅子なんて大げさだと思つたけど、乗つておいて良かつたかも

……
ちょっとクラッときた。

廊下へ出ると、入った時の廊下とは全く違つて……

空間移動？ したつてことかな？
上下移動だけじゃなさそうで ほら、光の方向とか違つ

し。

どこまで移動したんだろ？

これも魔法？？

魔法つて便利～～～！

廊下の中央には青い絨毯が敷かれていて、壁の装飾とかもホテルっぽくなっていた。
壁に絵とか掛けてあるし……
宿泊料高そうなんですけど。

その廊下の一番奥の部屋まで、あたしは連れて行かれた。

9話 む引き越し 2 side 雪羽

廊下の一番奥の部屋は、広かつた。

前の部屋ゲストルームでもあたしには十分広かつたんだけど、この客室（中クラスだそうです）は すぐく豪華だ！

他の国から来た使節や官僚に使う部屋らしい。

部屋は2つあって、手前の部屋が居室で、奥の部屋が寝室になつている。

居室にはミニキッチンも附いていて、簡単な料理なら出来そうだ。冷蔵庫にたいなのも組み込まれている。

何も音がしないので、これも魔法で冷えてるとか？

部屋には勉強机やダイニング、応接セットもあって、ほんと暮らせるね。

トイレはシンプル。

タイルは地模様があつてけつと高価そうだけど、機能重視で無駄な装飾は無い。

便器は洋式。（和式だったら驚くよね）

使い方も基本的には変わらない。

ウォシュレットの洗浄と乾燥のスゴイやつ。（紙いらない位完璧）前の部屋は病室だから着いていると思つてたんだけど、標準装備なのか……

お風呂は洋間に出てくる猫足のバスタブだった。

シャワーもある。

このお風呂、使い難いんだよへたね。

使い方分からなくて、初めての時はライアさんが付いてくれたん

だけど

周りに飛び散るし、

お湯がもつたいないし……

その内、慣れるのかな……？

物珍しげに、部屋を覗き廻っていた あたしに

『本当なら国賓級いっぴんクラスのお部屋で、おもてなしするべきといひふべき……』
つてライアさんは謝つてくれてたけど、
そんな居心地の悪そうな部屋は、やです。

朝食が済んだ後 ライアさんが小箱と
新しい服を持って部屋に来た。

「ユキハ様、今日は傷跡を取らせて頂こいつと思つのですが、よろしくですか？」

ライアさんが遠慮がちに聞いた。

「え？ あ……私の傷跡……」

あたしは言葉を失う。

(見られてたつ…)

恥ずかしさで頬が熱くなつた。

(着てた服、着替えさせたんなら当然だよねつ…)

(気付いておけよつ！ あたし…)

何も考えずに、ぼおつと気楽に過ごしていた自分に舌打ちしたい

気分だった。

体に付けられた沢山の傷は、自分が母親から愛されなかつた証だと思つてゐる。

その傷を見られたことは、自分が愛される価値の無い人間だと知られてしまつたようで、心が重くなつてしまつ。

「怪我の治療の際、やむを得ず見てしました。申し訳ございません」

ライアさんが深く頭を下げた。

女官長といふ、たぶん重要な職に着いている人の真摯な態度に、拗ねてる訳にもいかなくなつて

「あ……いえ……こちらこそ、傷を治して頂いたのに……ごめんなさい」

謝つてみた。

複雑な気持ちなんだけど、

それより何より、

さつきライアさんが言つてた事が気になる。

「あの……でも、傷跡なんて取れるんですか?」
(無くせるものなら、無くしてほしいです。)

「ええ。サリエスに治療具を借りてきたので、簡単に治りますわ
ライアさんは、そう言って にっこりと微笑んだ。

驚いた。

(そんな事が出来るの？！　しかも、簡単に？)

「お願いしても、いいですか？」

思わず^{かぶ}歯^{かぶ}り付く勢いで、ライアさんを見上げて　あたしは言つてしまつた。

「もちろんですわ。では、始めましょつか。　服を脱いで、ベッドに横になつて下さい」

笑顔でライアさんに言われ、

手伝つてもうつてヒラヒラお嬢様服を脱ぎ

下着姿でベッドに上がる。

「のベッド、ふかふかで、天蓋^{てんがい}も着いてるお姫様なベッドだ。

仰向けに寝そべつた。

ライアさんはお腹の上にバスタオルをかけてくれて

「すこし熱く感じるかも知れません。熱すぎたら言つて下さいね」と、やさしく言われて　ずっと昔、パーマをあてる母親について行つた美容院の会話を思い出した。

(美容師さんみたい……)

少しおかしくなつた。

傷跡の治療は、特に熱くも痛くもなかつた。

先端がガラスの様な物で光る棒状の治療器具を当たられた部分が、じんわりと暖かく、ちょっと^{かゆ}かつた。

ライアさんは作業に集中してるみたいだし、邪魔したくないので会話がなくて暇だつだけど、

今度の服は地味なのがいいなあとか　じつとして考えていたら

二つの間にか、あたしは「ひとつとしていた様だ。

「ユキハ様、今日はこれくらいでござりまじゅう
ライアさんの声で目が覚めた。
心持、体がだるい。

うつそつと起き上がろうとする
「しばらぐ、このままお休み下され。
休むのが一番ですか。」
少し落ち着いたら、毎食をお持ちしますね
と、ライアさん止められた。

躊躇に返事をして、そのままベッドに寝転がった。

(ヤバイ すこ ダルイ……)

そして 下着姿のまますぐ、元通り閉ってしまった。

9話 む引き越し 2 side 雪羽（後書き）

勉強机＝ライティングデスクです。雪羽の中では勉強机でしかないですが……

雪羽、相変わらず眠つてばかりです。

心身が優れない時は、眠るのが一番だと雪羽は考へています。

10話 呼び方 ~side~羽（前書き）

甘くなりました。

10話 呼び方 side 翼

軽めの昼食を取つて お茶を飲んでいると、レスコスさんが来た。昼休みに、顔を見に寄つてくれたらしい。

あのホラーな格好を見られなくて良かつた。

今は、青色と白の細かいストライプの生地（つよい水色に見える）の
セッパツした飾り気のないワンピースを着ている。

これが似合つかどうかは別にして、人に恐怖を与える事は無いだ
るわ。

（ライアさん、ナイスなセレクトです！）

着替えるときに傷跡を見たけど、すこく薄くなっていた！
何回かしないと、本当には消えないそうだけど、これでも十分ま
しになつたよ！

（もお！感謝だよー！）

純粹に、嬉しい。

コレに関しては、心底、いつも来て良かつたと思える。

「ありがとうございます」ってライアさんに言つたら、

「当然の事ですわ。完全に消えるまでしましょうね」と微笑まれた。

（当然なのかあ。あたしにとつては、すごい事なんだけどな）

アースリングの基準は分からなかから、お言葉に甘えさせてもら

います。

部屋に来たレスコスさんは、今日は昨日と違つ格好をしていた。フード付きマントは無しで、黒いガクラン？みたいな詰襟っぽいのを着ていた。

神父さんの服の方が近いかも・・・
ズボンも黒、黒の皮ブーツを履いてる。聞いてみると、このちが普通なんだそうだ。

昨日はたまたま仕事の都合で着ていたらしい。

あつちが正装？

こつちはサラワーマンのスーツみたいなもんかなと、勝手に解釈した。

レスコスさんは、お茶を飲みながら この世界の色々なことをあたしに話してくれた。

この世界も1年365日で同じペースで時間が流れているらしく
とか
巫女も依巫も、元の世界に還り帰せるとか

(浦島太郎には、ならぬといつて訳ね)
(ちゃんと、帰れるんだ・・・)

昔にいっぴい人が召喚されて、この国が気に入つて この世界で暮らしたこと。

その子孫しか、この世界にはいない事。

レスコスさんは話してみると、中々氣をくで、いい人だった。
話し易かつたし。

(美形で、性格もいいから モテるだろうな～)
などと、なんとなく考えていたら

「堅苦しいから、名前で呼んでくれないか?」
などと難易度の高い事を 言われてしまった……

ファーストネーム呼び捨てはちょっと……
刺激が強すぎます。

(ええっと……なんて名前だっけ? 「記憶力は良い方なんだけどな
……長いし覚え難いんだよね」)

「シ……シー……ウエルド……さん?」
(長い。舌噛みやつ。合ってるのか?)

「シーウェルド」
(合ひてたか。)

「じゃ、シードさん」

(ちょっと略してもいい? でも、年上なのでせん付けでお願いします……)

「え?」

(ちょっと びっくりしてる? やっぱり、失礼か……)

(そういえば、機関車トーロスの鉄道会社オーナーもいちいち『ト
ップハム○ット卿』って呼ばれてたな)

(アメリカ人以外は愛称で呼ばないのか? ハリウッド物しか良く知らないから、会つてすぐにも略すと思つてたけど違うのか?)

(英語の教科書では、ジョンとかマイクとかボブとか
?) 短かつたよ

「表一」、呼びこべーので

(言い訳してみた。)

ああ、判った。つて顔をする。

（）：おひでさん、おはんですか？

微妙な間が開いて

「わんは無しで。シードって呼んで?」「俺もユキハつて呼んでるから」

（殺人的笑顔を浮かべて言つた！ 懲殺されます！ まぶしいデス…… 美形の笑顔は眩しくて耐えられません！）

（「ハハハハハハ……」）めんなれこ、抵抗なんてできません。呼びます、呼ばせて頂きます。田がやられるので、そんな笑顔を向けないで下され……）

(ええ、そりやもひ、あたしなんて、勿論呼び捨てで結構です。)

「…………ハイ。では…………シード…………」

「よろしく、ユキハ」

（何の挨拶だよ。コレ……）

そして、シードはご機嫌で帰つて行つた。意味不明。

あたしは、なんだか疲れて 午後を丸々昼寝に 使つてしまつた。

10話 呼び方 ~ side 雪羽（後書き）

前回に引き続き、眠り落ちです。すみません。

雪羽も、他にすることもないですし、今まで好きに眠つてもいい環境に無かつたもので『寝たいときに眠る』を ただいま満喫中です。

1-1話 考えてみれば ～sine e 霊界（前編）

靈界の ひとつじと

11話 考えてみれば S side 雪羽

マヤであります。

あああああああ～～～ヒマだあ！

未だかにて味わつたことのない、この瞬き！

何もすることかなし！！！

午後をぼほ丸々眠ってしまったお陰で全然眠くない!!!

たるしのも
すいふんましになつて氣にならぬ

する」とか無いって
こんなに苦痛たって事はじめで知りました

テレビもラジオも無いみたいだし…ゲームなんて勿論ない。

(あたしは、したじと黒い王冠……)

娯楽がないよね

あたしが知らないだけだろうけどね……

窓から外見ても、夜だし真っ暗で何も見えないし。

度胸はない。
なぜか？

答え、何か出できそうだから。

(どつちみち部屋の外には、出られないんだけ……)

廊下に衛兵さんが、2人も立つてゐるんだよね。

護衛つてライアさんは言つけど、見張りにしか見えない。

別の人を召喚するかを検討中で、あたしは身柄拘束されてるみたい。

俗に言つ監禁中？

国家機密で極秘人物だそうな。

なもんで、出歩けない。

(あたしなのに……)

しかし、こんな小娘に24時間見張りつけるなんて……

依巫つて何者？

何、するんだろう？

そもそも、あたしに出来ることなのか？

精霊とか見えてないし、神様も見えないし、声とかも聞こえないよ？

……静かである。

壁が厚いせいなのか、建物の上層階だからか……物音がほとんどしない。

やることが無くて暇で……ついつい、いろいろな事に思いを馳せてしまつ。

今まで生きることに必死すぎで、碌々考へることなんてしてこなかつた。

(明日の事より、今日を自分が生き抜く」とを第一にしてたもんなあ～。)

あたし、

戦争に行かされるのかな?
敵を追い払うって 言つてたな。

いや、無理だから。
出来る気もしない。

人を殺したりするのかな?

やだよ! 人を殺すなんて怖い。
そもそも、戦争になつたら、沢山の人を殺した方がいいなんて変。
いやでも、やらされたりして……

だんだん、不安になつてきた。

……
帰りたい

元の世界に……
帰りたい

じわじわと、その思いが持ち上がりつてくる。
あの非道い世界に戻りたいなんて、どうかしていると自分でも思
うんだけど、

されてくるのと、自分がするのでは全く違う事だと思つ。

今まで自分の意思で人を傷つけたことはない。

自分が気付かない内にしてしまつてゐるかも知れないけど……
それでも、自分から進んで傷つけに行つたことは無い。
それを強要されるかもしれない。

いくら親切にされても、理が分からぬ世界は、やっぱり居たくない。

どうしたら、いいのかな？

.....。

此處と自分の世界では、時間の流れが同じだと聞いた。

(じゃあ、今日は卒業式だつたんだ)

何も無ければ、今頃は卒業式も終わり 明日就職先の寮へ引っ越し
して、明後日は初出勤のはずだつた。

あの家から出られて、新しい世界で頑張ろつとしていたのに……

(まあ、此處も新しい世界には違ひないけど……ね)

自分はとことん運に見放されているのだろうか?
いやいや、違う違う。

自分は校舎から落ちたのだった。

大怪我も負つていた。

あのままだつたら救急車で運ばれても、危なかつたかもしれないし、助かっても病院のベッドの上だ。

(むしろハラッキーだつたのかも?)

明日帰れたら、まだ間に合つ。
最悪、明後日までに帰れたら……言い訳とか大変だらつけど なんとかなるんじやないかな?

やつと見つけた、寮のある就職先なのだ。簡単に諦められない。この職場を逃したら、中卒で雇つてくれる所なんて無い。

(しかも、この容姿だし……)

そう、自分で言つのも落ち込むんだけど、とても中3には見えない。

小学4・5年生といったところにしか見えないのだ。
まず背が低い。 140 cmしかないのだ。

そして体重も…… 25 kg

小学生並に小さくて、鶏ガラの様な酷い体。

(よく生きてこられたよね~。 中学校で給食なかつたら餓死してたかも。)

なんせ家で、あたしの食事は無い。

新聞配達とかちょっとしたアルバイトが、あたしの生活費だつた。なるべく家に居ないようにして、寝るときは物入れの中だつた。父親によく似た、あたしの顔を見るのもウザイらしい。
そんな母親から逃げ出せるチャンスだつたのに。

給料は少ないけど、寮があつて食事もついて、自分の金が貯えて……

服買つたり、お菓子も買えるって 夢見てたの……

(……なんだ？ あたし帰らなきやマズイじゃん！)

急に、焦つてきたよ？
のんびりしてると今更じゃないよね。

よし。

シーディーおいつ。
元の世界に帰してつて。
ちゃんと説明して。
自分の事だから……

いい人かもしれないけど、協力できませんって はつきり言おいつ。
でないと、取り返しがつかなくなるから。

11話 考えてみれば ↴ side 雪羽（後書き）

巫女が出てこなくて すみません。

ええ～っと

まだまだ出てきません。

誤字、脱字、ご指摘頂けたらありがとうございます。
ご感想なども頂けると励みになります。

12話 呼び方 ~sideシード(前書き)

話が前に進まないのは解っているんです！
でも、どうしても書きたかったんです。

12話 呼び方～sideシード

真夜中、ユキハを警護する衛兵からの使いに起された。
ユキハが俺に話があるらしい。

(一体、何だらう? 余程 重要な事なのか?)

* * * * *

昼間、ユキハが俺の名前を覚えていてくれたのが、嬉しかった。

「シ……シー……ウエルド……さん?」

ユキハが、とまどいながら俺の名前を呼んだ時は、
他の者に呼ばれるのとは違つ感じがして……胸が熱くなつた気が
がした。

(この感じは何だらう? もつと、ちゃんと呼んで欲しい。)

「シーウェルド」

(ユキハ、呼んでみて?)

「じゃ、シードさん」

ユキハから思わず言葉を聞いて

「え?」

つい、出でしまつた。

「長いし、呼びにくいので」

ユキハが、ダメかな？つて顔をしている。

シーウェルド……長いか？

略称で呼びたいってこと？

俺は他人に略称で呼ばれるのは好きでない。
むしろ、馴れ馴れしい感じがして、イヤだ。

家族は、俺をウイルと呼ぶが、それは親父が息子たち全員に

『シー』と、名づけたからだ。

単純に ややこしいから。

仕方なく、我慢している。

ユキハにもウイルって呼ばそつか？

(.....)

いや。

シードがいい。

これは、名前を略したんじゃなく、
ユキハが俺に付けてくれた名前。
愛称だ。

妙にくすぐったくて、嬉しい。

ユキハだけが呼んでいい、特別な俺の名前にしよう。

でも『さん』は余計だな。

「さんは無しで。 シードって呼んで？ 僕もユキハって呼んでるから」「

俺の顔が、つい自然と笑顔になる。

シード……いんじやないか？ うん。

さあ、ユキハ。

呼んで。

ユキハは赤くなつて、モジモジしながら
「……ハイ。では……シード……」

と言つて、さらで耳まで真つ赤になつた。

(かわいい……)

「よろしく、ユキハ」

俺は、満足だつた。

呼び方一つで、こんなに心が浮き立つなんて。

「こんな子供に愛称よばれて喜ぶなんて、俺は変態か？」と、思わないでもなかつたが、嬉しいものはうれしいし、可愛いものはかわいいのだ！ そう開き直つて、部屋を後にした。午後の仕事は、はかどりそうだ。

部屋に着くとライアも来たところの様だ。

ユキハの部屋で動きがあったのを、敏感に察したらしく。

「こんな遅い時間に 急に来てもうひつ……」「めんなさい」

ユキハが青ざめた顔で、頭を深く下げる。

只ならぬ様子^{ただ}……何があつた？

「いいえ、いいんですよユキハ様。どうなさいました？」

ライアがユキハを安心させるように、やれしゃべり椅子に座らせ

た。

「すいません。レスコスさんにお願ひがあつて……

その……急ぐので、早い方がいいかなと思つて……非常識な時間

だと分かつてゐんですけど……

……どうしても聞いて欲しくて……」

消え入りそ�に、でも必死で何かを伝えようとしている。

(『レスコスさん』に戻つてゐる。シードって呼ぶつて決めたひ?)
と、まづ言いたくなつたが、ぐつと飲み込んで

「どんな事でも 気にせず言って。ちゃんと聞くから
俺は、ユキハを励ますようと言ひた。

13話 焦り sideシード

「怪我、治してもらつて ありがとうございます。
とても感謝しています。

自分の世界だつたら、いんに早く治りませんでした。死んでいたかも知れません。

でも、私、自分の世界に帰りたいんです。帰らなきやいけない
んです。

明日、遅くても明後日には、帰りたいんです。お願いします。
早く、早く私を元の世界に帰して下さい」

田に涙をいっぱい溜めて、ユキハが一息に言つた。

（やつぱり……元の世界が恋しいんだ。）

当たり前の事を言われて、びっくりしている自分に驚いた。
年端もいかない子どもなのだ。両親を恋しがらない訳がない。
いまさらながら、小さい子を泣かせている、自分に腹が立つ。

（シードとか愛称で呼ばれて、浮かれている場合ではなかつた！）

ユキハは目覚めから、特に泣く事も無く
どちらかといふと淡々と今の状況を受け入れている気がしていた。
体の傷跡から鑑みて、きっと酷い環境に置かれていた子だと考え
ていた。

だから、ユキハは元の世界に帰るとは思わないだろうと高を括
つていたのだ。

しかし、

なぜ明日か明後日なんだ？

なぜ、そんなに急ぐ？

理由がありそうだ。

どう聞こうかと迷つていると

「ひょっとして、帰ることできないんですか？　帰れるんですねよね？」

と、聞くのが怖いように、ユキハは恐る恐る尋ねてきた。

「帰れます！　帰れますわっ！　ユキハ様！　ね。シーウェルドっ」
ライアが慌てて言い、「帰ると言え！」とばかりに俺を睨み付けている。

「帰れるのは帰れるんだけど……ごめん。

明日や明後日には無理かも知れない」

俺は、正直に言った。

評議会の決定がまだ出ていない。

「何か、早く帰らないといけない　理由があるの？」
ユキハが抱えているものを、知りたかった。

「！　！　！　無理なんですかっ？！」

先の言葉にショックを受けたようで、ユキハの大きな目が　さら
に大きく見開かれた。

「あたし、明日には引越しするはずなんです。
就職が決まって、その会社の寮に入るんです。

明後日から仕事をするんです。

やつと家から出て、一人で生きれるんです！

明後日に間に合わなかったら何処にもいく所がなくなるんです。
もう家には帰りたくないんです！

それに、依巫^{よりまし}なんて出来ません。

戦争なんて怖いし、敵を追い払うなんて出来ません。
人を殺したくありません。殺せません！！！」

最後の方は搾り出すように、ユキハが叫んだ。
握り締めた拳^{こぶし}が白くなっていた。

ユキハの切羽詰った様子に、俺は咄嗟^{とっさ}に返答できなかつた。

「依巫殿の答えは 私の方からさせて貰うよ」
突然ドアが開き、ラズモント執務長官^{しへいじょうかん}が入つてきた。
驚く間もなく、長官が続けた。

「悪いが話は聞かせて貰つたよ。

依巫殿には、大変な時期に喚んでしまつたようでも申し訳ない
魔道師の黒いローブを纏^{まと}い、無表情の長官は、威圧的で
謝罪も儀礼的なものに感じられてしまつ。

長官は間を置^あかず

「しかし、我々も国民の命が掛かつていて、どうしても召喚しなければならなかつたのだよ。

戦争が起これば、敵味方含めて多くの命が失われる。

それを回避する為の、召喚だったんだ。

いかな列強も『神の声を聞く巫女』と『神の器となる依巫』の居る国に、おそれと手は出せない。

君たちの存在が、戦争の抑止力になるのだ。

君が多く命を救うのだよ

ラズモント執務長官の、濶みの無い弁舌べんせつが冷たい水のよつに俺達を凍らせる。

凍つた空氣きくの中、ユキハが氣丈きじょうに切り出す。

「私は、依巫として使えないのでしょう？ だつたら、今すぐ、帰して欲しいんです」

「検討中でまだ決定しない事だよ。

しかし、もう一度、依巫を召喚することになつてね。

それが25日後だ。その召喚で大人が来れば、子供の君は帰してあげれると思う。

それまで、我慢して貰いたい。 以上だ」

先ほどと比べて、少し和らいだ しかし有無を言わぬ口調と、

高圧的な長官の態度に、

ユキハの目から涙が零れ落ちた。

長身でがつちりした体格で、強面の長官に、ユキハが例え口でも敵かたうはずがない。

声も立てずに涙を流すユキハにライアが寄り添い、そつと抱きしめた。

「では、失礼させて貰うよ」

おうよひ
鷹揚に出て行つた。

長官は自分の用事は済んだ
俺は堪らず長官を追つた。

「……長面！ 今の言い方は、あんまりではありますか？」

「レスコス君。あんまりとは、どういう」とかね?

私は簡潔に事実を告げたまでの事。
訳じゃない

振り向いた長官が、冷ややかに答えた。

もう少し配慮があるでも……その『配慮』をするのは君の仕事だろう？ レスコス君

俺の言葉を遮つて、長官が不機嫌に声を荒げる。

「そもそも、君がちゃんとした説明をしていれば、私が出向くこと

もなく静かに事が進んだはずだから？

苦慮してゐるんだ。

今回の様に騒かしくするよ二「な」とは極力避けて答申しんたよ

長官は軽く溜息をついて、中指で眼鏡のフレームを軽く押し上げ、そのまま暗いグレーの前髪を撫で上げた。

「とにかく、次の依巫が来るまで彼女には居てもいい。これは評議会の決定だ。」

わっぱつと言い放たれた。

「……！」

「判つたな？」

「…………はい」

念を押されて、苦々しく了承する。

この人が、こんな態度の時は 何を言つても覆^{くつがえ}らない。
長官の下に就いて 何度も経験してきた事だ。

返事を聞いた長官は、もう振り返らずに^{エレベーター}術場に消えた。

俺は溜息をつくと、ユキハの部屋に取つて返した。

ユキハはライアによつて、ベッドに寝かされて枕に顔を押し付けて泣いていた。

声を立てない泣き方は、見ていろこのひの胸が締め付けられるようだ。

ライアはやせじく頭を撫でて「大丈夫」と繰り返している。

何か声を掛けたかったが、何も言葉を思いつかず立ちぬく俺に、ライアは「あつち行つて」と手を振った。

何も出来ない自分に、居た堪れなくなつて、部屋を出た。

* * * * *

その日の朝、ユキハに会いに行つたがライアに会わして貰えなかつた。

まだ泣いているやうだ。

次の日は熱が出ていると言われた……

大丈夫だらうか？

俺は大変な事をしてしまつたのだらうか？

俺は、どうしたらいい？

答えが見つからない。

それに、俺のこの気持ちはなんだらう？

ユキハの涙を見てから、おかしい。

心がザワザワして。落ち着かない……

考えがまとまらない。

こんなのは、知らない。

この初めて抱く感情と、出せない答えへの助言を求め、「甘えて

いる」と自嘲しつつ

俺は師の元を訪ねた。

1-4話 梅屋（梅園や）

シードの盤面登場です。

14話 老師

「お師様、起きておられますか？」

誰かが、遠慮がちに部屋のノッカーを打つ。

「シーウェルドか。珍しい」

部屋の主であるザンバルデアは、小声で呟いた。

「起きておる。入りなさい」

今度はシーウェルドに聞こえる声を出し、指先を軽く動かした。
遠隔魔法で扉の鍵を開錠したのだ。

シーウェルドは自分の師匠であり、王立魔道府の最古参である上級魔道師ザンバルデアの研究室兼居室のドアを開けた。

ザンバルデアの部屋は古い本が所狭しと積まれていて、入ってすぐの魔方陣用のスペースを除いては本に侵食されている感じだ。
こんなに本があるのに、ザンバルデアはどこに何があるかを完璧に把握している。

部屋は一見雑然としているが、本人だけに解る一定の法則があるらしい。

ザンバルデアは 左奥の中二階の巨大な机で書き物をしている手を止めた。

「こんな遅くに……申し訳ありません」
シーウェルドが頭を下げる。

「よこよこ。今、茶にしようと思つとつたんぢや」

ザンバルデアは、そう言つて書き物を軽く片付けると、席を立つた。

シーウェルドに掛けようつ椅子を指差し、ザンバルデアは自ら茶の用意をして

大き目のカップに注ぎ、彼に差し出した。

そして自分は、愛用のカップにソーサー、砂糖漬けのジャスミンを添えて

机に戻ると、長年使い込んでザンバルデアの体に馴染んだ これまた大きな椅子に、どっかりと座つた。

ジャスミンをカップに入れてかき混ぜながら

「召喚のことはサリエスらから聞いてある。お前にどうして不本意な結果だつたじやうひ」

いたわるような言葉に、ザンバルデアのやせしきが見える。

「いえ。 それより、お師様、私はこれからどうしたらいいのでしよう……」

「何をじや？」

「依巫の事です。」

「今、泣かせてしまいました。」

客室は長官に張りついていたのでしたね。彼女との話は筒抜けでした。

長官の言葉に、俺は反論も何も出来なかつた……

情けないです。

はあ……

俺は、依巫よましを召喚すること理解したつもりで 全然わかつてなかつたようです。

術式の事ばかり考えていて……後の事とか、ましてや依巫よましの気持ちなんて考えてなかつた。

召喚の儀の前、お師様はこれから先の俺の人生を依巫に捧げる覚悟はあるかと尋ねられました。

召喚の魔方陣を使うことは、その身に呪いを受けるに等しいことだ、今までの自分ではいられぬとも。そして、己の気持ちと、国家の命令とに心引き裂かれるかもと言われました。

その本当の意味が少し解つたよつた気がします」

シーウェルドは湯気の上がる飴色の茶を見つめながら言った。

ザンバルデアは、冬の海のような暗く淀んだ色の蒼い瞳に、ちらりと好奇心の光を横切らせて口を開いた。

「依巫よましに逢うて、己の心境に 变化でもあつたかの？」

「はい。 とても。

なぜ、自分中にこのよつた感情が湧くのか理解できませんが……出逢つて数日の、しかも年端もいかぬ少女です。依巫の何かがそつさせてしているのでしょうか？」

「説明は以前にしたはずじゃが？」

神話・魔方陣・詠唱する呪文、全ての意味を理解するよひにも。たとえ出世の欲に目が眩んでおつたとしても、もつひとつ理解と覚悟を決めておるかと思つとつたが……

やはり、心の部分は理解出来ておらんかったか……

当たり前かもしれんが。

恋もしたことのない者に、恋に墜ち、心を奪われる感覚を説明したところで理解などできんもんじゃ」

（もうちょっと自分の頭でピックルかすると悪つとつたが、早々に音を上げおつて）

ザンバルテアは軽く溜息をつくと、ジャスミンの香りのする茶を一口飲んで、フッと口元をゆるめた。

「じゃが、儂は嬉しくもある。

やつとお前の運命の相手に会えたことと、その女にちゃんと惚れる心を持つておつたことにな」

「言い、微笑んだ。
やはり弟子はかわいいのだ。

シーウェルドは上級魔道師になるために、日々勉強と訓練を重ね、またなつてからも、術の研鑽に血の滲むような努力を重ねていた。

大多数には天才だと誤解されているが、実は努力の人だった。

まあ、シーウェルド本人が、あえて誤解を解く風でもなかつたので、それを知るのは、ごく僅かな人間だけなのだが……

年頃の魔道師達が恋愛に花を咲かせていても、26になるこの年まで恋愛に興味を示さず、ひたすら己の為、貧しい実家を養うために出世を目指す。

(聞くところによると、修羅場もあった様だが、本人は我関せずで何時も通り過ぎていた)

サンバルデアは、そんなシーウェルドに もっと人生を楽しんで欲しかつた。

愛し愛される喜びを味わつて欲しかつた。
たとえ大きな戦禍の影がアースリングを覆つても……いや、そんな時代だからこそか。

しかし、依巫召喚の話が持ち上がり、召喚する魔道師候補筆頭にシーウェルドの名が挙がったときには反対した。

その愛は過酷過ぎると……

しかし、出世を望むシーウェルドに押し切られる形で決定してしまつた。

その結果、思わぬ事態になつたのだが、シーウェルドにとつては喜ぶべきことだと、サンバルデアは思う。

シーウェルドの出世は遠のくが、愛するものが出来れば、それはシーウェルドの人生にとつて大きな恵みをもたらすだろう。

新たな依巫と呪讐者の問題は別にして、だが。

ザンバルテアはもう一口、茶で口を潤すと

「では、不肖の弟子にもう一度、最初からひとつと説明してやる
」

と、長い説明を始めた。

14話 老師（後書き）

シード君、いろんな人に溜息つかれていますね・・・

1-5話 神話（前書き）

世界の設定の話です。
退屈かもしだれません。
飛ばしてもらつても、さして支障はないかと思ひます。

「まず神話からじや。

大昔、女だけが掛かる熱病が流行り、大陸全土でたくさんの女たちが死んだ。

特に子供は罹りやすく女児はほとんど育たなかつた。女は数を減らし、当然男共は女を巡つて争うようになった。

事態は悪化の一途をたどり、戦争が起き、国土は荒れた。そして、女はすべて死んでしまつた。

女がいなければ、子は生まれず男は死を待つだけになつた。

男たちは神に祈り、この世界の創造の神は願いを聞き入れた。

他の世界から女を召喚出来るよう、魔方陣を授けたのじや。

創造の神と他の世界の神との約束で、召喚できるのは魔道師1人につき、女1人だけ。

そして魔道師は召喚した女性を命懸てるまで大切にし、慈しみ、愛し続けること。

また、召喚されるの方も魔道師とは惹かれあう運命にあるらしい。運命の相手同士が呼ばれるのじや。

魔道師の数だけ召喚が行われ、運命の相手とすでに死別したと思われる者以外、女は召喚され、大多数の魔道師は伴侶を得ることができた。

そして、異世界の女は熱病に罹らず、その子供たちも健康に成人

した。こうして、女の数は徐々に増えていき、召喚無しで暮らせるようになった。

創造の神は力を使い果たし、5柱の神に世界を託し眠りについた

「次は、巫女と依巫を召喚する魔方陣について。

シーウェルド、召喚の2大系統はなんじや？」

「えっ？　ああ、戦争時に敵陣に魔獣などを送り込むための『災厄の召喚』と、創造の神から授かつた『福音の召喚』です」

「そうじゃ。そして、巫女と依巫の召喚魔方陣は当然『福音の召喚』がベースになっている。

『災厄の召喚』じゃと害なす者が召喚されるからの。

しかし、当時天才と呼ばれ数多くの魔法書や魔方陣の傑作を残した大魔道師ゲルガーダの考えは、召喚した巫女達の力で戦況を優勢に覆そうとする王とは違った。

彼は、戦に女性を使うことにも、ましてや他の世界から無理やり連れて来て、否応無しに巻き込むことなど許されない事だという考えだつた。

相当抵抗したらしいが王の命令には逆らえず、ついには魔方陣を組みざるをえなくなつた。

そこで大魔道師ゲルガーダは、魔方陣に仕掛けをした。

『福音の召喚』を丸々、一見しては判らないように組み込んだのだ。

ゲルガータの日記によると（死後に発見された）彼の技量なら、

条件に適した者を、神との約束の部分抜きで召喚できる陣を組めたらしい。

しかし彼は、国が召喚することを止められないのならば、せめて召喚した魔道師本人は相手に対して、真摯に誠実に真実の愛情を持つて接するべきだと、
喚ばれる人間に条件をつけて組んだ。

『巫女か依巫である』かつ『召喚する魔道師の運命の女である』

アースリングに数多くいる魔道師の中でも、この条件をクリアで
きる者は少ない。

運よく呼び出せた魔道師も

自分の愛する者を贅に捧げて平静でいられる男など、今までおり
んかった。

王は戦神の器として依巫を使つ。

当然、戦況如何で、依巫の身体は酷い状態になってしまつ。

それを解つても差し出さなければならぬのが召喚者じや。

また、訳あつて依巫を元の世界に送り返した者も、喪失感を一生
拭い去ることは出来なかつたと伝わつとる。

そこまで魂ごと深く繋がつた女しか呼び出されない。

まさに、身勝手な男なんぞ呪われるといふ、大魔道師ゲルガーダ
の呪詛じやな

「送り返された女性がいたことは知っています。どんな事情があつ

たかは、資料に書いてなかつたので、知りませんが……
その女性も召喚者と別れて、心は傷ついたのでしょうか？自分の
世界に戻つたら忘れてしまえるのでしょうか？」

「さあな。

しかし、喚ばれた女は、喚ばれた時点で呪われ、傷ついてある。

お前も、もう分かるじゃ ろう？

ある日突然、理由も解らずに無理やり連れて来られ、
見ず知らずの者たちの為に戦に駆り出され
命を落とすものが多く、心身を壊す者はさらに多い。

人生を奪われとる。

いくら元の世界に送り返されようが 戰争に巻き込まれれば、傷
つかぬはずはない

どこか遠くを見つめて、ザンバルデアは最後の方はつぶやくよつ
に言った。

「自分が呼び出した少女を、送り返すつもりか？」

ザンバルデアは、静かに問いかける。

沈黙が降りる。

シーウェルドは、一口も飲まれないまま冷めてしまったカップを両手で包むように持ち、濃い琥珀色の茶に視線を落として、ぽつり、ぽつり、ザンバルデアに話し始めた。

「理解しているつもりでした」

ザンバルデアの問いには答えずに、シーウェルドが続ける

「少なくとも、頭では……」

「でも、心は全く理解出来てなかつたようです。お師様は、あんなに反対なさつてたのに……」

「愚かな自分に腹が立ちます。

国や自分たちの勝手で彼女達の人生を壊すなんて……どうかして

る。

すぐに送り返したいのに……次の召喚の日が決まったそうです。それまではユキハを帰せないと、長官に言われました。

その日の内にユキハを送り戻せれば、あの子は元の生活に戻れたかもしれません。

でも、もう遅いそうです。

送り戻しても、元の世界の彼女の居場所は無くなつたらしいです。でも、此処に居たら戦争に巻き込まれます。

まだ子供なのに……

なのに……

それなのに、俺はユキハを帰したこと思つてしまつたです。

……俺は一体どうすればいいんですか？」

（おこおこおいおい。初めての気持ちに混乱おつてーまあ、初心と
いうか、なんどこうか……）

「ひとつ言つておくれ、依巫に使われぬのなら『福音の召喚』で喚
ばれてた神話の女達と同じじゃからな。ユキハはこいつちの世界で生
きる方が幸せと異界の神が認めた、お前の伴侶じや。」

「なつつつ／＼／＼／＼！ 伴侶つてー まだ、子供なんですよ？
！」

「子供はな、育つんじや。儂わしにとつては、お前も十分ガキじやわい。
まあ、戻る場所がないと言つのなら、お前の元がその娘の居る場
所になればいい。

戻る気も失せるほど、幸せにしてやれば問題無かるつ?
神話に出てくる魔道師達は、それはそれは努力したそうじやから
な！ お前も頑張れ！

大戦については、長官ラズモントの言つよつて、抑止力として効果はあるじ
やろ？。

今すぐに開戦する事は、まず無いと見ておる。
儂をはじめ、情勢を見ている上の者は、開戦せぬよう動いておる
しの」

ザンバルデアは机の上にある、封蝋で刻を押された数通の密書を見せながら、茶目つ氣たつぶりにウインクしてみせた。

「じゃからして、お前も現を抜かしておらんと戦を避ける手立ての手伝いをせねばならん。ユキハや、次に召喚される依巫の娘の幸せを望むのなら、ぼ~っと手を拱いておれんだぞ。
時代が変わつてきておるのじや。」

魔法の世は過ぎ、剣の時代にならうとしてある。

『神のお膝元』だの『魔道の殿堂』だのの權威など歯牙にもかけな

い奴らが来る。

魔法だの神頼みだのに胡坐あぐいをかいてあるジジイ共に任せとおつて
は あつという間に 我が国は取り込まれるぞ」

「は、はこつー・お師様つー！」

大戦を回避する・・・途方も無い話である。

しかし、それが成されなければ巫女や依巫が巻き込まれるのは必至なのである。

シーウェルドにとつては非常に個人的な理由だったが、火種を消しに奔走ほんそうする日々が始まった。

16 話 遠い日の記憶（前編）～side翼（前編）

記憶の中のお兄ちゃんは、こいつが ものすごく……

あたしは泣かながら「ひと」と思って出したんだ。

ずっと。

まだ、父さんが家にいた頃。

あの頃、よく泣いてた。

学校で同じクラスの男子に

「でつかい目。気持ち悪い。ギャロッパ」って言おうが。「って変なあ

だ名を付けられて……

みんな面白がって、はやし立てられて……

学校の帰り道、神社の境内にあるブランコで泣いてたっけ。
裏手に隠すように木に吊られていて、
誰からも見られないからそこで泣くひき合してこた。

あのとき、慰めてくれたお兄ちゃん……

お前なんだつたつけ?

思い出せないな……

あたしの「ひと」を『お母』って呼んでた。

「おきは強い子だから、大丈夫。辛い田があるけど、おおむかつと
強くなれるんだよ。」

変な慰め方…… その時もそつと思つたけど、下手な同情より、本当の様な気がしてた。

顔、よく思い出せない。

いつも夕方で暗かつたし、ブランコで背中を押してくれてたら、顔はあまり見なかつたかなあ。
会えれば分かるんだろうか……？

覚えているのは、声。

お兄ちゃんの声。

安心する。

大丈夫って言われると、本当に大丈夫になる。

何度も慰めて貰つたけど、

ある日から、お兄ちゃんは来なくなつて、
何年も会つてない。

お兄ちゃん もう忘れちゃつたかな？

あたしなんかと居ても、楽しくなかつたんだろうね。

お兄ちゃんが来なくなつて、あたしも神社へ行くことを止めた。

お父さんが出て行つて、泣いている暇もない位、追い詰められた
から。

なんで、今 思い出したんだろう？

ああ、泣いてるからだつた……

大丈夫って聞きたかったからかな？

ああ……もうそろそろ、泣き止まないと。

でも、もうちょっとだけ泣きたい。

今まで、なんとかやつてきたんだけど、少し疲れちゃつた。

大丈夫、泣き止んだら 元の雪羽に戻る。
そして あたしは強くなる。

だから、もう少しだけ……

16話 遠い日の記憶 ~ Side 翼 (後編)~

やつと、新しい登場人物が？

17話 依巫の資質（前書き）

ひとつ、ひじこ話が出てしましました。

17話 依巫の資質

昼、シーウェルドがユキハに、会いに来た。

ライアがユキハにその顔を伝えると
「ごめんなさい。もう少し 一人で考えたい」と細い声で答えがあった。

彼は何か言いたそうだったが、口を真一文字に引き締めると
「ユキハのこと、宜しくお願ひします」と頭を下げて帰つて行つた。
おそらく、どうしても気になつて 昼休みに様子を見に来たんだ
ら……

ライアは、彼が身内以外で こんな風に感情を表に出すのを初めて見た。

(やはり、召喚した者としての責任かしら?)
(それとも、やつぱりユキハ様は彼にとっての、特別な人なのかな
ら?)

そんな事を考えながら、ライアは部屋にユキハの昼食を運び入れた。

昼近く。

昼食の食器を下げるに部屋に入ると、テーブルには空になつた食器

が置かれていた。

(よかつた。 食べれたのね。 食事が取れたら、一安心だわ)

ベッドのコキハ様を覗くと、よく眠っているようだつた。
その痛々しくも、安らかな寝顔に ライアは微笑みかけて
食器を下げようと、背を向けた瞬間……

ゾクリ

背中に悪寒が走り、全身に鳥肌が立つていく。
息が白くなるほど、気温が下がる。

感じるのは禍々しいほどの靈氣。
いや、この神々しさは神氣と言つた方が的確だらうか……

(何? ハニ……)

(思ひしへ振り返れない!)

しかし、その神氣の出所は唯一つのである。
田を逸らしていても埒があかない。

ライアは 意を決して振り返る。

ベッドに横たわるユキハの目が、ゆっくり開いた。

(―― 金色の瞳――)

薄暗い室内でも、ユキハの瞳の色の変化は明確に見て取れた。金色というだけでなく、仄かに輝きを放っているようだった。

その美しくも畏ろしい目が、つと ライアを見つめた。

目が合った瞬間、

ライアは全身をピンで留められた標本の蝶のようピクリとも動けなくなつた。

無理に動けば、引き裂かれるような……

そんなピリピリと張り詰めた緊張の中

ユキハの姿を借りた『何か』が、声を発した。

『戦神の本柱を、呼び出してはならない。』

一言だった。

ユキハの口から少年の様な声が発せられ、ユキハの目が閉じられる、ライアの金縛りは解け、空氣も元に戻った。

ライアはその場に崩れ落ち、しばらく呆然としていたが、はっと気が付きユキハの様子を確かめた。

そのままは閉じられ、ユキハは何事も無かつたよつて、寝息を立てている。

ライアは無言で部屋のドアを開け、外で警備をしている衛兵に尋ねた。

「何か、変わったことを感じませんでしたか？」

衛兵の答えは、「普段通りで何も無い」ということで。逆に不審がられた。

(一体、どうこう事がしら?)

ライアにも図りかねる問題である。
どうしたものかと思案していると

「…………ん?」

ユキハの声がかすかにした。

ベッドに腰け寄ると、様子がおかしい。
額に手を当てるとい、焼けるように熱い。

(神氣に当たられたんだわ!)

次元の違う存在を、身体の中に入れたのだ。
しかも、かなり高位の神のようだった。

ライアの見たところ、ユキハの魂はなかなか清らかだと感じていたが、精進潔斎しょうじんけっさいもせすいきなり降りるのは、身体に負担が掛かる。魂と体は繋がっているからだ。

150年前でも、依巫よりましは7田た~3田たの精進潔斎しょうじんけっさいを行い、その後、神を降ろしたとされる。

神の降臨は、簡単に行うべきものではないのだ。

たとえ一時でも中身が神になれば、体の穢れは体内に留まれずけんざいかに顯在化けんざいかする。

人としては問題の無い日々のささいな穢れも、神には許されないものだからだ。

その穢れが熱となつて現れたのだとライアは思った。
さすがに専門外なので、急ぎサリエスを呼びに行かせ、取りあえずは 部屋に備え付けの冷蔵庫の氷で体を冷やす。

(こんな形で依巫であることが証明されるなんて……)

この事が評議会の耳に入れば、新たな召喚は中止されるかもしない。

体力の無いユキハに戦神いくさまを降ろすなど…… 体が耐もたない。

王は、依巫よりましの体の事など意に介さない。

国益の前では異世界人の一人や一人壊れようと些細な事柄である。

150年前も、現在も。

巧妙に隠蔽されているが150年前の大戦では依巫が多数使われた。

ライアの夫が歴史の研究者で、大戦の記録をまとめようとしていたため、偶然にも彼女の知るところとなつたのだが……

その夫 ギルバートも事故で亡くなつた。

それが果たして事故だったのか、そうでないのかを知る手立てを彼女は持たない。

ただ、ギルバートはずつと

「召喚した女性を戦争の道具にしてはいけない。この世界は、いつか手痛いしつぺ返しに遭うことになる。事実を隠さず後世に伝えなくては……」とライアに言つていた。

ライアは、夫の遺志を継ぎたいと思つた。

自分なりの方法ではあるが……

それに、歴史や難しい事は解らなくとも

(異世界の人間だからといって…… 女を何だと思っているの? !)

(男の道具じやないのよ?)

と、ライアは純粹に思う。

この思いがあつたから、女官長という立場であるにも関わらず、ユキハの世話係に半ば強引になつたのだが……

(よくよく考えて動かなければ……)

ライアは、いつになく慎重に行動しようと心に決めた。

18話 決心 Side 雪羽（前書き）

雪羽の気持ち。

18話 決心 ↴ side雪羽

人前で、
泣いてしまった。

ものすごく、久しぶりに……

はずかしい。

その上、熱まで出してしまったようです。

普段考えない頭を使つた所為？

(知恵熱つてやつかな……)

ホント、恥ずかしい。

あの時、
偉そうな男の人に、希望をバッサリ切り捨てられて、つい取り乱
してしまいました……

シードとライアさんが、あんまり優しいから お願いしたら帰れ
るかなーなんて事を考えてた あたしが甘かったんです。
自分の立場を、今更ながら認識させられました。

あたしには、決定権も自由もないってこと。

この国の人にとって、あたしは道具でしかなく、役に立つか立た
ないかだけ。

そうだね、そういえば最初に聞いたね。器だつて。

中身は関係ないんだよね。

泣いてる間、ずっとライアさんが頭を撫でてくれて……
すごく慰められた。

熱でうなされてる時は（あんまり覚えてないんだけど）おでこを
タオルで冷やしてくれた。

アレって、ホント気持ちいいね！

普通お母さんって、きっとこんな感じなんだろ？……って、う
つとつしちゃったよ。

ライアさん、きっと家では 優しいお母さんなんだろ？……

愛情をたっぷり注いで子育てしてそう。

あたしに付わっちゃうのは困つただろうか？

ライアさんの顔を そつと見てみる。
初めて見るライアさんの深刻な顔……

目の下にクマまであるよ……

ひょっとして、寝てない？

世話係って言つてたし、あたしが泣いたり、熱出したりしたらず
つと付いておかないとけない規則とか？

それで、帰れない？

あたしつて、こんないい人に酷いことしちゃつてる？

お仕事の規則とかでも、あたしの為に “こめんなさい”。 申し訳
ないです……

あたしが、マイナスオーラ全開で、どう声を掛けようかと迷つて
様子を伺つていると、考え込んでたライアさんが、フッと視線を下
ろしたので、目が合つてしまつた。

「ライアさん……」めん…なさい……それ……と……ありが
と……「。」

熱で喉が嗄れてしまつて、無様な声しか出なかつた。

慌てて上半身を起こすと

ムギュ～～～～

ふくよかなライアさんの胸に 思い切り抱き埋められた。

「じめんなさい。 じめんなさい。 私達は間違つています。
何も知らない貴方を、私達の国の都合で有無を言わせず連れ出し
て、用が済むまで帰さないなんて…… 勝手過ぎますわ……」

ライアさんが泣いている。

会つて間なしで、しかも他人の あたしに同情して泣くなんて
なんて優しい人なんだろう……

あたしの召喚も、別にライアさんが決めた事でもないだろう……

(ありがと。 ライアさん。)

いっぱい泣いたら、すつきりしたし、もう泣かない。

もう、心配しないで、ライアさん。

あたしは強いの。

泣いたから、もつと強くなつたはず！

泣いても、誰かが助けてくれる説でももないし。

これから身の振りを考えたよ。

あたしは、ここに暮らす。

まだ、あたしを抱きしめて謝つてこのライアさんの腕から逃げ出して、真っ赤意に充血している ライアさんの目を見て、今度はしつかりした声で言った。

「ライアさん、ご迷惑かけました。 ありがとうございます。

泣いてすつあつしました。

今から元の世界に帰つても、あたしの居場所は無いので、此処に置いて下さご。

あたし、ここで暮りじめます。」

18話 決心 ↴ side 雪羽（後書き）

アクセス・お気に入り登録ありがとうございます。

今回は、雪羽の気持ちを書きました。

次回からは、シード側で進みます。

19話 慢れない事をすると
1 side sheer (前書き)

シーウェルドの過去

19話 慣れない事をすると 1 ~ side シード

終業時間の少し前、

ライアからユキハの熱が下がったと連絡を受けた。

(遠方に出向いている時でなくて よかつた)

すぐにでも遭いに行きたかったが、別れた時の泣き顔が目に焼きついて離れない。

何か、ユキハが笑顔になる事をしたかった。

女の子が喜ぶ事なんて、今まで考えたこと無かつたんだが……

兄弟は多いが男ばかりで、参考にならない。

一番身近な女の子といえば従妹のフロリアになるだらうか、……しかし

(あいつは、何をやっても喜ぶからな。 やはり、参考にならん。)

なにせ、ろくろく話してない、しかも異世界の女の子供が 好むものなど想像出来ない。

(そうだな、まだ子供だから菓子くらい食べるだらう。)

庁舎の売店で菓子を買って持つて行くことにした。

* * * * *

* * * *

シーウェルドは子供の頃からよくモテた。

アースリングの美的基準からいつても、かなり美形の部類に入る顔と、魔術の才能に加え勉強も出来たせいだ。
(魔術と勉強に関しては、本人の努力に寄るところが大きいということは、恋する乙女の眼には映らないらしい)

この年になるまで、自分から言い寄つたりする必要も無く、相手から告白されて、なんとなく付き合つパターンを繰り返していた。

しかしそれも、「私の事が好きなら〇〇してくれても、いいじゃない!」とか

「私と勉強、どっちが大事なの?!!」だとか
「私の体が目的だったのね? 非道い男!」などと女の方で
どんどん話が展開されて、いつの間にやら、冷たい人の烙印を押されて別れるのが、常となってしまった。

健康な男子だから所謂大人な雰囲気になると反応するし、行為そのものはむしろ好きなので、彼女からの誘いは拒んでいなかつた。だからだろうか?

シーウェルドにしてみれば、無理やりなんてことはしなかつたし、合意の上でのコトならば何の問題もないと考えたのだが……イヤだつたのか?と悩むところである。

王立魔道師養^{アカデミー}練所では魔術の勉強や、技の習得に時間を掛けたかったので、デートといわれる外出も、頻繁にはしなかつた。

シーウェルドは冷たい男だなどと元彼女達が吼えたために、一旦
はモテなくなつたものの、
「クールでそつけない所も素敵！きっと、私だけには優しくしてくれ
れるはず！」

などと妄想を抱く一部、いや 割と多数の者に却つて人気が出て
しまつた。

しかしその当人としては そもそも、恋愛に執着や興味など 大
して無かつた。

というか、何故自分勝手な理論を振りかざして 盛り上がるの
か、理解できなかつた。

シーウェルドが魔道府の登用試験に合格出来てからは、執務室の
激務のお陰で、くだらない事に付き合わされて時間を無駄にするの
が すっかり嫌になり、割り切つた大人の遊びができるひととの関係
だけに留めていた。

その付けが回ってきたというべきか、シーウェルドは女の子を振
り向かせるテクニックなど持ち合わせていない。

試験をすれば、さしづめ 筆記も実技も落第といつところだろう
か。

* * * * *

ユキハを見舞う為に、いつたん執務室に戻つて机を軽く片付けて

いると

突然、何者かに後ろから羽交い絞めにされた。

「ウイル～ちゃん……こんなに早く帰り支度なんて、どうし
うた～の～？」

好奇心とひやかしに満ち溢れたこの声の主に

「ロニー。耳に息を吹きかけるのは、やめてくれ。」

俺は冷たく言い放つた。

ロニーことロナルド・ベックフォードは執務室の同僚であり、王立魔道師_{アカデミー}養鍊所からの友人である。

茶色のくせ毛を短く刈り込んでいるが、最近は散髪する暇がなくて伸び気味だ。

背はシーウェルドと殆ど変わらない位なので、羽交い絞めにすると自然と口が耳の位置にきてしまうのだが、ふざけるのが大好きなロニーは、毎回 僕の耳元で囁く事にしているらしい。

「え～ダメえ？ だつて面白いんだも～ん。それより、ねえね
え、あの娘ん_こト_コ行くの？」

熱下がつたんだつてねえ～。 よかつたね～ ウィル！」

俺が何度も注意しても、ロニーの甘つたるいしゃべりかたは直らず、
ウィルと呼ぶなど いくら言つても聞いたためしがない。

はちみつ色の目を楽しそうに細めて、無邪気な笑顔を見せられると、しかめつ面の自分がバカバカしくなつて、結局いつも流してしまうのだ……

執務室に在籍する時点で、無邪氣であるはずもないの。」

「情報、早いな。」

「情報は命。常識でしょ。しかも、話題の依巫様の情報は網張あみって当然でしょ？」

「ああ、僕も顔見たいなー。いつ会わせてくれるの？」

「熱、下がつたばかりなんだよ。怪我けがしてたし。お前みたいに騒がしいの、連れて行けるか。」

「ええ、騒がしくないよう。でも、まあ、熱々などこりをお邪魔してもいけないし、また今度にしてやるよー。」

ロニーはそう言つて、ニヤニヤ笑いながら、さつと自分の机に向かおうとしたので、俺は慌てて

「ちょっと待て、ロニー。あの子はまだ子供だぞ！ 僕を変態みたいに言つなー！」

俺が喚よんだ以上責任があると思つから、気にしているだけだ。今日も、ちょっと見舞いに菓子を持って行くだけだしー！」

誤解は解いておかなければ！ とばかりに訂正を入れる。

ロニーは首だけ振り向いて

「あーはいはい。お見舞いに行くだけねえ、人の悪い笑みを浮かべている。」

「君は、その子供相手に右往左往してゐるだけねえー、完璧に面白がっている風だ。」

「で、お菓子、何処のにした？」

当然のこと様にロニーに聞かれた。

「ん？ 何処つて、1階の売店 「… はい？！ おい！ あ
りえないし！」

ロニーに叫ばれた。

執務室に残っている全員の視線が俺たちに集まる。

「ロニー…声つ 大きい…」

ロニーの口を塞いだ。

それなのに

「ウイル。 それはないよ。 可哀想だよ。
好きな女の子の見舞いの品が売店の菓子つて！ ありえないし！
小腹が空いて、自分で買うのとは違うんだよ！ も少しマシな店
で買わないと！」

ロニーはすごい勢いで まくし立てた。

好きな女の子ってなんだ。

売店は、ちゃんとした店だぞ、割と。
と、俺が反論する前に

「はいはいはい。 どうせ、店知らないでしょ？」

「コレは今、女の子たちで流行つてる店だからね！」

何買つていいか、判んなかったら 店員におすすめのを聞くんだ

「…」

そう置み掛けて、ロニーはメモにいくつかの店の名前と、地図を
サラサラッと書いて、俺に手渡した。

(子供じゃないんだから、菓子ぐらう自分で選べるさ)
と思ったが、口に出さず

「詳しいな。よく行くのか?」
とだけ言った。

「ウイルと違つて、僕はモテないから努力しないとね。」

口を尖らせてそう言つが、ロニーもなかなか整つた顔をしている
と思う。

ぱっちらとした目と大きめの口が印象的で、笑うときに出来る笑え
窪が可憐らしいと 以前付き合つてた女が褒めていた。

「はい。はい。早く行つた行つた! 人気だからね。遅くなる
と、売り切れちゃうよ!」

言い返せないまま ロニーに執務室から追い出された。
しかし、ユキハの喜ぶ顔が見たいわけだし、折角教えてもらった
菓子が売り切れるのも困るので、俺はメモの店に急いだ。

19話 慣れない事をすると 1-sideシード（後書き）

基本的にシーウェルドは 他人の気持ちに無頓着ですね。

20話 慣れない事をすると 2～sideシード

俺は、女子を甘く見ていたのかも知れない……

ロニーに教えてもらつた店は、じとじとく仕事帰りの女子で溢あふれ返つていた。

しかも

(選べない……)

色とりどりの菓子は、どれも綺麗なのだが、普段から甘いものをあまり食べない俺には、見た日からの味の予想は、全く不可能だつた。

しかも、残り少ない菓子に対する彼女達の情熱は凄まじく、俺は店員に選んでもらつて、よつやく一箱手に入れることが出来た。

美しい包装紙で包まれたソレは（菓子の名前など忘れてしまつた）

ピンクで光沢のあるリボンが掛けられ、じ丁寧に小さな造花まで添えられている。

よくもまあ、食べる前に捨ててしまつような物に凝るものだ、とあきれる反面、

こんな綺麗でおいしそうな物を渡されれば、女の子がつい嬉しくなる気持ちも解る気がした。

(ユキハも喜んでくれるかな？ とりあえずはロードに感謝だな。)

喜んでくれるといい。

前回泣かせたつきり4日会っていない。

ユキハは俺が知っている女達とは、まるでタイプが違うので どうこう態度で接すればいいのか、いまひとつ自信が持てない。

ユキハの泣き顔は、なぜか俺に痛烈な打撃を残していた。

今日もまた、泣かれたら……

(いやいや。泣くような材料はないぞ。)

4日経てば、気持ちも落ち着いて いい頃だらうし……

(今日は、大事な話もしないといけないし！)

気を取り直す。

店を梯子して、すっかり時間を食ってしまった。

俺はあまり遅くなる前に、ユキハの元へ着こうと道を急いだ。

その時。

「 ウィル？ ウィルじゃない？」

呼ばれた方を 振り向くと
声をかけてきたのは、従妹いとこのフロリアだった。
四つ角の中央にある噴水のそばで、数人の女友達と一緒にようだ。

「 ……ああ、フロリア。 久しぶりだね。」

急いでいたが、無視もできず挨拶あいさつを交わす。

「ええ。 こんなに会わないのって、初めてじゃないかしら？ もう
3ヶ月よー。」

フロリアは両手に花束を抱えて、満面の笑みを浮かべた。
まるで花がほころぶ様だ。

美人で華やかな雰囲気のフロリアに、自然と周囲の男達の目が集
まる。

「 フロリア、すごい花束だね。」

何があるのだろうか？ すぐ機嫌がいい。
俺も彼女の笑顔に釣られて 少し笑顔になる。

「 そうでしょう？ ねえ。 ウィル……おば様から何も聞いてない？」

フロリアが上目遣いに、チロリと俺を見上げる。
ピンクの可愛いドレスの胸元が少し広くて、目の遣り場に困る。

(何だろう？ 何かあったかな？……記憶にない)

俺が何も言えないまま 突っ立つていると

「わたし、魔道府の研修生に選ばれたの！ すごいでしょ？」

“えっへん”と聞こえてきそつた得意げな顔で 誇らしげにフロリアが言い、形のいい胸を張る。

（ああ。そんな事、母さんが言つてた気がするなあ。）

召喚者に決定してから、いろいろ忙しくて家族の事なんて 気にする暇がなかつた。

花束はお祝いで貰つたのか？

頭の中で、完全にスルーしてた……悪い事をしたな。

「おめでとう！ すごいな！ フロリアがんばったんだね。」

お祝いを贈れなかつた俺は、言葉だけでもと、心から祝福した。

魔道府の研修生は狭き門だ。

フロリアが研修生に選ばれる程、優秀だとは知らなかつた。

あの小さかつたフロリアは、王立魔道師養^{アカデミー}練所で、よほど頑張つたんだろ？

「ありがとう、ウィル。 ウィルにそう言つて貰うのが、一番嬉しい！」

フロリアが、頬を紅潮させて叫ぶ

「執務室に配属されたらしいのになあ。 そうしたら、一緒に仕事

できるの!」……

「うつとつ、夢見るよつて言つてるので

「ははは、執務室は忙しいよ?
現実も見るよつて言つておく。

実際、過酷と言つてしまつても いいだろ?。
だから、今 若い女は執務室にはいない。

「「めん……フロリア、そろそろ……」

フロリアの友人が申し訳なさそうに声をかける。

「あつ! もう時間? ウィル「めんなさい、わたし行かなきや。
教授が祝賀会をしてくださるの!」

「「うつちじこせ、悪かつたね。もう俺も行くよ。」
(俺も、ユキハの元へ急いでいるんだ。)

そう言つて、俺は なにげなく手に持つた菓子の箱を振つてしまつた。

フロリアの視線が箱に集中する。

「ウィル! ひょつとして、それつ!」

(しまつた!)

獲物を見つけたフロリアは、まるで女豹めひよだ。

しなやかに、確実に獲物えものを狙う……

俺を含め、俺の兄弟達は『小さくて可愛い従妹』というこの女

豹に連戦連敗し続けている。

俺は嫌な流れについて言葉がにじる。

「ああ、そう、これは……（ユキハに持つて行くお菓子なんだ）」

大事な祝い事を忘れていた罪悪感もあって、ズバッと本当の事が
言えない……

フロリアのエメラルド色をした綺麗な瞳に、ブワッと急に 泪が
浮かぶ。

（何？ どうした？）

「ウイル、ありがとう！ とっても嬉しい！ わたしがそこのお店
のお菓子が好きって知つてたんだ……」

「え？」

（何？ この展開……つー フロリア、ちょっと待つてくれっ！）

気が付けば、ユキハの菓子はフロリアの手にあって……

フロリアの、感激でうるつむした瞳を見てしまつては、違ひとは言えず……

結局、俺の中は空で

フロリアは白慢の金髪巻き毛を優雅に揺らして、俺に「またね！」と満足げな笑顔で手を振ると、友達と会場へ行つてしまつた。

一体、何が起つたのだ？……

呆然とする俺に、夜を告げる神殿の鐘の音が虚むなしく響いた。

21話 慣れない事をすると 3 ~sideシード

通行人にぶつかられて、俺は正気に戻った。

(俺は、何をしてるんだろう?)

あんなに苦労して手に入れた菓子なのに……

ユキハの事は、部外秘だからフロリアに話すわけにはいかないん
だけど
どうにか言ひて……

.....。

でもまあ、
フロリアのおねだりに逆らえた事など、一度もなかつたんだから
.....
いつも、あの潤んだエメラルドの瞳で訴えられると、それが我わがままであつても、ついついきいてしまうのだ。

自分にとって、フロリアは我わがままで可愛い従妹いもうとなのだから。

本格的に夜の帳じよじやくが降りてきて、俺は急いで庁舎1階の売店へ向かつた。

ロニーが教えてくれた店は、とっくに品切れしているだろうし、

知らない店に入つて悩むより いつも利用する売店の方が 手っ取り早い。

(まあ、最初は売店で買つ予定だつたし……元に戻つただけだ)

とにかく、ユキハの顔を見に行くのが第一目的だから、と自分に言い訳をした。

胸がチリッと痛んだが、気のせいだと自分を誤魔化し、売店で菓子を選んでいた。ユキハの部屋に急いだ。

ユキハの部屋にはライアも居て、丁度ユキハの早い夕食が終わつたところだった。

皿が空になつてゐる所を見れば、食欲もありそうだ。

泣いてすつきりしたのだろうか？

元気そうなユキハを見て、俺は少し心が軽くなつた。

「シードさん。『心配かけました。なんか 熱まで出しちゃつて…すみませんでした。』

ユキハがペコリと頭を下げる。

「ああああ。もう大丈夫なのか？」

頭を下げた仕草が、小鳥に似ていて 思わず見とれてた……

「はい。ライアさんが ずっと看病してくれたので すっかり良くなりました。」

「そうか、それは良かつた。」

「これ、大した物じゃないけど食べて。」

俺はユキハにさつき売店で買った菓子の紙袋を渡した。

「私ですか？ ありがとうございます…… 開けてみても？」

俺がうなずくと、ユキハは がさごそ音をたてて袋を開けた。

「わあ！ お菓子ですか？ こんなに沢山貰つていいの？ ああ… いろいろある…」

ユキハが目を輝かせて菓子を並べる。

「シードさん！ ありがとうございます！ すばくうれしいです！ おいしそう～」

ユキハは、菓子を机の上に 全部きれいに並べて眺めている。
にじにこして、包み紙の絵を見て、ちょっとニオイを嗅いだりして嬉しそうだ。

小さな花が揺れているみたいだと思った。

ユキハのはしゃぐ姿を見るのは、ものすごく楽しいことだと、俺は知った。

ニコニコしている俺と

お菓子にはしゃぐユキハを見ていたライアが
泣い顔で言つてきた。

「シーウェルズ。これ……ユキハ様へのお見舞い？」

言外に

『お見舞いに売店の菓子なんて！ 沢山あればいいってもんでもないでしょー。』

「……いや、まあ……食べるかな?」と思つて……」

ロニーに菓子店を聞くまでなら、堂々と見舞こと言えただらう。

(俺は、ちやんと買ったんだよ。持つてこられなかつただけなんだ)
と言つてしまいたい。

「ありがとうございます。ますます元気になりました! 全部食べます! 楽しみです!」

「ユキハが笑顔で言つてくれる。

(ああ、ユキハはいい子だな。次は絶対、ちやんとしたお菓子にするからな!)

と、俺は心に誓つた。

ライアは、ユキハの喜ぶ姿に苦笑しながら

「ユキハ様、もつ夜ですからね、一つだけにしましょうね。後で、歯を磨きましょうね。」

やう言つて、菓子の中から一つを選んでユキハに手渡した。

まるで母親のようだ。

すまないね。虫歯になつそつな物で。

「ライアさん。これ何ですか? 豆の絵が描いてあるけど……」

手渡された袋を見て、ユキハが無邪気に尋ねる。

ユキハは、こつちの字が読めない。

チョコの外装には確かに茶色い豆の絵が描かれている。

「ユキハ様。これは『豆チョコ』です。

豆のサヤがチョコで、中に豆の形のクッキーが入っています。豆、ユキハ様の世界にもあります？

極まれにクッキーの代わりに飴が入っている『当たり』があります。

それに当たつたら、その日一日幸せに過ごしると子供達に人気の菓子ですよ。」

ライアがこりつて説明する。

「俺は当たったことないけど。」

子供の頃、兄弟には当たるのだが、俺には当たらなかつた。

ユキハは面白そうに「へへ～」と言しながら、豆チョコを食べ始めた。

「チョコって、名前もだけど味も、あたしの世界といつしょだ～。不思議～。おこしーー！」

などと関心している。

昔に召喚された女達は、故郷の味を懐かしんで、色々なお菓子や料理を再現したそうだ。

子供は母親の味を受け継ぐ。

母親の影響は大きい。

だから、この世界は食生活のみならず、全ての事に於いてユキハ

の世界と似て当然なのだ。

「豆チヨ」を喜んで食べるユキハに、ライアは温めたミルクを出し自分と俺には、「コーヒーを入れた。

和やかな時間が流れる。

これから仕事を、ちゃんとユキハに言わないといけない。

手土産の菓子に時間を取られたが、俺は本来の目的である
今後のユキハの身の振りを伝えようと

「ユキハ。」

と声を掛けた。

2-1話 慣れない事をすると 3 ~ side sheer (後書き)

お氣に入り登録 ありがとうございます！
テンション上がります。

22話 いれからのはじめ～sideシード

ユキハは、ひとしきり口を堪能^{たんのう}していた手を止め、不意に居住まいを正して、俺の方を見た。

「シードさん。長廊をどの話を聞いて、いろいろ考えました。」

ユキハの方が、先に話しだしてしまった。

「あたしは、1ヶ月後に元の世界に帰つても、居場所がありません。だから、私がもう少し大人になるまで、ここに置いてもらえませんか？」

もちろん、こんな豪華な部屋じゃなくて
もつともつと小さくて、ボロい部屋でいいですし、
できる仕事を見つけて働いて、自分で食べていきます……

それとも、こいつらの世界では私みたいなのは、働き口あつません
か？」

そこまで一気に言つて、真剣な顔でユキハが口を噤^{つく}む。

俺は、彼女の勢いに押され気味に

「働くつて……ユキハはまだ子供だろ？ 子供はまだ働くかけていいんだよ。」
と答える。

あれから副長官と相談して話を詰めたが、結局、新しい依巫の召喚が済んでから

俺の実家で引き取るという事になった。

両親にだけは話をして、了解も得てある。

(大喜びの、大はしゃぎ、熱烈歓迎だった……なぜだか)

「ユキハ位の年なら、アースリングでは
魔法の才能のある子は王立魔道師養^{アカデミー}練所^{ヤルド}に入学するし、
それ以外は各職業組合で修行や教育を受けている。
よっぽどの事情がないと、子供は働かせないんだ。
だから……」

「あの……あたし、いくつくらいに見えます?」

「? 10歳くらいかな? それより下なのか?」

「……すみません。あたし、背が低い上に痩^ヤせてるので幼く見え
ますが、15歳です。」

「……えええええつ……」「

ライアと同時に叫んでしまった!

見えない。

全く15歳には見えない。

せいぜい8歳か、いつて12歳。

「えりねどり見ても15歳は無理。

「あの……コキハ様の国では、皆様15歳でそのよつなお姿なのですか？」

ライアがどう質問したらいいのか苦慮しながら、でも好奇心には勝てず、コキハに尋ねた。

「いいえ。私が特別小さいんです。

栄養不足ですかね？ 私の国でも10歳位にしか見てもうれませ
んでしたよ。」

悲しそうに笑う。

「だから、働き口を見つけるのは大変でした。

見つかなくて、
最後には校長先生の知り合いで会社が雇ってくれて……

それなのに、多分、あたしが逃げたって事になつてるんでしょう
ね。突然、居なくなつたんだですから……」

豆チヨンの袋のシワを伸ばしながら、肩を落とす。
小さいコキハが、ちらに小さく頼りなく見える……

だから、あんなにあの日に帰ることにだわつてたのか。

後で帰つたといひで、居場所がないと泣いたのは、

そういう事情があつたからなんだな。

家にも居れない理由があるんだろう。

胸が締め付けられるように、痛んだ。

どんな理由あるんだろう？

ユキハの事は、何でも知りたい。
出来ることなら、なべさ慰めて……

でも、俺の方から、特に今すぐ 聞きだす様なことは したくな
い。

ユキハが、自然に自分から 話してくれるのを待つつもりだ。

彼女の目にうつすらと涙が浮かんでいる。
声もかすかに震えているようだ。

不安なんだろうな……

思つていたより年が大きかつたとはい、まだ15歳だ。

思わず抱きしめてしまいたくなる衝動にかられたが、
グッと堪え、俺はユキハを安心させるように、
できるだけ優しい声で語りかける

「ユキハ。

ユキハが居たいだけ、

俺はユキハに、この国に居てほしいこと思つてゐよ。」「

ユキハの顔がパつと明るくなる。

ユキハの小さい手に、俺の手を添える。
少し冷たい……

暖めるように、両手で包み込む。

(言ひづや。本題。)

「ユキハが良ければ、俺の両親の家で、暮らさないか?」

(言つた!)

「え?」

ユキハが驚いた顔をする。

(そんなに驚かないで欲しいんだけど……予想は していたけど)

「ユキハには、俺の両親の家で、暮らして欲しいと思つているんだ。
本当は、喚よんだ俺の所へ来るのがいいんだろうけど
仕事で家には、殆ど帰らないから……
家つて言つても、居住棟の一室なんだしね。

何かあっても、常には居てあられないと

実家なら、両親や弟の誰かがいるし、一人きりになる心配も無い。
それに、いろいろ教わる事も出来ると思う。

俺も兄貴も出でてしまつてゐるから、部屋も空いてるんだ。だから……

……

「…………。」

黙っていたコキハの口が開く。

「でも……シーデさんのお世話になる理由が、わかりません。一緒に住むなんて……そんな……召喚者？の義務とかですか？義務にしても、お世話になつた分を あたし、何も返せません。どこか、働き口を紹介してもらえれば 嬉しいんですけど……3年。できたら、18歳になるまで 帰りたくないんです。そんなに長い間、シーデさんにも、シーデさんのご両親にも お世話になんて なれません。」

以外にも、きつぱりとコキハが言い切る。

ああ…… コキハ、遠慮しそぎだ。

コキハは、俺に無理やり呼び出されたんじゃないかな。
もつと、いい待遇を求めてもいいはずなのに……

遠慮するコキハに、なんとか実家に住むことを承知してもらおつ
と……

こんなこと書つのは自分でも、ちょっと姑息かと思つたんだナビ
「コキハ、15歳はアースリングでも まだ子供になるんだ。
みんな、どこの組合か王立養練所で勉強している。
ただ、コキハは、たとえ依巫から外れたとしても、依巫の素質が
ある事には 変わり無いから

普通の子供と同じように組合に入れるところのは 魔道府として
は、ちよつと無理で……

街で何かの職に就くのは、難しくと思つんだ。

だから、遠慮しないで……

「……すみません。シードさんに迷惑かけてますよね。ごめんなさい。」

すぐ、中途半端な存在で扱いに困りますよね……あたし。」

そう言つて、しゅんとなつてしまつたユキハに
俺の心は、強烈な罪悪感に襲われた。

俺は、ユキハをどうしたいんだ?

落ち込ませて、どうするんだよ!自分!

(えええっとーーーーー)

思わず、ユキハの手を握る両手に力が入る。

「ユキハ様。
ユキハ様がそんな風に気に病む必要は、爪の先ほどもございませ
ん。」

じつと、俺とユキハの話を聞いていたライアが、口を開いた。

「ユキハ様。シーウェルドは、ユキハ様を独り占めしたいのですわ。
ユキハ様を組合に預けてしまったら、
忙しいシーウェルドは滅多にユキハ様に会えなくなつてしまいま
すもの。」

その点、自分の実家ならいつでも好きな時に帰ってきて、ユキハ様の顔が見れます。

それこそ時間を気にせず、存分に。遅くなれば自分も泊まればいいんですもの。朝まで一つ屋根の下で一緒に居れるのですわ。」

「なつづ／＼／＼／＼／＼ライアつ　俺はそんなつもりで言つたんじや
！」

「あら。　そうかしりっ？」

「そうだよ！　俺はつ

「ずっとユキハ様の手を握り締めていて……今更、照れなくとも……ねえ。」

クスッと笑う。

バツと一人して手を離してしまつた！

「離さないでいいのに。誰も召喚者には、なんにも言わないのにねえ～」

ニヤニヤ笑いを止めてくれ。

ユキハは真っ赤になりながらも、何の事か分からぬ顔をしている。

ライアはユキハに微笑みかけながら

「ユキハ様。シーウェルドの下心は置いておいても、レスコス夫妻は、明るくて親切ないい方々ですわ。子供が大好きで、とても誠実です。

教養も有り、常識人です。だからユキハ様がアースリングで生き

ていかれる基本を学ぶのには、とても良い環境だと思います。私も、彼らなら安心して任せられますわ。」

「親を褒められて、嬉しいけど多少こそばゆく……しかもユキハは、ライアの言葉で強烈に納得した顔をしている……つい。つい口が……」

「人の親のことを、偉そうに……」

俺の呟きを、ライアは聞き漏らす訳も無く

「シーウェルド。貴方の両親とは、子供の貴方より、私の方が付き合いが長いんですよ。

それこそ学生の頃からの付き合いですからね。

よくよく解っているんですよ。

私はユキハ様のお世話が出来ないんですから、後任の人選は私の納得のいく者でないと！私の、純粹なる愛情の表れです。ユキハ様の行く末に心を配るのは、当然のことですわ。」

ぴしゃり、と言われた。

ああ。言い返せない……

「それに、召喚者にとって、喚んだ女性は何より大切な存在です。だから世話になってる、なんて決して思わないで下さい。むしろ、来てやつたんだから、女神の如く扱いなさい！位の気持ちで十分です。シーウェルドは、こう見えても執務室勤務の高給取ですから、思い切り我侭言って贅沢しても罰はあたりませんわ。」

すると、ユキハが

「我侭も贅沢もしようとは思いませんが……」

ライアの言い様が面白かったのか、笑い声をあげた！

「ライアさんがそうおっしゃるなり、あたしシーデさんの実家に行く事にします。」

「シーデさん。いいんですか？」

「もちろんー。コキハ！ 我^{わがままで}僕^{ぜいたく}でも贅沢^{ぜいたく}でも、何でも言つてっ。」

他人の我僕なんて聞きたくもないが、コキハは別。

何でも、聞きたい。

むしろ、言つて欲しい。

自然と、頬^{ほほ}が緩^{ゆる}む。

一時はどうなるかと思つたけど、なんとか上手くこつた。

「シーデさん、宜しくお願^ねいします。」

笑顔で、でも深く頭を下げるコキハに

「うわうわ、よひしへ。」

と返しながら、

俺はライアに、感謝した。

そして、この借りはいつか返そつと心に誓つた。

ライアは、もう何も言わず、俺達を見守るよつと、静かに微笑んでいた。

甘々ですね。

23話 やせぐれ～s.t.e.mシード(前書き)

やせぐれ
意味・・・あなたが、皿暴皿葉にならないで

23話 やせぐれ ~sideシード

俺は今不貞腐ふてくされている。

もう、やさぐれているのである。

この怒りを何処にむけたらいいんだろ?!

庁舎最上階西館奥のテラスは、人が滅多に来ない俺の隠れ場所だ。

そこに座り込み足を投げ出して、空にナツツを投げては指先に集めた空氣をピンとはじいてナツツを粉碎させている。

おかげで、テラスのあちこちにナツツの破片が飛び散つている。散らかしたつて

ど せ鳥が片付けてくれる……

俺が何をこんなにイラついているかとこいつ

ユキハの実家行きがキャンセルされたのだ。

実家の都合で。

つていうか、あのバカ三男のマシュー所為で…………。

何が

彼女が妊娠したから結婚します。
住む所がないので、実家に住みます。
兄貴、ごめんね。
先越しちゃった。

だ！

両親も、長官も子供が出来るのだから仕方ないと……

マシューの相手は17歳で、家事も碌^{ろく}に出来ないらしい。
それを見るにかねて、同居のはじびとなつたそうだ。

そりやあ、さすがにマシューと彼女、生まれる子供の部屋を取つたら、ユキハの部屋はなくなる。
うちは下級貴族で、家もロニーの家のような大貴族のお城ではないのだから……

それにしても 17歳。

末っ子五男のルイと同じ年で、ユキハの2歳上……

…………どうなんだら？…………？

すげー、いけない事のよくな氣がするのは、俺だけなのか？

17は大人か？

確かに、母さんは兄貴を17歳で産んでるから、抵抗はないんだ
ろうけど……

17が大人なら…………… 15は？

……………。

ダメに決まってるじゃないか ! 僕は、変態じゃないぞ……………。

俺の実家がダメになつて、ユキハはザンバルデアの所で、身の回りの世話をしながら この世界の勉強をする事に決ました。

確かに、アースリングに住むと決めて以来の、ユキハの学習能力の高さは驚くし、
勉強したいというユキハの希望で決ましたことなのだが……………。

指輪は新しい依巫に渡さなければいけないし、指輪なしでは会話できないからと、

ユキハはノートに意味を書き、指輪を外してライアに発音させて
音を書き取り、

自分で簡単な辞書を作つてしまつた。

図書館にあつた古い異世界の女性が書いた辞書も持つていつたがあまり参考にはならなかつたようだ。

もう日常会話くらいなら、指輪無しでも なんとか話す事ができるようになった。

文字を書くのがまだ苦手なようだが、ザンバルデアが教えればそれも時を置かず難なく出来るようになるだろう。

ザンバルデアの傍はユキハのために、とても良い居場所だ。
俺の後は、高齢の為と云つて弟子は取つていなかつたが、弟子になつて学びたいと望むものは、今でも引きも切らない。
俺が言つのもなんだが、最高の師匠だと想つ。

思つんだ、けど……

ユキハに会いに行き難い。

行けば絶対何か言われるし……

でも、ユキハの顔は見たいし……で

今、俺は イライラしてこるのである。

23話 やせぐれ ~sideシード(後書き)

次回、王子登場です。

24話　HISの運営　～sideシード（前編）

23話の続きです。

24話 王子の溜息 sideシード

チチ……チ…… 晴れた青空を小鳥が飛ぶ。
庁舎最上階西館奥のテラスは、約1名を除いては、非常に穏やか
な午後である。

キイ

テラスの扉が開いた。

うな垂れて、テラスに出てきたのは……

アルフレッド王子。
例の おうじさま だ。

俺に気づかず手すりにもたれて、両手で頭を抱えたかと思つと

「はああああ

」

盛大に溜息をつきながら、背を丸めて ズルズルと座り込んだ。
柔らかそうな金髪を、豪快に搔き回して
つづつづと唸り声が聞こえそうな物騒な顔で、眉間に皺などを
寄せて……

美しい王子様が台無しだな。

しかし……なんだ?
どうしたんだ?

王立魔道師^{アカデミー}養^{エラシ}練所^{ジム}では、ずっと同級生^{クラスメイト}だつたけど……
こんな奴、初めて見るぞ。

うつとう
鬱陶^{うつとう}しい、取り巻き連中も居ないし……

俺は、取り巻きAこと、ロイス・エッカートが大嫌いだ。
あの胸糞悪い公爵家^{むなくそ}ご嫡男様^{ちやくなん}は、公爵家の権力を笠^{かさ}にやりたい放題^{かさ}しやがる。

さらにムカつくのは、雲行きが怪^{あや}しくなると、王子に押し付ける事だ。

結局、王子が揉^もめ事を、荒立てない様に収めるはめになるのだ。

第6王子のアルフレッドは位こそ高いが、成人したところで大した権力は持てない。

他国に婿入りするか、臣下に下るか……その、どちらかである。

元々小さい国のアースリンクにて、王子達全てに与える領地などなく、大抵は中枢^{ちゅうしゆ}を担う役職に就いたり騎士団^{きしだん}に入ったりする。

ちなみにアルフレッドは魔道騎士団 第2師団大隊長で階級は少佐^{うざ}だ。

所属する大隊は選りすぐりの精銳^{せいえい}揃^{そろ}いで、就任当初は「王子様に勤^{つと}まるか!」と反発が大きかつたが、有無を言わぬ実力で、捻じ伏せた……らしい。

まあ、それだけの力量を持つていながら、取り巻き連に強く出ようとしている……

そのアルフレッドの煮え切らなれど、俺は昔から腹が立つて仕方ないのだ。

などと思いを巡らしながら、無遠慮にジロジロ見ていくと向こうも俺に気が付いたようだ。

空色の瞳が見開かれる。

「……」

取り合えず、寝転がつたままではなんなので起き上がって、『よつー』とばかり軽く片手を上げてみた。

気まずい。

しかし、沈黙は奴の方が破つた。

「ウチのお姫様が、お前の依巫殿に会いたいんだって。」

唐突に切り出された話に

「はあ？ なんでだよ？」

アルフレッド達に対する学生時代の習慣で、つい 亂暴な口調で

答えてしまつた。

「知り合いでしょ。」

「知り合い？ 何処で知り合つんだよ。」

「あつちの世界で 学校の同級生だつたそつだ。」

「嘘だろ。 同じ学校行つてたつていつのかよ……信じられない……」

「全くもつて、僕も信じられないけどな。 で、姫は依巫殿カノン ょうまじどが怪我けがをしていたのを見ついてね、すぐ心配していて……」

「ふうん。お姫様の願いを叶えるべく、王子が走り回る訳ですか～まあ、知り合いなんだつたら、コキハは問題ないと慰いとめられねえ？」

「じゃあ、蒼玉宮せうぎょくぐうまで来てくれないか？ 明日あしたでもー。」

「それはまた急な……」

「富殿の北側きただつたよな……ラズモント長官ローランドに一応話はなしを通して聞いてくれないか？ それと、コキハには俺が付き添つづくつ

「それでかまわないよ。 ありがと。じゃ、そういう事で！」
「いやに晴れやかに王子がいつので、ちよつとからかつてみたくな

「お姫様のお世話は大変だな。 つましくつてないのか？」
と聞いてみた。

「ものす」ぐ、手強いよ。やつぱり異世界の娘だからかな……思って通りには行かないよ。でも、楽しい。いろんな意味であんな娘初めてだよ。なんだかゾクゾクするよね。」

(いやいや。俺はゾクゾクはしないよ?)

そろそろサボってられない時間になつて、俺は服の埃ほいじなんぞを払いながら立ち上がつた。

「それはそうと。お前らは、どこまでも仲良しだよな……」

王子も、立ちながら 少し寂しそうにも見える複雑な表情で。ポンッと叫つた。

「はん? 誰と誰がだよ?」

思わず、王子の顔をまじまじと見た。

「お前と、ロナルド・ベックフォードだよ。」

俺の不躾ふしつけな視線など全く気にせず、さらりと答えた。

「??ロニー? 確かに仲はいいけど……?」

「王立魔道師養鍊所アカデミーからの同級生で、執務室の同期で、今度は依巫の召喚者同士つて……仲良すぎ。」

羨ましいよと言わんばかりの言い様だけど

ちょっと待て。

「召喚者同士つて？まさか？」

まさか、まさか……

「あれ？ 聞いてないのか？ 依巫の召喚者、ロニーが選ばれたんだ。」

ガタツ

「聞いてない。俺は、聞いてないぞ！」

「口二！」

そう叫びながら、俺はテラスを飛び出して走った。

「聞いてなかつたのか……余計な事言つちやつたかな？」

王子の呟きは、俺の耳には届かなかつた。

25話 蜂蜜色の夢

魔道府、執務室へ通じる廊下を、彼が猛然と歩いている。

彼はその勢いを落とさぬまま、執務室に踏み込むと、ザッと室内を見回す。

その憤りを隠さない剣呑な顔つきに、執務室の面々は

「やばいよ！ きてるよ！」 「何かあったのかよ？」 「うわ～コレ？ 聞いてたけどオレ初めて見るよ。 シーウェルドの雷帝様？ ははは、中々迫力あるねえ」

などと、口配せしながら、係わり合いたくはないと、笑いを堪えながら顔を伏せる。

田当代が居ないと分かると、視線は執務室脇の資料室へ流れ、つかつかとドアの前まで進む。

そして観音開きのドアを、勢いよく両手で開け放ち

「ロナルド・ベックフォード……」

雷鳴よろしく、彼は叫んだ。

「なんだよ。 シーウェルド・レスゴス」

名前を呼ばれたロニーこと、ロナルド・ベックフォードは、資料を漁る手を止めて、物憂げに返す。

「お前、依巫召喚の候補者リストに名前載せたままにしてたって、どういうことだよ！ その上、召喚者に決まつたって、なんだよ…」 烈火のじとき憤りをそのままに、シーウェルドは、ロニーのだら

しなぐ、前を肌蹴^{はだけ}ている上着をガシッと掴^{つか}み引き寄せる。

ムカツ腹を立てた時の怒りのぶつけ方が、まさに落雷を容赦なく撒き散らす雷の神ようだと 王立魔道師養^{アカデミー}練所時代に誰かが言った事から、シ・ウェルドは「そり「雷帝」などと呼ばれたりしている。

シーウェルド本人は「お前ら頭腐つてゐる」とその呼び名をバカにしているが……

最近では滅多な事では見れないソレが、久しぶりに出てきたと、執務室の面々は 遠巻きにしかし 興味深々で資料室を伺^{うが}っていた。ところが当のロニーとくれば、シーウェルドの怒りなど全く気にしない様な のんびりとした声で

「えへ。 まんまだけど?」
などと返す。

「まんまつて! 僕、お前に説明したよな? お師様から聞いた事とか、自分の思つた事とか、全部話したよな?」
そう言いながらシーウェルドは、掴^{つか}んだ上着を揺さぶつてロニーの頭をガクガクに振り回した。

ロニーは大きな目を白黒させていたが、シーウェルドが揺らすのを止めると

「うん。 聞いた」

まっすぐにシーウェルドの目を見て答えた。

「だったら、なんで降りないんだよ!」

鼻息も荒く、シーウェルドが追及する。

すると、ロニーはにっこり甘く微笑んで

「えへ。だつて、ウイル 每日樂しそうじゃん。

あの ウィルが彼女の為に、時間わざわざ作つて会いに行つたり、
プレゼントしたり……

僕は正直感動したなあ こんなに変われるつて… 運命の女つ
てスゴイと思うよ

「ううとつとはちみつ色の瞳を細めて、夢見るよつてロニーが言つ
た。

眉をひそめて、シーウェルドは

「そんな事じやなくて！」

と否定しようとするも

「大切な事だよ。 ウィル

ロニーが真顔で静かに言つ。

さりに、ロニーは続けて

「僕の家の事、知つてると思つけど……」

ロニーは伯爵家の三男だ。

上に優秀な兄が二人いて、ロニーは後が次げるわけでもないので、
執務室に勤めている。

執務室にいる連中は、そういう奴が多い。

もちろん、シーウェルドもその中に含まれている。

「親父が婿入りの話しを進めててなあ。その相手が、またヤな女
なんだ。

高飛車で、気が強くて、我慢わがままで……

そいつが何故か僕を気に入っていて…… 僕も、僕の変わりに、
彼女が気に入りそうな奴を探したんだけど、見つからないんだよね
（丁度いい身代わりが……全く）

ロニーは、はあーと大げさに息をついて

「んで、困ったことに、お前の召喚があつて、ユキハちゃんに
夢中のお前を見てさあ。いいよなあって思っちゃった訳。純
粋な愛つてものが欲しくなったんだ」 そんな時に、この再召喚の
話だろ。もう、運命だ！って思ったね！」

——口にして云つ。

「それでもっ！」

困惑しながらも、シ・ウエルドは食い下がる。

ロニーはシーウェルドに反対されることは予想していたので、真
面目に素直に最大の理由を述べた。

「それでも、何でも、僕は好きでもない女と結婚なんて出来ない」

ロニーは、普段滅多に見せない苦にがい顔をして、静かに言つた。

「僕の両親を見て、ずっと思つてた。贅沢ぜいたくな暮らしとか、地位とか、
僕は要らない。

だって、僕の稼ぎでも 贅沢しなければ普通に暮らしていけるじ
ゃん。

僕はただ、好きな人と一緒にいたいだけなんだよ。
でも、残念ながら僕の周りには そこまで僕が思える人はいなか
つた

「これでも、かなり真剣に“好きになれる相手”を探したんだよ？ ウィルと違つて。

で、せつかくだから、他の世界にも探索の手を広げる」とにしたんだ。

こんなチャンス一度とないだろ？」

最後は、いつものロニーに戻つて、舌をペロリと出しておじかて見せた。

「チャンスって…… 戰争がからんてるんだぞ。どんだけお氣楽で前向き なんだよ……」

シーウェルドは、ロニーの余りの前向きさに呆れた声を上げた。

「ああ。僕は、いつも氣楽で前向かれてーそれが取り柄でもあるんじやあないか！」

戦争は回避するんだろ？ ウィル。

じゃあ、大丈夫。問題無いさつ！ ウィルも僕も幸せになれるよー。」

そう言つて笑つたロニーの笑顔には、何を言つても覆さない強い決意と、幸せな未来しか信じしない熱い情熱みたいなものが存在していた。

シーウェルドは、ロニーの熱が伝染して来るよう感じた。

そして、自分の心配が杞憂きゆうであればいい。そうなつてほしいと望んだ。

そして、自分たちの身には そのまま何事も起こりうず、ひょっとしてみんな幸せになれるのかもしれない、と思つてしまつた。自分達も大丈夫だと、思いたかつたのかもしれない。

その時の彼等は これから待つて いる運命など、
何も、

そう、まだ何も気付いていなかつた。

運命は、密かに、ゆっくりと、しかし着実に歩を進めていた。

その波に彼らが呑まれるのは、まだ少し先のことである

26話 巫女 1 召喚 ~side花音(前書き)

おまたせしました。やつと巫女です。

26話 巫女 1 召喚 ~side花音

いつもの放課後。

いつもの友達。

それも、もうあと2日で終わってしまう。

卒業。

みんな別々の高校へ進み、別々の毎日が始まる。
寂しさと、期待に胸をざわめかして……

でも、私の心は暗鬱あんえつだ。

未来に光が見えない。

周りは、どんどん華やかに輝かしくなっていくのに、私の立つて
いる場所には深く暗い穴が開いている。

いつか、この闇に自分は飲まれてしまつ……

そんな、焦燥感じょうそうかんと絶望感ぜつぼうかんに心の底辺ていへんを炙あぶられながら

私は、未来を生きるのだろうか……

でも、あと2日だけは。
わたしでいられる。

今日はみんなでお別れパーティーをする事にした。

仲のいいグループ同士が集まって、クラスの半分位は来るみたい。

女の子達は学校のトイレで軽くメイクをして盛り上がりしている。

私も昨日買ったばかりの、ピンクのグロスをつけた。

うちの中学校は生徒指導がゆるい。

特に放課後は先生の目も行き届かないし、大丈夫。

「花音^{かのん}～男子、もう 外で待ってるって～」

「分かつたあ。ねえ、キヨンちゃん早く行くよ！」

「待つてえ。花音」

みんなで玄関で靴を履き替えていた

はずだった

え？

一瞬何かが光った気がした。

誰かが写真をとったフラッシュだと思った。

田を開けると……

知らないお爺さんがいっぱいいた。

そして、理解できない言語で話していた。

これは、一体、どうした事かと

驚いていると、お爺さんの中から一人若い男が近づいてきた。

オ カル！

まさにそんな感じの人！

ああ、塚ファンのオバさん達が此処にいたら、狂喜して、居住まいを正して、記念撮影をお願いするだろ？！……

だつて

金髪、^{スカイブル}長髪、巻き毛（後ろで束ねているけど）

真つ青な瞳、涼やかな目元

通つた鼻筋、白桃の頬、珊瑚の唇！

長身、逆三、9頭身。

服は白い軍服。赤い飾り+金モール付き
完璧！

まさに、理想の王子様像。

オ カル様は女だけど……

この綺羅綺羅しい後光は、まさに主役。

その綺羅綺羅王子が、^{わたし}私の手を取ると
振りほどく暇も与えずには、指輪を嵌めた。
近くに寄つた御尊顔をポカンと見ていた私の顔はさぞかし間抜け
だつたろうと
少し赤面してしまう。

でも、指輪を嵌めた瞬間に周りの会話が理解出来、その内容に鳥
肌が立つ。

巫女姫様？

なに、それ？

ひょっとして……これは俗に言ひ……

異世界召喚？

まさか！

キヨンちゃんの妄想でもあるまいし！

そう易々と、違う世界に行けたりしないでしょ？

ふいに、あひきゅう綺羅綺羅王子が耳元で囁いた

「私の名はアルフレッド。どうかアルと呼んで下さい」

私の目を見つめてにっこりと微笑む。

あ～。この顔。好きだ。

笑うと、可愛い。

実家の諸事情で、美形慣れか且つ、用心深い私なのに
うつかり魅入りそうになってしまった。

「花音かのんです。アル」

ああ！

しまった！

ちょっと照れてしまつて……

つい、ぶっきら棒な感じになつ！

常に礼儀正しくは、お嬢様の基本なのに……

なのにアルは

「カノン。素敵な名前ですね。綺麗な貴方にぴったりです。
神に祝福されし、私の片羽ほ。逢えて幸せです」

と、惚けるような眼差しを向ける。

えええええ？

片羽？

この指輪つて？

そつちの意味の指輪なの？？？

「—————」

アルの真剣な眼差しが、彼の誠意が本物であると言つてこよう
に感じた。

私は過去の失敗で、告白されても信じる事が出来なくなつてしま
つた。

でも今は、何故か耳が熱い……

絶対、真っ赤になつてる……

初対面の人には、歯の浮くセリフ言われたからつて、ときめく事無
いでした。と自分を叱咤してみた。

だけど、不覚にも セリフを言つてしまつた
私の肩をアルがそつと抱き寄せた。
さつきから、なんだかゴチャヤゴチャ 煩いお爺ちゃん達から、私を
守ってくれているみたいだ。

…………悪くない。

こんな状況、信じられないけど
アルは嫌いじゃない。

(素直に、そういう思える自分にもびっくりだよ……)

アルに促されて床の模様からそつと脇に移動すると
隣にも同じような模様が描かれていた。

黒の魔法使いのローブを着た、男の人気が
呪文を唱え出すと、模様が光り出した。

目が眩むほど光の後には

模様の上に何かが居た。

アルと同じような、でも少し地味な服をきた人が、それを掴みあげた。

人だった。

しかも・・・すごく傷だらけで血だらけだけど……

??

見たことある子かも……

クラスが離れているし、話した事も無いけれど
ひょっとしたら同じ学年の子かも……

名前は確か…… 永山さん?

「な（がやまさん）」

呼びかけた名前を飲み込んだ。

永山さんを掴んでいた男が、放り投げたからだった。

何？

失敗ですなって、怪我してる女の子投げたよ、この人！

信じられない！

それを見た瞬間、ゾッとした。

こんな酷いことする人達の中に、自分はいるんだって気付いたか

ら。

恐る恐るアルの顔を見る。

眉間に皺しわを思い切り寄せて、苦く悲しい顔をしていた。

「（アル）」

声を掛けたかったけど、私もアルもお爺ちゃん達に押されて、部屋から出されてしまった。

目一杯振り向いて、最後に見えたのは

永山さんに駆け寄る、ロープの人の悲壮な顔だった。

27話 巫女 2 饒舌な沈黙 *（花音の頭の中の話です）*
side花音（前書き）

花音の頭の中の話です

27話 巫女 2 饒舌な沈黙 ~side花音~

「は、ヤバイ。

神官を名乗るお爺ちゃん達……

怪我した女の子、無視しやがった。

衣装も豪華で位リが高いらしい神官たち……高慢糞坊主どもと命名

しよう。

私の事を「巫女様」「姫様」などと、目一杯持ち上げてはいるが、

その目アタマが語セイつてゐるよ

贊辞サンジと贅沢ゼイタクで溺れさせとけば、下賤ゲセンの小娘タガ子なんぞ容易たやすくあしらえ

るって。

残念でした。

贅沢ゼイタクにはね、慣れてるんだ

自分の利益の事だけ考えて行動する人達の、邪ヤハな眼アメにもね。

それにしても……問題は、この胡散臭ウサシキい奴らから、何時逃げ出してどうやって帰るかって事。

帰る方法はあるんだろうか？

知り合いが一緒だなんて、ものすごい偶然で少し心強いけど、永

山さんだし……

彼女を当てには出来ないか。

永山さん、怪我してたみたいだし……

今すぐは動けそうにない。

大丈夫かな？

早く合流してしまいだいんだけど……一緒に帰れるものなら
そうしたいしね。

私から見た彼女の印象は、とにかく悪目立ちする子だ。

その低い身長と痩せた体型は、見た者を一瞬ギョッとさせる。
黙つて廊下の隅に立つていたら、最早学校の怪談並みの不気味さ
がある。

それに加えて、歴代担任達の目の懸け様だ。
実際に同じクラスになつた事がないから、彼女と同じクラスだつ
た子からの話だけど

親から虐待を受けているーと言えない事情があるらしく、それを
止められない引け目や罪悪感から逃れる為か、とにかく皆、彼女の
事を特別気に懸けていたそうだ。

新学期のうちはクラスメイトも「自分より酷い環境の子がいるん
だ。自分は恵まれている。彼女に負けないよう、頑張ろう。」とい
う空氣になるんだけど、

その内、彼らにもそれ悩みなどが出てくる訳で、その悩みを
彼女の置かれている状況と比べた時、鬱屈した気分になるらしい。
自分にとつては大きな悩みでも、彼女にしたら取るに足らないこ
とだらうと思つてしまつと、自分の器が小さいと自分で認めるこ
とになる。やさしい事でも、一喜一憂したい年頃である。

自分の周りの全てに感謝して生きるなんて、中学生には無理な話
だ。

むしろ、全てに反発して、不平と文句をタラタラ言つて暮らして
いたい。

それが表立つて出来なくなるのは、苦痛になる。

そこで、彼女の存在が鬱陶しくなり、自然発生的にイジメが始ま
るという構図らしい。

私はイジメられる方にも原因があると、思つてゐる。

彼女は、もつとほつきり、自分の気持ちを言つて、態度を明示するべきだと思つ。

まあ、関わつた事の無い私が言つのも変だけ……

その永山さんが、異世界に飛ばされて、怪我までしてゐなんて……

どんだけ不幸体質なの？

ど、自分のことはわざおも あきれてしまへ。

二人ともが、ちゃんと歸れればいいんだけどな。

私がこんな事を考へてゐる間も、高慢糞坊主じもはこの国の窮状をお涙頂戴に訴えて、私の重要性・必要性等々 延々と、熱弁をふるつてらつしゃる。

(「わたしでお役に立てるなら、喜んで！頑張ります！」とでも言つと思つてんの？)

誰が言うか、ボケ。

別世界から女の子泣く暇があるんなら、強力な兵器でも開発しつけ。

それはそつと、やつきから隣に座つてゐるアルから、熱い視線をガンガン感じるんだけど……

アルは、正真正銘の王子様だった。

生まれながらの、セレブつてやつか……

あー、苦手だな。

巫女と召喚者の関係も聞きました。

運命の人？

そんなの、本気で信じてるの？

そりゃあ、ロマンチックですよね。

でもね。

言い伝えとか、一因懲れとかで、お嫁さん決めちゃうのは、どうかと思うよ。.

王子さまの定番かもしれないけどもさ。

シンデレラや白雪姫、オーロラ姫もだ おかしいよ？

白雪姫とオーロラ姫に至っては、一言も話していないよ？

顔だけか！

王子は顔しか見てないのかつ！と私はいつも叫びたくなる。

あ……オーロラ姫は一人娘だから、王に成れるのか……

私もそうなるかな。

三条家の血筋と多国籍企業のグループ創業者の娘。

血統と金 欲する者は多い。

閨闥に組み込んで、資産を潤わせたい御方々や、由緒正しき三条家と姻戚関係を結びたい成り上がりがこそつて、狙つてくる。

執事の黒須が私に就いてからは、対処方法もずいぶん身に付いたけど、一度痛い目には遭つていて。

だから、初対面の人を信用する事は出来そうにない。

というわけで、ごめんな。アル。

一目見た時から、2人は惹かれあってその夜の内にベッドインなんて、ありえないから。

そんなにフェロモン垂れ流しで熱心に見つめられても

無理。

きっと勝手な妄想を膨らましているんだろうな……
見た目と違い、無垢でも初心でも可憐でもないんです、残念ながら。

だから、お願ひです。

そんなに、ウツトリした顔で こっちを見るなっ！

こつちは、この世界が掴めなくて、どんな対応していいのか悩んでるっていつの間に！

それに。

永山さんを引きずり上げて放り投げた奴。
アルの仲間なんじゃない?
制服似てるし、馴れ馴れしかったよ?
アルも、止めなかつたしね……

信用、できない。

やつぱり信用なんて、とても、できないわ。
アルフレッド。

あーあ。まだまだ、知らない事が多すぎる。
綺羅綺羅王子様に、絆されてつかりドキドキしている場合じやないよね。

糞坊主達は、自分の都合のいい情報しかくれなさうだし……
一步間違えると、あつさり殺されそう……

情報、誰から聞き出せばいい?
アルなら、ガードが緩ゆるそう?

帰り方とか、何か方法があるのかな?
呼べたんだから、帰る方法もあつて欲しい。
帰す方法ありません。だったら ヤだな

とにかく今は、様子を見るしかないか……

そして、私は暫しばくの間は、彼らに従順な、望み通りの巫女を演じ
情報を集める事にした。

28話 巫女 3 アルフレッド～sideアル

召喚者として立つたのは、義務感からだった。

王子としての、国民に対する義務。

王族は生まれた時から食うに困らぬ豊かな暮らしと引き換えに、国民の命と生活を守らなければならない。有事となれば、なおさらである。

魔道騎士団に入団して、国を守る事について考えさせられた。自分がいかに甘えた考えを持っていたか、見せ付けられるような事の連続だった。

今アースリングが置かれた状況を見ても、王子である自分が為すべきことを成さねば、国民に申し訳が立たない。

僕は、魔道騎士団 第2師団大隊長として、そう思つている。

今は 有事である。

150年前の大戦以来、魔道師になれるほどの魔力を持つた子が年々生まれなくなつた。

原因不明のその現象は、アースリング以外の国で著しく、他国の騎士団は魔道を伴わない技術・体力勝負の集団になり、治療法師は医者に変わつた。

周辺諸国にとって、魔道立国のアースリングは最も手に入れたい国の一つになつた。

今まで小さいながら独立を貫けたのは、神を降ろせる巫女みこと依巫よりましを呼べるこの世で唯一の大神殿があるから。

前の大戦で、圧倒的勝利をアースリングにもたらした 恐ろしく不公平な神の御業みわざを恐れて、武力を蓄えた周辺諸国も手を出してはこなかつた。

今までは。

しかしここ数十年、アースリングでも確實に魔道師の数は減少している。戦争に於いて魔道師の術が敵にあたえられるダメージは、たかが知れている。たとえ術が使えなくても、数で勝れば勝算は十分。

神が降りようとも、数で押せると踏んだのだろうか？

魔道師に頼る戦争の時代は、実質終わっている。現実を直視せず、対策が遅れたのは、頭の固い奴らの所為だ。

僕が入団して現状を知つてから、魔道騎士団以外の軍備を急がせたのだが、とても数年では間に合いそうもなく……

列強が手出し出来ないよう、巫女みこと依巫よりましを召喚する事になったのだ。

僕は、今こそ王族として、義務を果たさなければいけないと思った。

巫女を召喚するのは、王子と決まっていた。

戦が終わった後も、神の声を聞ける巫女の存在は有用だからだ。その有用な巫女を、王家の一員として囲い込む為の人選だ。

僕の国民に対する想いがあつたにしても、6番目の王子に大役が回つてくるのは珍しい。

今回、なぜ第6王子の僕に白羽の矢が立つたかといふと、

他の王子達が逃げたから。

兄弟達の他力本願と無責任ぶりには慣れていても、驚いた。

亡き母の身分が低く後ろ盾が無くて立場が弱いから、押し付け易い だとか、

結婚も婚約もしていないし側室の一人も置いてないから、巫女の機嫌を損ねないとか、

もう運命の相手と出会っていますから、自分が召喚しても誰も来ませんとか

「運任せで結婚相手が決まるのは厭だ！」と泣いて嫌がったとか

……

そんなもろもろの聞きたくも無い理由は、聞かないことにして「他の王子は魔力も足らず実力不足。召喚者は確実に成功するアルフレッドに決定した」

そういうことにしておいて欲しい。

そんな経緯で召喚する事になつたから、別段期待してはいなかつた。

いや、正確には失望するのが怖くて、どんな女性が召喚されても受け入れようと運命の人を夢見る事を自ら戒めていたのかもしれない。

そして

召喚の光が消えた魔法陣に佇む少女は、僕の予想を遥かに超えて、美しかつた。

彼女と初めて目が合つた時、全身の血が沸騰するかと思つた。

アースリングでも特に珍しくも無い黒髪だが、彼女の髪は濡れた
ような艶とサラサラ流れる黒い滝の様で、こんな美しさの髪は見た
ことが無かつた。

服装は、白い長袖の上着に濃青のスカート。黒いタイツ。黒い靴
下。黒い靴。

2本の青のラインが入った三角の広い襟は胸元まで伸び、赤いリ
ボンが締められている。
肌を晒しているのは、顔と手首から先のみと、露出もなく 清
楚と言える装いである。

最初、彼女は見知らぬ場所に驚いている風だつた。
しかし、僕の姿を見つけると
黒曜石の瞳を大きく見開き、キラキラ輝かせて うつとりと僕の
顔を見つめた。

うつすらと開いた唇が、艶を帯びていて妙に艶かしい。
清らかな容姿の中で、唇だけがやけに煽情的で 心を搔き回され
る。

そして何よりも心を掴まれたのは、僕を見つめる 真っ直ぐな瞳。
あんな風に見つめられたのは、初めてだつた。

僕が名乗ると、小さな声で彼女の名前を教えてくれた。

カノン……綺麗な響きだ。

「出会えて嬉しい」と言つたら、カノンは何も言わずうつむいてし
まつた。

何か、気に障ることを言つてしまつたのだろうかと、よく見ると、
耳が赤い。

照れてる?

軽く抱き寄せると、首まで真っ赤になつて……

かわいい。

なんて、可愛らしい反応をする娘なんだろう……

カノンを抱き寄せた時、ふわんと微かに花の様な果物の様ないい香りがした。

舞踏会で言い寄つてくる令嬢達のキツイ香水ではなく、さり気ない香り。

ずっと嗅いでいたい。

この髪に顔を埋めうずくて 黒髪の滑らかな手触りと、良い香りに酔いたい。

清らかな巫女に対しての、不埒な考えを悟られないように最高の笑顔を浮かべる。

あまりの自分の幸運に、僕はシーウェルドにも いい娘こが召喚されますようにと

祈りを込めてサインを送つた。

彼の結果は、残念だつたけど……

召喚の後、神殿の迎賓館で着替えやら、食事やら、簡単な召喚の説明やらを神官から聞いている間、カノンは俯き加減で、ほぼ無言で過ごしていた。

神官達が、とにかくよくしゃべるので、2人で話すきっかけが掴めなかつた。

次の日の朝、僕が朝の挨拶に行くと
カノンは僕だけに聞こえる、とても小さい声で
「もう一人の少女はどうなりましたか?」とまるで隠すように尋ね
た。

「怪我をしていたので治療して、いまは回復しましたよ。」
と僕がカノンの耳元で答えると、
「よかつた。」と硬い表情のまま、囁いた。
ささやか

おかしい?

昨日と反応が違つようだ。

昨日召喚の直後は、僕の言葉や仕草にに頬を赤らめていたのに。

今日のカノンは頑なな態度だ。
かたく

時折、僕をじいっと見ているが、目が合ひと軽く眉をひそめて何かを考え込んでいる様子だ。

名前すら呼んでくれない。

理由が分からぬ。

朝の一言から、また無言を通し、王に謁見するため玉座の間へ移動した。

昨日の異世界の出で立ちも良かつたが、巫女の装束を着て玉座の間に立つた、カノンも美しかつた。

白縫で、袖と裾の長いゆつたりとした内衣を身に付け、その上

から緋色の綾織りに錦の縁飾りが付いた 床まで届きそうな長い上着を重ね、赤金錦のサッシュベルトで留めてある。

腰までもある黒髪と上着の緋色が絶妙なコントラストを生み出している。

真っ直ぐに切り揃えられた前髪は、彼女の顔立ちと共にエキゾチックな魅力を際立たせていた。

巫女姿のカノンは、まさに神秘的な魅力を溢れさせていた。

王太子である長兄のカノンを見る目が、いやらしくて不快だったり、

カノンが無表情で感情がまったく読めなかつたりと 気に掛かる事はあつたが

謁見は、滞りなく終わつた。

元々、何かを話すわけでもなく、召喚が無事済んだ報告をするだけだ。

依巫^{よりまし}が一緒に無いのが唯一の例外だ。依巫の傷ついた姿には驚いたが、怪我を治してから送り返す事になりそうだ。子供に依巫^{よりまし}をさせるのは、いくら国家の為とはいえ気が引ける。

シーウェルドには残念だろうが、奴なら理解するだ。

謁見を終えたカノンと僕たち一行は、大神殿へと向かつた。

巫女が依巫に神を降ろす『神の間』を案内するためだ。

カノンにとつて大きな問題になる事が、待ち受けているとも知らずに……

29話 巫女 4 神の間 side花音

謁見の席では、我ながらよく耐えたと思う。

本当は、勝手に人を呼びつけた王様とやらを罵倒したかったけど、不敬であるとか言われて殺されるのは困るから、我慢した。

平伏低頭とまでは強要されなかつたのも幸いだつた。

意外と巫女のポジションは高いのだろうか？

王族や貴族らしき人々の、品定めをしているであろう視線にも辟易したけど、アルが隣でずつとムツとした顔で そいつらを睨んでいたので、好しとした。

後は、大神殿の『神の間』を見学したら部屋に戻れるそうだ。

宮殿から大神殿へ向かつ道すがら、アルは宮殿と神殿について説明してくれた。

要約すると、

アースリング国の中都の中央には宮殿と隣接した大神殿がある。

宮殿には、王が政を行う金剛宮と 王、王妃、王女、年少の王子、側室が住まう後宮、成人した王子が住まう宮殿群とがあり、アルフレッドの蒼玉宮もその一つだ。

神殿は荘厳な古代様式の石造りの建物で、建国当時から現存する数少ない建造物である。

白亜の列柱は植物の幹を象り、柱頭部には葉の彫刻が刻まれており、大神殿の周囲を取り囲む回廊を華麗に装飾している。

床は長い年月を経てなお 鏡のような光沢を失わず、壁には神々の物語を象った、纖細なレリーフが施され、神話を後世に伝える役割を果たしている。

その大神殿の最奥に『神の間』がある。神の間には三振りの剣が奉じられていて、その剣を用いて巫女は依巫に神を降ろす。

アルの説明から、賞賛の言葉を抜くと、大体こういう内容だ。

アルって、すごく言葉を飾るというか 詩的表現を多用するよね。王子様的素養そようの一部ですか？ と聞いてみたい。まだるつこしいので、止めもらいたいけど。

長つたらしいアルの説明を聞くうちに、大神殿の『神の間』の入り口に到着した。

高さ4メートルはあるつかという巨大な青銅せうどうの一枚扉の両横には白くて飾りの少ない衣装を着た中級っぽい神官じんぱく一名と、並っぽい神官じんぱく一名が控えていた。

中級はおじさんで、並は若者だ。じゅわ高慢糞坊主こうまんくうぼうなどもと違い、この四人は聖職者っぽい禁欲的で清らかな空気が漂っている。

(よかつた。ちゃんとした神官もいるんだ)

そして、神の間へと通じる、「ゴテゴテとした浮き彫りが施され、無駄に頑丈そうな扉は、神官四名の手によって、自重に軋みながら、ゆっくりと押し開けられた。

神の間への扉というより、地獄の門と言う方が相応しいんじゃないだろうかと思いながらも部屋に入る。

中は、半球形の天井を開いた、大きな穴から差し込む陽の光で、とても明るかった。

天井の穴には、ガラスなど嵌められておらず、ぽっかりと青空が覗いていた。

壁も天井も大理石に似た白く大きな石材が使われていて、その継ぎ目は、髪の毛一本も通らない位きつちりと組み合わされている。

扉から向かつて正面奥には壁面一杯、天井まで広がる簾をデザインした黒い金属の刀掛けが取り付けられていた。
所々に金や宝玉で煌びやかに飾られたそれに、三振りの神剣が鞘に納められ安置されている。

一振りずつ簾に絡め取られる意匠で、特に立派な一振りを頂点に同じ様な一振りが下に並び、正三角形に配されている。

神剣の前には、直径1・5メートルほどの水盤が、花を象った台の上に乗せられていた。

水を満々と張った、その水盤は水鏡と呼ばれ、神との会話に使われる代物らしい。

中央の床には、魔法陣らしき模様が緻密なモザイクで描かれていて、他より3段ほど低くなっている。

それ以外は特に、窓や飾り、扉など何もなく、ガランとした部屋だ。

「清らかで静かな場所で、ございましょう?」

中級神官の一人が、穏やかな笑みを浮かべて言った。

確かにその通りかも、と思つた時。

微かな振動を感じた。

「？？」

辺りを見回すが、特に変化はない。他の人々は、何も感じない様だ。しかし、私がこうして見回す間もその振動は強くなり、鼓膜に響いて痛い位だ。

（一体、何処から？）

ゆつくり室内を歩き始めると、今度は囁き声が聞こえてきた。何を言っているのかは、解らない。しゃわしゃわした声が、囁きのレベルを超えて響き渡っている。

（ここなんに不気味な音が、満ちてるのにみんな気が付かないの？）

アルの顔を見上げても、こいつと微笑み返されるだけだ。

（やつぱり、聞こえてないんだ……）

そして、大きく小さく空間を埋める耳障りな声は、水鏡から聞こえて来る様だった。

怖い。

怖くて、とても近寄れない。

怖がついていても、埒が明かないのは 頭では理解しても、本能が「まわれ右して、ダッシュで逃げろー」と叫びている。

囁く声の雰囲気が、禍々しいのだ。

まがまが

(神とかって、もつと いひ……神々しい清らかなオーラとかじやない?

怨念がこもった欲望の叫びっぽいんですけど……

なんだかヤバイ神様?

邪神も神つてコト?

水鏡には、近寄らないでおこう

別に好奇心とか無いし これがホラー映画なら 水鏡を覗き込んだ瞬間、白い手とか、ビワーって出てきて水の中に引きずり込まれるんだよう!

怖すぎ。

高慢糞坊主（こうまんくそぼうぬし）が得意顔で水鏡の説明とか始めてるしさあさあつて、手招きしても、行かないからつ！

耳は痛いし、囁く声も大きくなっているし……気分悪い。吐きそう……）

「カノン。大丈夫ですか？顔色がすぐれませんよ……」

アルが倒れそうな私に気が付いて、支えてくれた。

冷や汗が額から流れる。

繋いだ手から、アルの体温が伝わってきて、自分の指先の冷たさに気付く。

(いや……大丈夫じゃない……マジ無理かも
ヤバイ。立つてられない)

体は動かないのに、思考だけはグルグル回った。声が五月蠅い！
耳が痛い！

ふわつ

体が浮いた。

「え？」

びっくりして閉じていた目を開けると、視点が高い。
見上げるとアルの顔が間近にあった。どうやら私はアルにお姫様抱っこをされているようだ。

普段なら、こんな小っ恥ずかしい格好は、断固拒否したいところだが、今は非常に有難い。

もう、頭がクラクラして、まともに歩けそうにないのだ。

もう、なんでもいいから此処から連れ出して欲しい。

重くて、やつぱり無理とか言われて降ろされるのは厭だな～などと、チラッと思つたけど、私の体重を支えているアルの両腕はとてもがつしりした筋肉がついていて、優男な顔からは想像できない程、鍛えられている様だ。少なくとも部屋に帰るまで位は、平気そうな安定感があった。

アルは、突然のお姫様だつこに驚く神官達を押しのけ すごいスピードで、部屋まで戻ってくれた。

神の間を出てからは、あの声は聞こえなくなつたし、頭痛も無くなつたけど、代わりにどつと疲労感が押し寄せて……

その所為かどうか判らないけど、アルに抱き上げられて運ばれるのは ユラユラ、フワフワして とても気持ちがよかつた。

29話 巫女 4 神の間 side花音（後書き）

続きは次回に・・・

30話 巫女 5 寝室にて ~side花音

神殿の迎賓館に用意された私の部屋に入ると、アルはベッドにそつと寝かしてくれた。

そして、世話係りの人が持つてきた冷たい濡れ布を私のおでこに乗せると、手を優しく握つて声を掛けしていくくれていた。アルの手は、硬いタコがあつてゴツゴツしていた。

王子様の手なのに、意外だった。

（ああ思い出した。騎士団の隊長って聞いたな。剣とか持つたりしてるんだ……）

物語の王子様が、生身のアルフレッドになつた様に思えた。いろいろ考えなくちゃいけないんだけど、頭がグルグル回つて、考えがまとまらない……

アルが優しく頭を撫でてくれるのが、すぐ落ち着く。あつたかい手が、気持ちいい。

「はあ……」

思わず漏らした溜息に

「カノン……気分はどう? 辛い?」

いかにも、心配ですって声で聞いてくる。

アルは、声まで素敵だね

「どこか痛い所、ある? 昨日殴られたばかりなのに、無理さ

せたね……」

違うんだけど……

そういうえば、アルは普通の言葉でしゃべってる。
飾らない方がいい。 初対面だから、格好つけていたのかな？

ふふふ。

なんだか、アルに撫でもらって楽になった。
怖かったのと、ほつとしたのとで、疲れた。
そして、眠い。

このまま、眠っちゃおつか？

うとうと眠り始めたところへ

「アルフレッド殿下。 失礼致します。
ノックと共に男の声がした。

アルが、そつと立ち上がり、音を立てないように寝室から出て
行つた。

扉の向こうで話し声がある。

聞き耳を立ててみても、遠くて聞き取れない。

神の間の事について話しているのだろうか？
すじく、気になる。

程なくアルが戻ってきて、ベッドの脇に置かれた椅子に座つた。
そして、おでこの布を裏返して乗せながら

「大丈夫。 無理はさせないからね……ゆっくり休んでね」
目を瞑つたままの私に、答えを求める風でも無く話しかける。

「…………。」

続きは?
何も話さないの?

眠つてゐつて、思つてゐ?

気配でいつかを見つけるのは感じじる。

じーっと、見てる。

ただただ
只々見てる。

居心地、悪い。

そんなに見られて眠れる訳無いんだけどー!

もう眠氣なんか、何処かへ行つた!

起きる。

「ありがと。もう起くなりました。」

やつ言つて、私は おでこの布を取つて上半身を起した。

いきなり起き上がつた私を見て、アルは驚いたよつだつたけど
「もう大丈夫です。巫女の装束もしわになりますし、起きます。」
と言つて、ベッドから降りようとするとアルに止められて、ちよ

つとした押し問答になつた。

結局

「昨日の依巫の事もあるし、召喚が何らかの形で悪影響をもたらしている可能性がある以上、治療法師に診てもうつまで、安静にして欲しい。」

という、アルの意見に従うことになった。

永山さんが、あんな姿になつてしまつた事を思い出して、ひょつとして自分もどこか壊れているかもしさないと 今更ながらゾッとした。

女神官の手を借りて夜着に着替え、治療法師っていう医師みたいな人が来るまで、横でもなるうかとベッドに上がつた所へ、治療法師サリエス・ファラーが到着したと告げられた。

「お休みの所、『足労頂きありがとう』やれこます」と頭を下げるアルに

「依巫の治療が長引いて、力を使い過ぎました」と、素つ気無い返答をする人物を見て、私の全身に鳥肌が一気に立つた。

サリエスというその人物は、低めの声と170cmちょっととの身長から、細身だけど男だと思われる。

薄い水色のほぼまつすぐな髪が、切り揃えられもせず伸び放題で、後ろは腰まで、前は顎の辺りまで不揃いに覆つていた。^{おお}右目は前髪に隠れていて見えない。

顔色は色白というよりは青みがかり、その上 眼の下には隈がくつきりと浮いていた。

そして、なにより私を震え上がらせたのは、サリエスの眼だった。

まるで、腐った魚の様な……鮫の目の様な……青白い瞳。

白目は赤く充血していて、濁った色をしていて、黒い瞳孔だけが

ポツンといひりを見つめている。

(はーー ゾンビ出ましたー)

本当に、人間ですか？ その田の色は悪役魔物の定番でしょう？
此処はホラーな世界だったんですね？

怖いの、すこし苦手なんだけど……

田の前に立ったのがいるだけでも逃げ出したいのに、そいつは眉間に皺をよせて不機嫌そうに私を見下している。

ベッドの上で可能な限り後ずさつたけど

「カノン。 サリエスはアースリングの一の治療法師なんだよ。 ちゃんと診てもらおうね。」

などと叫つアルに、あつれり引き寄せられてしまった。

確かに、白衣みたいな上着だから、医者に見えるけどもね、
『36時間連続勤務の後に、地下の研究施設から逃げ出したゾンビ
に噛まれて自分もなつちゃつた悲惨な外科医』 みたいな顔が怖
いんだよ！

サリエスは、アルに阻まれて逃げられない私に、無言で手を伸ば
してきて、両手のひらを握った。

その冷たさに、思わず体がビクッと反応してしまった。

(冷たいつ！ 死んでるんじゃないの？！)

そして、顎を掴まれ、口を開かされて中を診られ

(ガツて顎を押されて、無理やり口を開けるな！ 痛いってばー。)

恐怖のあまり声を発することも出来ない私からの、拒絶と抗議の視線を無視したまま

終始無言でジロジロ観察していたサリエスは

「特に異常は、ありません。 じいて言つなら精神的疲労ぐらいで
しうが。

一応薬は出しますが、殿下が心配される程ではありません。
依巫の傷も召喚時に出来たものではありませんでしたし、召喚の
ダメージは考えなくて良いでしょう」

と一本調子でアルに告げ、用は済んだとばかりに セッセッと出て
行ってしまった。

「はああ……」

(出て行つた！ ああああああ…… 気持ち悪かつたあ)
診察つて、たつたあれだけ？ 手抜きだらーつて思つたけど 一秒
でも早く出て行つて欲しかつたので そこはスルーをしておこう。
目の前の恐怖が去つて一息つとも、まだ次に何か（白い子どもと
か）出てきそうで、アルの軍服の端っこを握り締めたまま離せない。

不覚。

暫くして、薬が届けられた。

空腹では体に悪いと、スープだけの昼食のあとに飲んだ。

その白くてドロッとした得体の知れない薬液は、嫌な甘さがあつ

て とても飲みにくかつた。

たつたコップ一杯の薬を飲むのに、口直しの水が三・四杯も必要なくらいに……

アルが心配そうに、薬を飲み終わるまで皿を離さないから、いつそり捨てることも出来なかつた。

薬を飲み終ると、何もすることができなくなり、やわらかな午後の田差しが差し込む窓を開けてぼんやり外を眺めたりしていた。ずっと傍から離れようとしないアルが気になつて、仕事に行かなくていいのかと尋ねると、召喚者は巫女を守るのが第一の仕事だから、こちらの世界に慣れるまで（せめて体調が戻るまで）は一緒にいるとの事だつた。

ずっと一緒に勘弁して欲しいと思うが、神の間の事と、サリエスの恐怖が抜けきらない今は、有難く横に居てもうおつか。

見るからに退屈そうな私の様子を見兼ねたアルが、本でも読みましょうかと部屋にあつた本を手に取つた。

アルが選んだのは、子供向けの昔話だつた。魔道師と召喚された娘のハッピーホンドっぽい話。

どうやら、私向けに神官達が用意していった物みたいだ。

静かな部屋にアルの声だけが流れる。

綺羅綺羅王子は声まで爽やか系だね。

ふと、アースリングの言葉で聞いたら どんな風かと指輪を外してみる。

意味は分からぬけど、英語っぽい響きの言葉。 穏やかで張りのある聲音を純粹に楽しむ。

（いい声……）

だんだん瞼まぶたが重くなる。

サリエスは、あの液に睡眠薬でも混ぜていたのだろうか？
異様に眠いんだけど……

ゾンビ医者め……

* * * * *

溺れる夢をみて目を覚ますと、真夜中っぽかつた。
ベッドサイドのライトからオレンジ色の柔らかい光が室内をほの
暗く照らしている。

ベッドの横を見ると、アルが長椅子に横たわって寝っていた。
影の濃い部屋に、一人きりじゃない事にホッとした。

アルは、上着を脱いで布団代わりに掛けているけど、薄ら寒そう
だ。

空調が入っているのか、凍えはしないけどそのまま寝たら風邪は
引きそう……

でも、温度上げるのとかって、どうすればいいのか わかんない
し

それよりも まず、トイレ ポイレ。

寝る前に、あんなに水を飲んだから……

そうと起き出して、アルに気付かれないように怠ぐ。

はあ～と息をつくと、ぶるっと寒気がきた。

「くしゅん！」

アルがくしゃみをした様だ。

王子様の生くしゃみを見逃した……

人がくしゃみする時の顔つて、好きだな～

無防備っていうか、取り澄ました人でも、つい地が出てしまう感じがいい。

どんな美形でも、一瞬だけ変顔になるし。

次は、ぜひお田に掛かりたい。

寝室を抜け、居室に出る。

世話係りの女神官は……居眠りしている。

この部屋に通されてから、この人がずっと面倒を見てくれている。神殿は人が足らないのだろうか？

豪華な神官の衣装を作る金があるなら、もっと人手を増やせよ、予算配分おかしいだろ。などと思いながら、気持ちよく寝ているところを起こすのは気の毒なので、そのまま寝室に戻った。

ええ～っと。

空調の温度も変えれないし、毛布とかも見当たら無い……あるのは自分の掛けていた薄手の羽根布団一枚。

仕方が無い。

ベッドから羽根布団を引っ剥がし、アルにそつと掛ける。ベッドがクイーンサイズおかげで、掛け布団も大きくて長椅子から随分はみ出る。

よしよし、アルは眠つたままだな。

閉じられた瞼の下に睫毛の影が出来る……

身長差の所為で、じっくり見れなかつた顔を観察する。

(よく出来た造りだな)

これが正直な感想。 眠つている顔までかつこいつて反則じゃない?

涎ぐらい、垂らそつよ

視線の先には鼻。 スッと通つた高い鼻。 日本では滅多にお目にかかれぬ縦長の鼻の穴、……

無防備に眠る美形の本物王子様。 またとない絶好の機会。

(なぜ、この部屋にはティッシュが無い! こよりを作る紙も見当たらない!)

いつそのこと自分の髪の毛で……いやいやいや、それは女の子としていかがなものか。

一瞬の内に衝動と抑制が頭を駆け巡り、怒らせて出て行かれるのは拙いという結論に至り、泣く泣く生くしゃみはお預けとした。

長椅子からはみ出した布団を柏餅の葉ようにして包まり、アルを起こさないよに、そつと寄りかかり眠くはないけど目を閉じた。ひとが呼吸する微かな動き、仄かに感じる体温。 それが、こんなに安心するものだなんて知らなかつた。

アルのゆっくりとした呼吸のリズムに合わせて、息をしてみる。
他に何の音もせず、規則正しい寝息だけが静かに聞こえる。
やかに時間が流れるような気がした。

メールも、ネットも、ゲームも、勉強も、何も無い静かな夜。
寂しいはずなのに、寂しがらない自分が不思議だった。

緩
ゆる

30話 巫女 5 寝室にて ~side花音(後書き)

読んで頂き、ありがとうございます。

諸事情の為、これから更新がゆっくりになると想います。
どうか、ご理解してやって下さい。

もちろん、完結するまで頑張りますので、これからも宜しくお願い
申し上げます。

3-1話 巫女 6 蒼玉宮 ~side花音

チチチチ……

小鳥の声がひるさいな……

眩しい カーテン閉めるの忘れたのかな?

ううーん……もうちょっと寝たい

窓に背を向け、「口ロンと寝返りを打った。

ん?

何? あつたかい物に包まれてゐる……

ん?

コレ、なんだろ?

開けたくない田を開ける。

田の前に、一つの青い空があつた。

「おはよ。 カノン。 よく眠れた?」

朝日じきらめきら輝く、整つた顔。

寝起きで頭が回らない……ぼやんと見ると

胸焼けする程、甘い笑顔が近付いてきて

口唇を塞がれた

ちゅく

「んー んんん……！」

頭の後ろに手を回されて、顔が離せない

ぐぐ

ドガッ

ベッドの下に蹴り落とした

物音に驚いたのか

「失礼致します。殿下？ カノン様？ どうかなさいましたか？」
と、遠慮しながらも女神官が顔を出す。

「なんでもない。朝の挨拶をしていただけだから」
何事もなかつたかのように、さらりとアルが流す。

「こんなのは挨拶じゃない！（こきなり、ベロちゅうづつて！）
しかも、どうしてアルがベッドにいるの…」

「それは、昨夜カノンが僕を放してくれなかつたからじゃないか」
意味あり気な流し目で、ニヤニヤしながらアルが続ける。

「カノンが僕に掛けてくれた布団の中で、カノンまで一緒に床で寝てしまつていてるのを、

目を覚ました僕が見つけて ベッドに運んだんだけど、
カノンは僕の服を掴つかんだまま放してくれなくて……ねえ？」

アルは、女神官に同意を求めるように振り向いた。

昨日、話の中で普通の口調の方が聞きやすいと言つてしまつたらか、アルの話し方が急に馴れ馴れしくなつてゐる。
中に入り辛かつたのか、入り口付近にいた女神官は、急に話を振
られて戸惑いながらも

「はい。あまりに固く握られておりましたので、無理やり剥は
訳にもいかず……殿下がこのまま眠らせた方が良いと仰せでしたので、私が殿下のブーツをお脱がせて……」
女神官が私に申し訳なさそうに口ごもる。

私のせいですか？！

私が寝ぼけて、アルの服を離さなかつたのがいけないんですか？
それでキスされるなんて、全然得心してないけど！

「キスは余計だと思『う』」

ボソリといつた私に

「一晩耐えた『こ』褒美つてこと『で』。 ね？」

甘く蕩ける極上の笑みを、朝っぱらから振りまくな。

裏わないでくれて、ありがと『う』 とでも言えぱいいのか？

ムカつく。

腹が立つ。

王子だと思って、丁寧な対応を心がけてた自分にも腹が立つ。

もう、敬語とか使つてやらないからつ！

でも、文句でも何でも、言葉を口にしたら喜ばれてしまつ『う』
雰囲気なので

無言で睨め付ける。

そんな私の刺す様な視線など、蚊の針ほども感じないのか

「どきどきするから、そんなに強い目で見つめないで〜」などと鼻
歌でも出てきそうな にこやかさで、アルは居室へと背を向けた。

腹立ち紛れに、うしろ姿目掛けで 手近にあつた置物を投げつけ
ると
アルは当たる寸前に振り向いて、ヒヨイと受け止めると

「これだけ元気なら、今日 部屋を変われそうだね。 後で迎えに
くるよ」

そういうと、置物を適当な棚に置いてサツと消えた。

あいつは後ろにも、目がついてるのか……？

いやいや、それより部屋を変わる？

着替えを持って来た女神官に

「今日、部屋を変わるのですか？」

と尋ねると

「蒼玉宮の方が、カノン様は落ち着かれるだらつ とお聞きしましたので……」

「誰がそう言ったの？」

「アルフレッド殿下が…… そう おっしゃられて……」

「…………。」

勝手に決められるのは気に入らないが、確かにこの部屋は「トト」にて飾られ過ぎて、とても寛げるものではない。

それに、あの怖い神の間から、少しでも距離を取れるのは嬉しい。文句を言つのは、蒼玉宮とやらを見てからでも遅くなかろうと、私は身支度を始めた。

今日は巫女の装束ではなく、ドレスを着た。

ドレスは、オフホワイトの厚手でスルスルした手触りの綿地に水色レースが重ねられ、ブルーのサテンリボンが所々にあしらわれている。丸く大きめに開いた襟ぐりは鎖骨が見える程度で、パフスリーブの半そでに水色のジョーゼットの長袖が内側から出ている。

スカート部分はハイウエストで、Aラインを描いて床まで自然な広がりを見せている。^{おひきよ} 大仰なパニエや固いコルセットで締められることなく、ドレス丈も、いつ計つたんだろう？という程、床上丁度に仕立て上げられていて、予想していたより、楽に過ごせそうだつた。

朝食を終えると、アルが迎えに来た。

オリエンタルブルーのフロックコートに揃いのズボン、濃い藍色のブーツという格好だ。

昨日の謁見の時と比べて、随分と軽装。飾りや刺繡も無いし、シンプルだ。

これが、王子様の普段着だらうか？

上着の前を開けて、中のベストまで肌蹴^{はだけ}るのは、少し崩^{くず}しそぎの感があるんだけど……

私の荷物なんて、全く無いので部屋を変わるといつても、自分が付いていくだけだった。

アルは、神殿から蒼玉宮に付くまで、建物など色々な事を解説してくれた。

蒼玉宮は、白と青を基調にしたすつきりとした小宮殿だった。

内装もシンプルでありながら、趣味が良く、迎賓館の装飾過多に満腹だった私は、この宮殿の爽やかな空間に大満足だった。

その様子を見ていたであろう、アルが

「蒼玉宮へ ようこそ！ 気に入ってくれた？」

と、ニヤリと笑つて自信あり気にいうから

つい

「悪くない」

と、素つ氣無い返事になつた。

そんな私にアルは苦笑しながらも

「此處には、僕と古くから仕えてくれている侍従や侍女しかいないから、気兼ねなく自由に使ってね」と言って、彼らを紹介した。

案内された部屋は、白と水色、淡いピンクといったパステル系を基調とした、女性らしい優しい色合いで、広いリビングと小さめの寝室に分けられていた。（小さめといつても優に10畳は越すだろうけど）

リビングある寝室と反対側のドアを開けると、壁一面本棚になっている部屋だった。

大きな黒檀の机と、布張りの優美な応接セットが置かれてある。

更に奥のドアを開けると……

キングサイズのベッドが中央に鎮座した、いかにもメインベッドルームという部屋。

濃紺の天井には金と銀で星が描かれ、夜空を移した様。壁は紺から群青のグラデーションに銀彩で植物の文様が繰り返されて、不思議に落ち着く空間に仕上げていた。

「きれい」

思わず呟くと

「僕の寝室。 気に入ってくれた？」

アルが私の頭の上にコツンと顎を乗せて、後ろから そっと抱きしめてきた。

びっくりした。

足音しなかつたよ？

つていうか、やめてほしい。

ふじいぬえもの
不心得者には頭突きでもプレゼントしようかと、一瞬沈み込む私

に、

アルはスッと頭を引き、腕を緩めたと思つたら、離れ際に頬に軽くキスをした。

「朝ので懲りたからね。」うちの部屋が氣に入つたのなら、今日から使う? 寝心地いいよ?」

そう言つてベッドに仰向きにダイブして、ポンポンと躰を叩く。

「.....」

ありがとう! お言葉に甘えて、今晚からあなたと寝るわ!
きやはっ!」このベッド、ホントに寝心地いいね。 今晚から口

ロシクね!

な~んて、私が言つとでも?

申し訳ないけど、日本人の脳みそでは、そんな展開ありえないと思うよ。

そして、やつぱり此処は アルの家だつたか。

そんな気はしていんだけどね..... 寝室が書斎と居間を挟んでつながつているって身の危険を感じるわ。

無言で頬つぺたをゴシゴシ拭つて居間に戻つた。
鍵が付いていたから、ついでに締めておいた。

ソファに腰掛けると、タイミング良く紅茶が出された。
自分より少し年上の侍女に礼を言い、花の香りのする紅茶を飲む。
優雅だ。

「カノン。

開けて」

「カノン。

開けて」

無視する。

力チャ

アルが鍵を開けて入ってきて、正面に腰を下ろした。
何事も無かつたかの様に、出されたお茶に口を付けている。

「いい香りだ」
にこやかに言い、足を組む。

私が無言で差し出した右手にチラリと皿を遣ると

「様子が見れないと、心配なんだけど？」

と言いながらも、意図を察して すんなり鍵を渡してくれた。

「サリエスが、心配ないって言つてたから、大丈夫。」

そうそう。入つて来られるかもと思つだけで くつろげない。
鍵を渡して油断さずためか、最初から渡すつもりだったのか アルの真意が分からなければ、後でノブの隙間に何か詰めて動かない
ようにしておこう。

それから後は蒼玉宮を案内されたり庭を見たりして過ごした。

アルは よくしゃべり、よく笑う。
ずっと笑顔。

私が無愛想な態度でも、至れり尽くせりに世話を焼く。
それはまるで、愛しい恋人に対する様にである。
うかうかしてみると、好かれていると勘違いしそうになる。

その、うつとつとある甘い声に心が持つていかかる。

危ない。

しつかりしなければ！
例えアルが 親切で、優しくて……格好良く、好みの顔であ
つても
違う世界から連れて来て、戦争なんてものに巻き込んだ張本人な
んだから。

「こ」は知らない世界。

利用されて、サクッと殺されるなんてのも、在りえないと想つ。
このアルフレッドが、それをするとは考えにくいけど……
でも、「こ」まで手厚く持て成すのは何故だろ？
強要すると、何か不具合が出るのだろうか？
あの神の間の事があるからなあ……
のこのこ近付いて、食べられちゃうとかは嫌だなあ
巫女をやじたくないくつて言つても「ほい、そうですか」で済まさ
れないだろうな。

などと、考へてみると

ツルつ

「うわあー！」

階段で滑つて転びそうになつた。

「だから、気を付けてねつて言つたのに。僕の話、聞いてなかつ
たでしょ？」

アルに抱きとめられた。

(ああ、はいはい)

(アルの説明を聞き流していましたよ

でもね)

「ほつぺにチューは余計じやないかな?」

「わう?」

やつと頬から口唇を離して につこつ微笑むと、また転ぶと危ないからね と、手を繋がれてしまった。

これじゃあ、恋人同士の散歩じゃないか と思つたりしたけど、転んでチューされるのも迷惑なので、従うこととした。

スキンシップ過多だよね。

「のまま恋人ごっこを続けていても、私が聞きたい話には一向にならないし
いい加減、誰に聞くとか何時聞くとか……考えるのも面倒くさくなつて

「そろそろ、本題に入らない?」

庭園の東屋で冷たくしたハーブ茶を飲んでいる時に切り出した。

「一体何のこと?」

アルが笑顔で聞き返す。

「いくら巫女が貴重でも、丁重に扱い過ぎなんじゃない?

巫女つて、一体何者なの? みんな、巫女に何を求めているの?」

真剣に聞く私を見て、アルは真顔で

「僕がカノンを大切に扱うのは、カノンの事が好きだからだよ」

「好きって……逢つてまだ3回なんだけど」

「好きになるのに、時間なんか関係ないよ。カノンと逢つた瞬間に好きになつてしまつたんだから」

(一回惚れですか？ やはり王子… まさに王道)

「私の事、何も知らないで好きとかつて、おかしいでしょー。」

「おかしくないよ？ まだ3回だけど、どんどん好きになつているから。カノンを知れば知るほど、きっともつと好きになる」

(ここからは また、歯の浮くようなセリフを……)

「それに、カノンは僕の運命の人だつて、皆、知つてているから丁重な態度になるんじやないかな？ 巫女を神聖視してゐる者もいるけど、神を降ろす儀式を執り行つ事以外は、巫女は自由だし」

「…………自由」

「なぜだか その言葉に引っかかつてしまつた。

「自由って？」

アルフレッドの優しげな顔立ちを見て、ジリッと苛立ちが込みあがつてくる。

(怒っちゃダメだ！ キレて状況が良くなることなんてないつて解つてゐるのに！)

と、自分を諫めるも

「…………の私に、自由なんてあるの？」

怒りに声が震える。

「自由つて言つなら、元の世界に返して」

(言つてしまつた……)

言葉にしてしまつてから、後悔した。

アルの顔が、今の私の言葉で酷く傷ついたように、歪んだから……

「カノンは、帰りたいの？」

驚いたように、アルが訊ねた。

「訳の分からぬ世界に連れてこられて、巫女だといわれて困っているよ。

学校の友達も 私がいきなり消えちゃって、きっと心配している
正直に言つた。

「ごめん。 浮かれてた。 カノンと出会えて嬉しそぎて……カノンの気持ちを考えてなかつた。

今まで召喚で来た女性達は、皆 何かしらの事情を抱えていて、元の世界で生き辛い人ばかりだったんだ。
だから、カノンもそうなのかと、勝手に思い込んでいた
本当に申し訳なさそうに、アルが謝つた。

「あの世界で生き辛い事情……」

驚いた。

(私、そんなに、嫌だったのかな……？ 世界を超えてまで、逃げ

出したい位に。友達や家族を放り出してしまつ程に？）

なんだか、笑い出したくなつてきた。

（被害者面ヅツして、自分も逃げ道に飛び込んだつて訳か……）

呆然としたり、笑いそつになつてゐる私は さぞかし不気味だつたのだろう。

アルが慌てて言葉を続ける。

「カノン。 カノンの世界へ還すかえことは出来る。 でも、呼ぶのも返すのも一度きりなんだ。

カノンを還してしまつたら、僕は もう2度とカノンに会えない。それは、嫌なんだ。 カノンにずっと傍そばに居て欲しいんだ。」

「カノン。 今すぐ帰らなくともいいだらう？

君には絶対辛つらい目に遭あわせない様にするから、 ここにいてくれないだらうか？」

アルの空色の瞳には、何か切実な孤独感じゆくかんみたいなものが浮かんでいて、私を戸惑わせた。

何がアルを駆り立てているのだろうか。

アルの真剣な告白に、私は軽はずみな返事は してはいけないと思つた。

この人の言葉を信じていいのだろうか？

また、裏切られたら？

好きだと、愛しているとか言つても、何か他に目的があるのかも？

でも、私は此処ではただの16歳の小娘にしか過ぎない。家名も財産も、何一つ持つていない。

あるのは自分自身だけ。 その私をアルは好きだといふの？

知りたい。

アルは何も持たない私の、何処を好きだといふのか。

「嫌がることはない」と、約束するなら……もう少し居る事にする

答えを聞いた瞬間からアルの顔が輝き出して、私をギューッと抱きしめて おでこと頭にキスの雨を降らせた。

だから。

それ、嫌なんだけど……

32話 巫女 7 夜明け前 ↴ side花音（前書き）

花音の生き立ちについて

夜明け前 一日の中で一番暗い時間だと思つ。

昨日はアルと蒼玉宮を散策して、疲れてしまい早くに休んだ。
よく眠れた感じがしないのは、このベッドの寝心地せんねん云々ではない。
いいベッドだ。寝具も、さすが王室御用達の品と賞賛すべき使
い心地のものだ。

理由は……たぶん、アルとの会話

『今まで召喚で来た女性達は、皆 何かしらの事情を抱えていて、
元の世界で生き辛い人ばかりだったんだ。だから、カノンもそ
なのかと、思い込んでいた』

頬を、思い切り張られたような気がした。
そうだ。

私には、あの世界で生き辛い事情がある。

召喚されたあの時、

私は、全てを壊してしまったかつた。

自分が逃げられない檻に閉じ込められているようで、
家も家族も、自分の未来でさえ壊してしまつて
知らない場所で、新しい自分になつてみたかつた。

いつの間に、役割を背負わされたんだが……

小学校に入った頃は、父親の創めた会社はじめのが軌道に乗り始めた頃で両親とも忙しかったけど、割と楽しかったように思う。

保育園から地元の小学校に上がつて

近所の子達と、毎日 公園やら友達の家とかで遊んで成績は一の次、遊びが一番！

実に、一般的かつ庶民的、麗しの子供時代を過ぎていた。これからも、その暮らしが続く予定でいた……

だけど、会社がどんどん大きくなつて

母親は社長夫人としての付き合いが増えた
父親も事業が海外進出したりして益々忙しくなつて……

一緒にいる時間は、どんどん少なくなつた。

いつまでもマンション暮らしではいけないんだと、豪邸に引っ越しした。

広すぎる家は、落ち着かなかつた。

忙しくて私の世話も出来ないし、掃除も大変だからとお手伝いさんお手伝いさんが来るようになつた。

お嬢様と呼ばれた。

この頃からだらうか？

両親が、ありのままの私を見てくれなくなつたのは、
それぞれの、『自分の娘像』の枠に当てはまる部分しか、見ない
様になつてしまつた。

パーティーに連れて行かれるのは、慣れない豪華さが苦痛だった。

そこで出会いの同じ年頃の女の子は、みんな私立の学校に通っていた。

父親が「女の子は私学の方かいのかも」と言い出して、大喧嘩した。

無理やりの受験勉強なんて嫌だつたし、お嬢様とは話しても面白いと感じたことが無かつたからだ。

そんなの集まる学校になんか、行きたくなかった。

頑張つて食い下がつたけど、いかんせん小学5年生。帝王な父親に圧倒的な力量不足で負けてしまい、中学受験の勉強をさせられた。

しかも、お嬢様学校ばかりだ。

今まで、ものすごく適当に勉強してきたのだ
無理があつた。

否。不可能。

こんな脳みそで合格ラインまで持つていいくつて、どんだけ、頭いい子なんですか？

凡人の脳ですよ、残念ながら。

母親にも、行きたくないし入れないって言つてはみたけど、理解してもらえなかつた。

母親は、才色兼備の完璧お嬢様だ。

家が京都の名家で、それはもう 生粋のお嬢様。

それが、お父さんと恋に落ち、駆け落ちした。

それ以来、一度も実家には帰つてないらしい。

自分を中心に戸惑っている人で、彼女にとつて重要なのは、自分がどう思うか。

人がどう思つてゐるかとか、感じてゐるなどを、考慮する認識がそもそも無い。

そんな、母親だから、私がお嬢様らしく振舞えないのも、受験に全て落ちたのも

謎らしい。（当然なのにつー！）

私に対する愛情は、あると思つけれど 自分の『えたい愛情しか、持ち合わせていない。

それが私の母親。おかあさん

父親は

母親の事を愛している。

彼女のことのみ、愛している。信奉している。

彼の理想の女性像は、妻である彼女。

だから、娘にも母を見習えと言つ。

でも、所詮中身が違うのだから、思つ様にはならず 最後に飛び出すセリフは

「もついい。お前は、黙つて++している」だ。

もちろん、黙りもしないし、言わたした事もしないけど。

容姿こそ妻似だが、性格が自分にそっくりの娘は頭痛の種らしい。

母親から見れば、頭脳明晰・容姿端麗の素敵な父親も、

私から見れば……絶対君主で独裁者だ。

確かに、創業者としてのカリスマ性があるのは感じている。

帝王オーラつていうか……社員でも信者みたいな人いるし。

でも、押さえつけられるのは我慢できない。

嫌なものは、嫌だ。

そして、更に役目を背負わされる事になつた。

入学してすぐに、母親の実家から連絡があつて

「長男一家が事故で亡くなり、三条家を継ぐ人がいなくなってしまった。

子供を跡取りに就ける「いつもので、諸条件を話し合つた結果、三条家へ養女に出された。」

住む家はそのままだけど、鈴木花音から^{すずき かのん}三条花音^{さんじょう かのん}になつた。

母親は結婚を反対されたから、家を出たのであって 別に三条家を嫌つている訳ではない。

この機会に、両親と仲直り出来て とても幸せそつた。

そんな嬉しそうな母親を見て、「お母さん、よかつたね」と思つ自分がいて、次ぎたくない、とは最後まで言えなかつた。

由緒正しき三条家、唯一の直系で跡取り娘。

京都の三条家に連れて行かれた時は

「いやあ。 花音ちゃん、何もできはらへんねんな。 まあ、よろしいわ。 にこにこしてくればつたら、何とでもなりますやろ」

(訳・まあ、いやだわ。 花音ちゃん、何もお出来にならないのですね。仕方ありませんね。 何もしなくていいですから、せめて外面だけは整えておいてくださいね。 後はこちらで対処しますから。)

)

などと、馬鹿にされた。

その時は、三条家に入ったことを心底後悔したが、後の祭りだ。不出来な私のために、専用の執事兼、教育係が付く事になつた。三条家から派遣された、黒い執事、その名も黒須。^{くろすけ} 何が黒いかつて……

黒髪、黒目、服装も黒ずくめもそうなんだけど、雰囲気が、オーラが黒い。 絶対悪いことを、企んでいそうな…… できれば近寄り

たくない人種だ。

そして実際、なんでも お見通しで、腹の中で何を考えているのか分からぬ、ヤな奴だ……

その頃、私は初恋の真っ最中で、家庭教師の先生が恋人でした。公立中学に行く事の交換条件で家庭教師がついたんだけど、大学生で頭良くて、素敵で優しくて……理想の彼氏。彼も私の事を愛してくれている。少なくとも、私はそう思つた。

でも、違つた。

企業がらみの策略があつたみたいだけど、金で雇われただけだと本人から聞いた。チヨ口かつたらしい。

私としては、かなりショックを受けたんだけど、こうなる事も、黒須には分かつていたみたいで

「実際に経験してみないと、分からぬ事があります。どんな経験も花音様の力に何れはなるでしょう。花音様の価値は、なん何ら傷つくことなく、むしろ、良い勉強をされた分、上がつた事でしょう。

「などと宣のたまつふのだ！」

しかし、黒須の言葉とは裏腹に三条家の祖父の耳に入るや、問答無用で

名門 聖アグネス女学院高等部に入れられる事が決定した。

聖アグネス女学院は、上流階級のお嬢様のみ入学を許される、全寮制の知られる有名校で、鈴木家の様なにわか成金は不可。三条の名前の威光と、莫大な寄付金で入学が決定した。

それと同時に黒須は三条家に戻される事になった。

三条家の跡取り娘に虫が付くのを防がなかつた責を負うことになるのだそうな。

家庭教師の彼は、行方不明らしい。父親が激怒していたから、今頃は……

3日。

中学の卒業式まであと、3日。

卒業式が終わつたらすぐに、私は拘束じゅそくされる。

祖父の命で学院に送られる。

正真正銘のお嬢様として、上品かつ聰明な何処に出しても恥ずかしくない三条花音にする様、教育される日々が始まる。

そこには、気を許して笑い合える友達もいない、優美な鳥籠とりかご。

何處かへ、逃げだそうか？

ダメだ。他に替わりがない。

両親にも、祖父母にも 三条花音が必要なのだ。

逃げられないのだろうか？

罠だらけの、汚い世界から。

私を理解しない人たちの中から。

あと、3日で決めなくては……

黒須の情報によると、学院の警備は厳重で、侵入はおろか脱出も不可能だそうな。

「入つたら、出られないと覚悟して下さー」
そう言われた。

そんなのは嫌だと散々言つたけど、じゃあ代わりにコソをすると
か具体的な目的はない。

だから意見は通らない。駄々でしかない。解つていい。

でも、嫌なものは嫌なのだ……

逃げないけれど、逃げたい。

望みもしないのに背負わされた役割から……

その時の私は気が付いてなかつたけど

私は、私でいられる場所を欲していたのだ。
それも、どうしようもないほどに。

心から笑つていられる場所を……
心の底から信じられる人を。

此処には、それがあるのだろうか？

逃げ出した先の、この世界に私の居場所があるのだろうか？

夜明けまで、あと少し。

私は、一番暗い時間にいる。

33話 巫女 8 後宮にて～sideアル

カノンを蒼玉宮に移した次の日

王妃のたつての希望で、カノンを伴つて 後宮の夜会に出席せねばならない。

本当は昨日訪れる予定だつたが、カノンの体調が優れなかつたことで 日延べされたのだ。

出来る事なら、もつと口を置いて 十分カノンを静養させてからにしたかった。

しかし、王妃の催促でそれも叶わず……

(巫女姫の、顔を見せろつて事だな)

うんざりしながらも、断ること等出来はしない。
など
気の重い用向きである。

昼食の時も、つい言葉少なになつてしまつた僕に、カノンは頬杖ほおづえをついて

「そんなにイヤな相手なら、行くの止めよう。 巫女も体弱いとか
言つとけば?」

依巫よつけの具合を聞かれて、まだ意識が戻つていないと教えたからか、デザートの赤いチエリーを口に含みながら、行儀の悪い態度でカノンが言つ。

昨日の王の前での立ち回振る舞いから、彼女の育ちの良さが伺える。 それを、あえて悪ぶつている。

(「Jの子は……また、かわいいことをして……」)

昨日もそうだが、カノンはかわいい。

何をしても、かわいい。

「昨日の眠っているカノンは、無防備で表情もあどけなさを残していた。

しかし、軽く触れる体の曲線は16歳だといつ翻には立派で、十分な成長をしているようだ。

朝まで眺めるだけで、手を出さなかつた自分を褒めてやりたい。

カノンは素つ氣無く、無愛想に振舞おうとしている。何故そうしようと思ったのか、元からそんな風なのかはまだ不明だが、表情や仕草の端々に感情が漏れ出ていて、何を考えているのか分かり易い。

それを隠そうとしている所がまた、猛烈にかわいい。

怒つていうが、睨みつけようが、どの顔も僕の目に愛おしいカノンとしか映らない。

(もひ、Jの部屋に閉じ込めて、誰にも見せないで独り占めしたい)

しかし、そんな訳にもいかず……

王妃や側室達はまだしも、侍女連中の鋭い視線にカノンを晒すことを想像すると、溜息が出てくる。

「行きたくないですって言つてしまいたいけど……言えないんだよね~」

苦笑いしか出でこない。

「そんなん、嫌な人達の所へこれから行くの?」

カノンが綺麗な顔をしかめる。

(「うひうひ。 カノンを怯えさせてどうするー・自分ー！」)

「気が重いって言つてもね、王族つて話す時に氣を使つし、疲れるからつっていうのと

カノンがあんまり可愛くて、みんながいろいろ言つてきそうだなつて事くらいだけだからー。

大丈夫。 カノンは僕の傍に居るだけでいいからね。 何もしなくて、いいから。」

安心させるように言つ。

カノンの目が一瞬大きく開かれ、その後、ムッとした顔つきに変わつた。

(あれ？ 何か、氣に障つた？)

なんだかカノンの目に不穏な火が灯つてゐるんだけど……

(今、なんて言つたかな)

「ちらちらカノン、三白眼は止めようね。 戻らなくなっちゃうよ？」
う ん。 何処に引っかかった？

「解つた。 何も言わない。 何もしない。」

ポイントを特定出来ないまま、カノンは話はもう終わりとばかりに席を立つた。

(「うわー 最悪。 機嫌悪つ！ もう本当に 行くの止めたい……」)

夕刻、大神官が供を引き連れて訪れた。

僕は、魔道騎士団の軍服、カノンは巫女の装束を身に付け、共に後宮へと向かう。

後宮へ通じる大扉の前は、ちょっとしたロビーになつていて、後宮へ入る手続きなどの間に利用する者も多かつた。

そこにロイスは居た。

偶然を装つているが、どうやら、後宮へカノンを伴う事を聞き付けたようだ。 そういえば、ロイスはカノンをまだちゃんと見ていなかつた。 召喚の時、仄暗い中で見ただけだし、王の謁見にいたのは王太子と評議会の面々、公爵家の当主のみだつた。

（ロイスは父親の公爵から、夜会の事を聞きだしたか……）

後宮でのやり取りを思つとうござりするのに、今 ロイスに関わつて面倒事は起こしなかつた。

しかし、ロイスはカノンに興味深々で、「珍しい黒髪だ」などと、カノンの髪に触れようと手を伸ばした。

制止しようとした その時

パシッ！

ロイスの手が、叩はたかれた。

「汚い手で、触らないで」

嫌悪感も顯あらわに、カノンが冷たく言い放つ。

元から今日のカノンの機嫌は悪かつたのだ。 気位の高いカノンが、ロイスの無遠慮な行いを許す訳はなかつただろう。

そんなカノンの性格を知るはずのないロイスの顔面が、見る間に怒りでどす黒く変色していく。ロイスは公爵家の嫡男として、皆に傳かれてきた所為か傲慢な男である。巫女姫とはいえ、年端もいかない少女に無下にあしらわれ、ロイスは激昂して体を震わせた。

「何をするーーこの女ーー！」

僕は、詰め寄ろうとするロイスとカノンの間に体を割り込ませると「ロイス。これから王妃殿下の夜会なんだ。悪いけど、また後でね」即座に、カノンをロイスから引き離す。

王妃との約束を持ち出されでは、ロイスも面と向かっては文句を言えずの一瞬押し黙る。

その隙に「じゃあね」とカノンを庇いながら通り過ぎようとした。

ところが、その時ロイスがカノンの手首を、がしりと掴んだ。

「なにをする！」僕が言葉を発する、その前に

ズダン

ロイスは、掴んだ手をそのままカノンに取られ、往なされて、仰向きにひっくり返されて……

自分の身に何が起こったのか理解出来ないまま、眼を見開き床の上に尻餅を付いていた。

瞬きする間の出来事に、皆 唸然とした。

不意を衝かれたとはいえ、ロイスも一応 騎士団に属している。鍛錬もそれなりにしているはず。

そのロイスを軽く転がしたカノンは、床の上のロイスに、さも汚らわしいという一瞥を向けた後、フイとその顔を大扉の方へ向けると、ロイスが眼に入らないようにか 僕の影に入ってしまった。

激怒の余り、口がまともに聞けないロイスに大神官が
「まあまあ。 巫女姫様は清純な乙女故、貴殿の所作に驚かれたのでしよう。 気をお鎮め下さりませ」
ホホホと長い白鬚を揺らしながら、やんわりと諭し、
お付の神官がロイスを立たせる間に、さつさとカノンを大扉の中に入れてしまった。

ロイスを残したまま大扉が閉まつてすぐ

「カノン。 今の凄かったね！ ロイスに何をしたの？」
待ちきれない気持ちでカノンに聞いた。

気分が少し晴れたのか、柔らかい表情を浮かべて

「子供の頃から変態よけに翻つている 合氣道の技を使つたの」

「アイキドー？」

「武道の一種よ。 相手の勢いを利用して、投げたりする身を守るための体術って言えば解るかな」

ああ、わかるよと頃突けば、カノンは そう？と口元を綻ばせた。

そして、僕の目を見つめて

「アルと、さつきのあの男とは、友達なの？ 私が召喚された時にも見かけたんだけど」

探るよつた口調で尋ねた。

「ああ 友達といつか……幼馴染で同級生かな。 同い年だから 小さい頃から、何かにつけ一緒だつたんだ」

ロイス・エッカートは公爵家の嫡男で、彼の受け継ぐエッカート
公爵家は、広大な領地を所有し、豊かな経済力を誇っている。 王
家としても扱いには注意が必要な大貴族だ。

その嫡男と同い年の僕には、「友好を深め、かじょうじゅみ 懐柔し、王家の影響力
を高めよ」と命令され、なんとか友達になるよつてしてきたのだが

我僕わがままで 粗暴そばくなロイスとは性格的に会わないし……

従えるというより、良いように使われている感じ？

でも、カノンの目には ロイスと付き合つ僕は、彼と同類に映つ
ていたのだろう。

「不愉快な思いをさせて、ゴメンね。 もうロイスを前に近づけな
いから」

そう言つと

「ええ。 そうして」

カノンは低い声で答えると、ツンと前を向いたまま、僕の方を向
かない。

ちよつとロイスに対する反応が、過剰じゃないかと 思わないこ
ともないが、

僕に接する甘さを含んだ つれない態度と、ロイスへのそれとは
まるで別物である

(カノン、僕のこと嫌いじゃないよね?)

ロイスに対する優越感を噛み締めて、カノンをエスコートする。

(さあ、気持ちを引き締めよ。)

そして僕たちは、後宮へ足を踏み入れた。

34話 巫女 9 夜会 ~sideアル

後宮の長い廊下を通り、広間に向かう。
巫女姫の到着を聞き付けたのか いつもより多くの女官とすれ違う。

今日の夜会は、王族と側室、その侍女達だけの内輪のものである。しかし、王の側室は常時8名、後宮に住まう王子は3名、王女2名で、後宮を出て宮を持つ王子はアルを含めて9名いる。王女の数が少ないのは、他家に嫁に出しているからだ。これだけの人数に侍女も加わると内輪とはいえ、そこそこの規模である。

夜会の会場となる広間に案内されると、其処には既に臣下に下つた王子やその家族、侍女達が、談笑していた。侍女達の華やかな輪の中心に、栗色の短髪を見つけて驚いた。

最もカノンに会わせたくない人物、王太子がいる。

(なぜだ？ 今日は出席しないと聞いているのに…… しかも広間にいるなんて？)

いつもなら王妃と共に入場する奴が、会場で待つのは珍しいことだ。

謁見の時の奴を思い出し、そのまま引き返したい気分になる。

王太子らが僕達に気が付くと 話し声が止み、会場がシンとなる。

カノンの手を取つて、中央まで進み、王太子の前にカノンと並び立つ。

後ろには大神官、神官は入り口付近に控えている。

「こちらに王太子殿下がお越しになるとは、存知上げませんでした。
遅参致しましたこと、お詫び申し上げます」

遅れた訳でもないが、立場上仕方なく、深々と、頭を下げる。

「よい、アルフレッド。用が早く済んだから、勝手に押しかけた
のだ。母上にも来るとは言つていない。一昨日は慌しくて巫女
姫をよく見れなかつたからな」

王太子はカノンに目を遣り、上から下まで舐めるように見廻し

「王太子のヘンリーだ。巫女姫殿には出来る限りの事をして差し
上げたい。望みがあれば何なりと、このヘンリーに申し出られよ
好色そうな笑顔を浮かべ、王太子は毛深い手でカノンの手を取り、
分厚い唇を カノンの手の甲に押し付けた。

(カノンに触れるな!!)

情欲のこもつた奴の視線に晒すだけでも、カノンが穢されそうな
のに、挨拶とはいえカノンを触られるのが不愉快で、殺意を覚える。
そんな僕の気持ちを知つてか知らずか

「ありがとうございます。 王太子殿下」

カノンは鈴の鳴るような可憐な声で、ヘンリーに答えた。
そして 艷やかに微笑み、膝を軽く折つて礼をした。

「お気遣いに感謝致します。でも、アルフレッド様には とても
良くして頂いておりますので、ご心配には及びませんわ」

僕を見上げて、あどけない表情で一囗りと笑う。僕に向けられた甘い言葉に、ヘンリーの手が緩んだ隙に、カノンはさつと掴まれていた手を引き抜いた。

それと同時に少し下がり、王太子には見えない位置で、こつそりと手の甲を服に擦り付けているのが目には入った。
顔は未だ、非常ににこやかな愛想の良い笑顔を浮かべたままで、
である。

僕は危うく噴出するふきだ

しかし、その時

王妃の入場が伝えられた。

王太子以外全員が正面の一段高い玉座を向き頭を下げる。

王の側室達が玉座の横の扉から入場して、

王子、王女が続き

最後にでつぱりと肉の付いた体をゆつさりと揺らしながら王妃が入場し玉座の前に立つ。

王妃は薄くなつた栗色の頭髪に入れ髪をして大きく膨らませ、蟻の尻の様になつた頭に略式の冠を乗せて、壇上から一同を見下す。その姿は長年に渡り後宮に君臨してきた女の驕慢さが垂れ流されていた。

「面を上げよ」

命令し慣れた口調で、王妃が命じる。

背筋をピンと伸ばし、凛と佇むカノンは王妃の前にも関わらず、どこか悠然としていて、後宮の雰囲気に呑まれ萎縮する様子など、全く見られなかつた。

むしろ、その立ち姿は広間にいる者達の好奇の目に晒されてい

ても、超然としていて美しく、輝いて見えた。

王妃は、正面にいる僕とカノンの姿を見つけると

「アルフレッド。」ちらへ

壇上に呼ばれ、カノンと共に上がる。

「王妃殿下。 本日はお招き戴き、恐悦至極に存じます。」ちら
はこの度、召喚致しました巫女のカノン・サンジヨー」「アーヴィング
です」

礼の形を取り、王妃にカノンを紹介する。

「お初にお目にかかります。 花音・三条と申します」
カノンは膝を軽く曲げて宮廷風の礼をとる。 その滑らかで自然
な、洗練された立ち居振る舞いに、王妃は少し目を見開いた。
公爵家の出で、気位が高く、下賤の者を嫌う王妃の目にカノンは
適つかなかなつたのか、王妃はカノンに微笑みかけながら

「アースリング国王妃クローディアじや。 遠い世界からの客人と
して、また巫女姫として歓迎しよう。」

王妃はそう言つと、カノンの背に手を添え

「巫女姫、カノン・サンジヨーじや。 皆、見知りおくよ！」

会場中に聞こえるように声を張る。

皆、膝を折り承服の意を示した。

「音楽を！」

この一言が合図となり、夜会が始まった。

飲み物が配られ、銘銘 食事を楽しんだり話に花を咲かせたりを

始める。

玉座に腰を下ろして

「中々、可愛らしい娘で良かつたではないか。 アルフレッド」「王妃は笑みを浮かべた。

礼を述べようと/orして、王妃の次の言葉に凍りついた。

「ヘンリーが、巫女がとても可愛らしかったと褒めちぎるので、どうのような娘かと思っておったのじゃ。 このように愛らしくて姫なら、真欲しくなるのも無理はない」

(今、なんて言った? 「この女……! ヘンリーがカノンを欲しがつているだと?)

頬が引きつるのを感じながら、何も気付いてないよつこ
「私の運命の女が、このように素晴らしい方であつて、喜ばしく思
います。 よい姫を我が元に迎える事が出来て、まさに僕倖である
と存じます」
牽制をかけておく。

「さて、私達が踊らないと どなたも始められないよつなので、少
し失礼させて戴きます」

これ以上、カノンに余計な話を聞かせたくは無い。
王妃にとびきりの作り笑顔で断りを入れると、カノンの手を取り
さつとと広間の中央に出る。

1曲カノンと踊った後、他の王族や側室などにカノンを紹介して
回り、ようやく一巡し終わった。

食事でも取るつかと広間の端の席へと足を向けると、傍迷惑な程

のきつい香水の香りと共に、耳障りな声が掛けられた。

うんざつとした気持ちで振り向くと

「アルフレッド殿下。」この度は召喚の御成功おめでとうございま
す」

人を食べてきたかのように赤い口唇から、媚くちびるを含んだ声色こわいろが流れ
た。

そこに挑むような顔つきで立っていたのは、バーネット伯爵家息
女、アナベラ。

確か、側室カトリーナ妃の侍女をしている。

ブロンドの髪を高く結い上げ、オレンジ色のドレスの胸元は大きく開き、豊かな胸の膨らみを、これ見よがしに見せつけている。
その格好は、お世辞にも上品とは言いがたい。

以前から度々誘いをかけてくるこの勝気な娘、顔立ちは別に悪くない。むしろかなり美人の類に入るし、スタイルもいい。しかし、何かにつけて、上昇志向が強過ぎる。王子や有力貴族の子弟の妻の座を狙っているのが、あからさまで寒気がする。
いくら見た目が良くて、地位や権力と寝るような女と、結婚する気には、僕はなれない。

そして、そのアナベラの後ろには、彼女の仲間のような侍女達が数人、こちらに向けて含みのある笑顔で立っていた。

「ありがとう。 アナベラ嬢」

早く立ち去つて欲しいと、願いを込めて、最小限の言葉にする。

「殿下、こちらが巫女姫様？ まあ、なんて 可愛らしい姫様だこ

と

アナベラの青い目が細められた。

そして、カノンに向き直ると

「巫女姫様。お初にお目に掛かります、バーネット伯爵息女アナベラにござります。慣れない所で大変でございましょう。暫くのご辛抱でござります。戦が収まれば、すぐにでも元の世界に帰れますから……」

アナベラの、いかにも『同情しているんです』という表情と、豊量たたみ掛けのような口ぶりに、カノンは何も言わず、驚いたような顔をしている。

気性の激しいアナベラならば、何かしらの行動を起こすだらつて覚悟はしていたが……

(これはまた、直球で、きたものだな)

王妃が客人であると宣言した手前、直接的な嫌がらせも出来ずこの程度の嫌味になつたんだろうけど

カノンを不快にさせる者を放置する気も無い。

アナベラの後ろで「巫女だから、アルフレッド王子も仕方ないのよ」「用が済むまでの辛抱よ、アナベラ」だと、取り巻きが申し合わせたかのような台詞をヒソヒソと頬。カノンに聞こえるよう^{セリフ}に^{うるさ}態度と言つている。

(頭の悪い女には、はつきり言わないと分からぬか……)

「アナベラ。君は勘違いをしているね。戦はおこらないし、私はカノンを帰さないよ」

僕の言葉に、アナベラ達がぱっとこっちを向く。

そんな彼女達に

「カノンは愛する、大切な、運命の女なのに、私が手放す訳ないだろ？」

それに、私達はもう一緒に住んでるしね。カノンの可愛い寝顔を見るのが今の私の楽しみなんだよ」

カノンの手を握り、手のひらに口付けをする。女達の目は、つり上がった。

カノンの指に僕の指を絡めて握り締め、頬に寄せて
「君達にも、早く運命の男が見つかるように祈っているよ」
笑顔で彼女達に見せ付ける。啞然としているアナベラ達に向かってさらに寛み掛ける。

「ああ、そうそう。私の大切なカノンが誰かに傷つけられたら……たとえそれが言葉によるものであっても、私の報復を容赦するつもりは無いから。草の根を分けてでも探し出して、息の根を止めないと気が済まないだろうね。君達も、そんな事が起こらないように願っていてくれる？」

そう言つてにっこり笑つた僕を見て、アナベラ達は顔を真つ青にして頷き頭を垂れた。それをそのまま放置して、くるりと踵を返すと僕はカノンを連れてメインテーブルに程近い壁際の席へ付いた。

ワインと甘い食前酒が出され、軽い食事がすぐに運ばれてきた。

カノンは杏の香りのする黄金色の食前酒を一口含んで

「アル。さっきの女はアルの愛人？元恋人？その他大勢？」

大きく黒い瞳で僕を覗き込みながら聞いてきた。全く怒っている風でもなく、むしろ興味津々といったところか……

「とんでもない。どこからそんな考えが出てくるの？ 何の関係もない、ただの顔見知りだよ」

全面的に、関係を否定しておぐ。

「ふうん。違うんだ。ずいぶん綺麗な人だつたしアルに気があるような口ぶりだから、そうかと思った」

銀杯を揺らして香りを楽しみながら、カノンがニヤリと笑つた。そして

「じゃあ、これから修羅場が始まるのかしら？」

心底楽しそうに 広間をくるりと見回して、期待のこもった熱い目で僕を見つめる。

「ええ~っと。残念ながら、今まで終わりだと思つよ?」

「え~~~~！ 無いの？ 修羅場が？ 『この、泥棒猫！』とか、言われないの？ 赤ワインを頭の上から注がれたりして、『綺麗な色に染めてあげようと思つたのに、黒くて汚いままの髪なのね』とかも？」

信じられないことでも言ひたげな顔だ。

「そんな事を期待していたの……？」
頭痛がしてきた。

「だつて……朝からずっと溜息ばっかりついているから、アルにとって よほど都合の悪い事が待ち受けているのかと思って。ほら、定番でしょ？ アルは王子の中でもイケてる方だし、女の子が放つて置く訳ないだろうと……」

「ここにいる女性とは、カノンの想像しているような関係を持つたことは一度もないよ。だから、カノンが期待している展開は、いくら待つても訪れないからね。

そもそも、さつき王妃殿下がカノンの事を客人つて紹介してたでしょ？ 王妃の客に喧嘩を売る人間は此処に居れないよ…… アナベラの言動も大概失礼だけど、あれが限度かな」

(僕は許さないけどね)

「ふん。残念。つまんない」
カノンは口を尖らせて そう言つと もう女達に興味を無くした
ようで、料理に視線を落とした。

(修羅場が定番つて…… カノンのいた世界はどんな所なんだろ？)
カノンの頭の中が読めない僕は、こらからのカノンとの生活に一抹の不安を覚えた。

35話 巫女 10 春の夜 ~sideアル

その後、戦争後も影響力を持つであろう巫女に 自分を売り込もうとする輩に囲まれて、蒼玉宮に帰れりついたのは真夜中近くだった。

カノンは居室へ戻った時から無表情になつて、三人掛けのソファに深く腰をかけると、はあゝと息を吐きながら上向きに倒れ込んだ。

「アル~ 暑い。 窓、開けて~」
伸びをしながらカノンが大きい声を出す。

「はい、はい」
バルコニーに続く窓を開けると、ひんやりとした夜気と共に仄ほの香にマリーニアの香りがした。

庭のマリーニアの花が満開だつた。 風が、その香りを運んだのだろう。

カノンの園のサクラに似ていると、昨日聞いた。

カノンの頭の上にあるクッシュョンを除けて ソファに座りながら
「カノン、大丈夫？ 疲れた？」
無造作に投げ出された 艶やかな黒髪を纏めて 頭を撫でる。

会場では氣付かなかつたけど、頬が朱く染まつてゐる。

僕が目を放した隙に、勧められるまま 吞んだのだ。 部屋に帰つて、酔いが廻つたか？

カノンは撫でられているのが気持ちいいのか、目を閉じて避ける様子は無く

「疲れた。 顔が、すぐ疲れた。 もう笑えない」

頬を両手でマッサージしながら、仏頂面で言った。

確かに、今日のカノンの笑顔は素晴らしいかった。 作り笑顔と分かつている僕でさえ、見惚れる完璧さだった。

「お疲れ様。 頑張つてくれて、ありがとう。 これで暫くは静かに過ごせそうだよ」

(嫌な奴に、目を付けられてしまつたけど……)

まあ、僕さえしつかりしていれば、大丈夫だ。

カノン程は疲れてないんだろうけど、今日は僕も疲れた。

ミルクのたっぷり入った鎮静効果の高いマサラ茶を飲みながら、指でカノンの長い髪を梳すく。

ひんやりとした滑らかな手触りは、とても気持ち良くて 何故か落ち着く。

頬をさすりながら、ぼんやりと僕にもたれかかっていたカノンがおもむろに

「王子って、思つてたより大変だね
ぼそりと呟いた。

「ん？ そうかな？」

「そうだよ。言葉遣いや作法もいちいち面倒くさいし……
アルが すぐ気を使ってたのが分かったもの。
さつきの夜会でも、私の分からぬ駆け引きが、山ほどあつた気が
がするし……」

「王子って、もつとお氣楽なものだと思つてた」

「ああ。召喚する前は、氣楽だったよ。今まで僕は 割と無視
される方が多かったし……」

僕が召喚者になつて、王家でのポジションが変わつたから、動き
たい連中もいるんだよ。

自分を売り込みたかったんだろうね」

「割と無視つて、なによ？」

カノンは むくりと少し起き上がりつて、僕を振り返り まじまじ
と顔を見て聞いた。

「うーん。王子つて言つてもね、母親の身分も低くて、後ろ盾の
無い6番手なんて 注目に値しないからね。先代の王にも子供は
沢山いたし、今の王にも男女合わせて19人子供がある。この国
には王族なんて、掃いて捨てる程居るんだ。だから、後ろ盾の無
い者は 王家の中では軽くあしらわれてしまつんだ。利用価値の
無い者は、存在しないのと同じつて事だね」

「王様は、何してるの？ 自分の子供でしょ？
語氣も荒く、カノンがむくれる。

「僕の母は側室だったんだけど、僕を産んだ後 死くなつてね。
国王は僕に特別な愛情は持つてないと思う。まあ、守役と乳母を

付けて後宮に住まわせて、教育なんかはしっかりしてくれたから、父親の義務は果たしているんじゃない？ ロイスと同じ年だから、学友としての役割が出来たお陰で 生き残れたのは、幸運だつたと思うけど」

「……たいへん、だつたんだね」

暫しの沈黙の後、カノンが珍しく口ひもる。

「病氣で母親を失う子供は沢山いるよ…… 僕だけが特別じゃないから」

微笑む僕に

「そりだとしてもっ！ アルは、一人で頑張つてきたんでしょ？」
びっくりするほど真剣な眼差しで、カノンに詰め寄られて
なぜ、彼女がこんなに熱くなっているのか理解出来ずに戸惑う。

(どうしたの？ 何かおかしいよ？ カノン)

潤む瞳で僕を見つめていたと思つたら、急に カノンはソファの上に ぺたりと座り込み 俯きがちに口を開いた。

「私ね、ずっと自分の家が嫌だつたの。 自分の役割から逃げたか
つた」

ポツリ、ポツリと言葉をこぼす。

「でも、今日 夜会に行ってこの国の王族達を見たら、自分は両親や周りの人たちに守られていたんだなって思った」

「アルは、あの人たちの中ですっと生きてきたんでしょう？」

長い髪が顔に掛かり、陰になつてゐる所^{こゝ}為で、カノンの表情は見えないが、声がかされている。

「小さい頃は滅多に会わなかつたけど、まあ、後宮で育つたからね」僕が答えると

「えらかつたね……」

カノンはおもむろに、ソファの上に膝立ちになり、片手を伸ばして、優しく頭を撫で始めた。

黒い瞳が濡れて、明かりを反射してキラキラと光っている。

頭を撫でられるなど、幼少の頃に乳母からされて以来である。どう反応していいのか戸惑い、動けずにはいる

カノンは、まるで小さい子供にする様に、静かにそつと優しく頭を抱き寄せて

「一人でえらかつたね。頑張ったね」と僕をキュッと抱きしめた。

トクン・トクン・トクン

カノンの胸から規則正しい鼓動の音がする。

胸の柔らかさと、カノンの甘い香り

抱きしめられた腕の細さと、頭を撫でる手の温かさ。

それらが全て合わさって、瞬時に僕の胸の奥に、温かい何かが注ぎ込まれた。

しかし、カラカラに干上がつて、存在すらも忘れていた、その場所は

カノンから注がれるそれを、砂漠に落ちた水の様に、一瞬の内に

沁み込ませた。

カノンはどうこうつもりかは分からなかつたけど、
そうされてくるのは、ひどく心地の良いものだつた。

そして、カノンは僕を抱きしめて、

抱きしめて、

……

抱きしめて

「…………。」

「カノン？」

返事が無い。

「カノン。」「
もう一度呼ぶ。

「……………ぐー……」

(寝息？ 眠ってる？)

耳を澄ます。

せっぽつ

「……………すー……」

首に巻きついた細い腕を、そっと外しひらへ頭を片手で支えながら、ソファに横たえる。

「この状況で眠るか？ 普通

無邪気な寝顔を無防備に晒す この困った姫巫女様に

「まいったな……この酔っ払いめ……
力なく 悪態をつく。

初めて会った時、
真っ直ぐに僕を見たカノンの眼差しに心惹かれた。
それは僕が王子とわかつても変わることなく、媚を含まない澄ん
だ瞳だった。

ただ僕そのものの本質を見際めようとするかのようだ、曇りの無
い目をしていた。

僕は、それが とてつもなく嬉しかった。

そんな風に見てもらえたのは、初めてだから……

そして、今また一つ。

自分で気付かなかつた部分が、カノンを求めている。
一度味わつた蜜は 忘れることなど出来ないものだ。
もつと。もつと と求めてしまいそうで怖い。

カノンの全てが欲しい。

心まで手に入れたいと こんなに思つたことは無い。
カノンといふと 心が満たされる。
まさに神からの贈り物。

うつかり傷つけて壊してしまわないように、
他の誰にも奪われないようにな
気を付けなければ……

「愛している」

安らかな寝顔のカノンに わたやく。

「絶対に、幸せにするから。僕の傍にいて欲しい」
言葉に出して、自分を縛る。

いつの日か、この言葉を告げた時 カノンが肯いてくれたらしい。

その日が来る事を 帰りにいられない。

ともかく、明日からの毎日を大切にしようと想つ。

カノンと出会って、まだ4日だけど
彼女とみると、今までとは 全く違う日々が待つてこそうで……

『僕の世界が変わっていく』
そんな予感に、胸が高鳴る。

甘くて、なんだか切なくなる
花の香りに包まれた 春の夜だった。

35話 巫女 10 春の夜 ~sideアル(後書き)

第1章が終わりました。

思つてもいなかつた長さに びっくりしています。
プロローグ的な人物紹介文に お付き合い下さいました皆様、
ありがとうございます。

2章から、ぽつぽつ話が始まります。

すみません。

ぽつぽつです。

これからも お付き合い頂けると非常に嬉しいです。

1話 秘密のクスリ ↴ side 雪羽

「おはようございまーす。ザンバルデアのクスリをいただきにまいりましたあ」

今日も元気に 受付の女人へ頭を下げて 挨拶をする。

何事も、挨拶が基本だつて面接の時 社長が言つてたからね。

「ユキハちゃん、おはよう。 今日も元気ねえー オバさんまで元気になるわー。 薬、多分もう出来てるから サリエス様のお部屋にどうぞー」

笑顔で通してくれる。

受付の人とも顔見知りになつて、チェックも無しに目的の部屋へ向かう。

療法院の奥にあるサリエス先生の部屋に行くには、セキュリティーチェックみたいなのをするんだけど、もうしなくていいのかな?

魔道師ザンバルデアの元に来て10日が経つた。

初めて会つた時に、なんて呼べば良いのか聞くと

「お爺ちゃん、で良いではないか?」と本人が言つたので、お爺ちゃん」と呼ばせてもらつている。

大体の人は老師つて呼んでいるのに……?

理由を聞くと

依巫よりましで なくなつたあたしが目立たないよう生活する為に、一

般にはザンバルデアの古くからの知人の孫という事で通すらしい。

さらに

『とある事情で 辺境の山奥からザンバルデアを頼りに一人出て

きて、雑用などをしながら、一般常識を学ぶことになった。

人里離れて暮らしていたので、世間知らずの常識無し。

独特の言葉を使う地方から來たので、公用語は片言しか話せない。

なんて設定が付いているんだそうな。

うわんくさい話だなーと思うんだけど、

ザンバルデアの弟子は出世するという説がまかり通つていて、弟子希望の人間が後を絶たないそうだ。ちなみに、ラズモント執務長官も女官長のライアさんもシードも弟子なんだつて。

で、その人達の妬みをかわすためにも、弟子だとは絶対思われない形にしたんだと、シードが教えてくれた。

その代わりに、ザンバルデアをお爺ちゃんと呼ぶあたしを見た人達は、あたしがザンバルデアの隠し孫? だと思つたみたいだけど……

そんなザンバルデアは、スゴク偉い人んだろうに、あたしの前では優しいお爺ちゃんだ。

だから、あたしもお爺ちゃんの手助けになればいいなと、出来る事をやらせてもらつている。

それで毎朝、療法院のサリエス先生の所に、薬を受け取りに来る事が、あたしの日課になつた。

お爺ちゃんは、最近具合が良くないそうで、薬を飲んでいる。

保存がきかない薬なので、毎朝決まった時間に、あたしが受け取りに行くのだ。

コンコンコン!

「しつれい いたしまーす。 サリエスせんせー。 雪羽です。
クスリをいただききに まいりましたあ」

お爺ちゃんに教わった 決まり文句を言つ。

「入りなさい」

いつもと同じ中性的な声で、いつもと同じ返事があつたので、そ
うつヒドアを開ける。

サリエス先生の部屋はメモ紙だらけで、そつと動かないと壁に貼
られたメモ類が飛び。

何が書いてあるのか 私にはさっぱり解らないが、式みたいな
や 図やら記号やらが書き殴られた感じだ。

理解の出来ない物を、元通りにする事など不可能なので あたし
は散らかさないよう 静かに動くようにしている。

いつもの通り、デスクの脇の丸椅子に腰掛け、先生が薬を渡し
てくれるのを待つ。

先生は隣にある 調剤室兼実験室で用意をしているみたい。
暇なので、部屋をキヨロキヨロと見廻す。

デスクの上に写真立て発見！

中の人物は動くのか？と期待して覗き込んだけど、残念。普通
の写真だった……

サリエス先生と…… 知つてゐる人が写つてゐる。シードの上司
の偉い人だ！

しかも、2人とも笑ってる！ ラズモント長官だったっけ？ 笑
うと、こんな顔なんだね～

それにしても、サリエス先生を初めて見た時はびっくりしたなあ
水色の長い髪の毛で、アイスブルーの瞳なんて アニメの中では
か見たことないよ！

しかも、女人の人？つてくらい華奢^{きやしゃ}で綺麗^{きれい}だし。

思わずエルフですか？つて聞くところだった。耳は尖^{とが}つてない

し人間みたいだけ……

言葉が少ないところが また 人間離れしているんだけどなあ～

などと、物思いに耽^{ふけ}つていると

「待たせたね。 老師の具合はどうへ 少しは 良くなつた？」
防護用の眼鏡を掛けたままで先生が出てきた。

今日も、不機嫌そうですね。 そして、髪の毛 ぼさぼさになつてますよ～

しかも、前髪が右田ふさいじゅうだいじやつてるじやないですか！ 見えてないでしょ？

綺麗な顔が台無しですよ。

なんて

余計な事を言つたら つまみ出されそいつなので 言えなつけど……

今日は伝言を頼まれたから、忘れないついに言つておこう。

「はいー。 良いくなつたので、止めていいかと聞いてこいです。

」

伝わつたか？

聞き取りは随分出来るようになつたんだけど、話すのが上手く出来ないんだよね。

「ああ。 ダメ、つて言つといて。 歳なんだから体力落ちてて当たり前だし、休めつて言つても國の事で忙しいんだから 休まないだろうし、薬飲んで働けってね。

解る？

お爺ちゃん、クスリ、飲む。」

先生は氷河の水溜りみたいな瞳で、じつとあたしの顔を見つめながら、ゆっくりと区切りながら発音してくれた。

「無愛想で、そっけないけど仕事はきちんとする人なんだろ? な。異世界の小娘にもわかるように、毎回簡単な単語を使ってくれる。

「はいー。お爺ちゃん、クスリ、飲んで働く。ですね」

「ちゃんと言えてるよね?」

「発音は苦手だ。」

「あれれ?

眉間に皺寄せて……メモ書いて袋に貼つてる。信用ないなあ。

「ん?

それにもう一つ袋がある?
薬、増えるのかな?

「これは、ユキハのクスリだ。夕食後に3粒飲むよ!」
タ

「飯、後、3粒。解る?」

袋を渡された。

「何の、クスリですか?」

「あたし、どこも悪くないんですけど?」

「成長促進剤だ。背、伸びる、クスリ」

「……」
「上機嫌つぱく言われた。」

(ちよつと待つて。背が伸びる薬って、今 言ったよね?)

「そんなクスリ、あるのですかー！」

(すゞーーー！ わすが異世界ー！ くれるの？ ちょっとー！ あたしラッキーじゃない？)

「まあね。 ユキハが初めてライアに連れられて来た時、『15歳だから、背はもう伸びないかも。 背が伸びる薬があつたらいな』って言つてたろ？」

(わあ。 それで調合してくれたの？ この人、いい人だー)

「せんせー！ ありがとうございます！」

(ラッキー！ 嬉しいー)

「あ。 でも、お金ないです」

(こんな高価そうな薬、払えないよ？)

召喚の時、治療してくれたって聞いたから、分かつてくれると
は思うんだけど？

「金のことなら、心配しなくていい。 好きな事の為に使つ金は

惜しまない主義だから」

頭をわしわしされた。

「あああ……ありがとうござりますー」

(うわわわ やめて下さい！ 薬はとても ありがたいんですけど
頭がぐしゃぐしゃになつたじゃないですか)

学校の屋上でザクザクに切られた髪が可哀想だ、女の子は可憐く
なさいと、ライアさんは花の飾りの付いたピンを沢山くれた。

そのピンで前髪とか留めてたのにー！ 時間掛かったのに！

しかも、後半が早口で 何言つてるのか聞き取れなかつたし……

結局、散々頭を引っ搔き回されて、髪の毛がグシャグシャになつてから 手を離してもらえた。

むつとした顔を上げると、先生の男女な美人顔が 間近にあつた。

「薬の事、他の人には ナイショだからね。 お爺ちゃんにも言つちゃダメだよ」

先生、ちょっと 顔が近いです。

眉毛も、まつげも水色ですね。 お人形さんみたい。

それはそうと、秘密にしろとは あやしいなあ。

「どして ないしょ ですか？」

隠す意味が どこにある?

「これでも私は療法師としては人気でね。 診察も調薬も予約で一杯なんだよ。だから、勝手に薬を作つたらダメなんだよ」
ちよつと困つたような顔で 先生が説明してくれる。

なるほど。

割り込みがバレたら、まずいんですね?

「わかりました。 いいません

恩を仇では 返せません。

「いい子だ」

先生が 薄く微笑む。

デスクの電話みたいなのが、受付の人の声がして、何やら話が始まった。

本当に忙しい人みたいだ。

邪魔をしては申し訳ないので

「せんせー。 ありがとうございましたあ」

と小声で言つと、先生が軽く手を上げたので

薬の袋 2つを持って そつと部屋を後にした。

* * * * *

雪羽がそろりと部屋を出て行った後、サリエス・ファラーは待たせていた仕事を手早く片付け、お気に入りの椅子に深く腰掛けて先ほどの雪羽とのやり取りを思い出していた。

「ふふふ…… 背を伸ばす薬なんて、この世界にも有る訳ないだろ? う?

薬で伸ばすなんて、今まで考えた事もなかつたからな。
実に、新鮮だ。 面白い。

取り合えず 3粒にしてみたけど、さて どれだけの効果が現れるか……

結果が楽しみだな」

そう呟くと、ニヤリと笑みを浮かべた。

ひびき

2話 寄り道 ↴ side 雪羽

いつもなら療法院から、すぐに お爺ちゃんの部屋のある居住棟へ行くんだけど、サリエス先生から『背伸び薬』を内緒でもらったので、一度 自分の部屋に寄つて 置いて来ようと、女官の居住棟へ向かつて歩いている。

こここの世界の人なら、多少の差はあつても魔力を持つてるので、術場からエレベーターみたいにピューンと移動できるといふを、あたしは ひたすら徒步で……
万歩計で計つたら、きっと何万歩も 每日歩いているんじゃないかな？

同室の女官見習いのミツコも見つからぬによつて、そつと机の中に薬を隠し お爺ちゃんの部屋に急ぐ。

ゼイゼイゼイ
あ もお息切れた……
喉もカラカラだよ。

もうちょっととで お爺ちゃんの部屋つて所でノロノロと歩いていくと

「ユキハちゃん。 具合悪そうだけど、どうかしました？」
のんびりとした声が掛けられた。

声の方を見ると、ドンちゃん（ヒドン・ケアリー）が立っていた。

「ドンちゃん… ちょっと いそいだ からです。 心配しないです。 ドンちゃんは 仕事ですか？」

距離を歩いて、熱くなつた顔を 手の平で扇ぎながら、息を整える。

「今から、老師の所へ 書類を届けに行くんですが…… ちょっと、いいですか？」

そう言つてドンちゃんは あたしの手を掴むと、ぐいぐい引つ張つて行き 喫茶室みたいな場所へ連れて入つた。

そして

「お姉さん。 いつものと、マルカのジュース、シロップ大盛りでお願いします」

慣れた感じで注文する。

あたしを窓際の席に座らせると、ドンちゃんも向かいに座つた。

「あの…… ドンちゃん？」

向かいの席で二口二口と笑いながら、額から吹き出る汗を拭く男、ドン・ケアリーは 魔道府の一般職員で事務的な仕事をしているらしい。

ほぼ毎日、お爺ちゃんへ書類などを届けにやつて来る、メッセンジャーみたいな人だ。

あたしが感じた ドンちゃんの印象は、ズバリ『クマのぬいぐるみ』だ。

丸くて 大きな体。 つす茶色の髪に つぶらな茶色の目。 のんびりとした じやべり方と 愛嬌たっぷりの表情。

おいしいものが大好きで、ケーキとか持つてきてくれては 自分もしつかり食べて帰る 面白い人である。

で、そのドンちゃんにお店に引っ張り込まれて、びっくりしてい

る。

「おーー コキハちゃん。 来た来た。 コレ飲んで、元気出して下さーよ。 女の子は疲れた顔してちゃ ダメなんですからね」と、ウエイトレスのお姉さんが持ってきた、赤いジュースにシロップをどばーっと入れて、あたしに差し出した。

(うわあ。 ちーぐれやつ……)

ドンちゃんは、ストローでかき回せつてゼスチャーをしてくる。透明なシロップが下に溜まって2層になつたジュースを、ストローでかき混せて、恐る恐る口をつける。

「…………おーしーー！」

酸味と甘みが丁度いいバランスで、爽やかな果物の風味が口に広がる。

予想以上に美味しくて、思わず疲れも吹き飛んで 笑顔になる。

「疲労回復には ムルカが一番なんですよ。 あ。 ワタシのも來ましたよ。 お姉さんありがとうございます」

ドンちゃんは、ウエイトレスのお姉さんから ソレを一寧に受け取ると、スプーンですくつてパクリと食べ始めた。

「ドンちゃん…… まだ、朝 ですよ？」

ソレは パフェでした。 呼び方は違うけど、どん見てもパフェ。しかも大盛り。

田の前で、大盛りパフェを高速で平らげていいくドンちゃんを、あたしは 信じられない気持ちで見つめる。

「ちょっとした、栄養補給です」

見る間にパフュが消えていくので あたしも「わったいなーなあ」と思ひながらもジュークスを一気飲みする。

ドンちゃんはあつという間にパフュをたいらげる、口元を軽く拭いて 何事も無かつたかのよつに「ああ、仕事ですよ」とあつけにとられる あたしを置いて会計を済ませてしまった。

慌てて 「じちそりさまでした」と御礼をいづと「じついたしまして。 おた付き合つて下せこね」と朗らかに笑つた。

そのまま2人で お爺ちゃんの部屋に着くとシードが来ていた。朝に来るなんて、珍しい。

お爺ちゃんに何か用事でも あつたんだろうか?

険しい顔をして、じつちを見ている。

「お爺ちゃん。 ただいま。 遅くなつまして「じめんなやー」。

シード、おはよー」

シードにも声を掛けたけど、機嫌が悪そうだ。 これまた、珍しい。

刺激しない様に、スーっとキッチンへ抜けようとすると

「ユキハ。 隨分、時間が掛かつたね? 今、探しに行こうとしていたんだよ」

進路に立たれて、シードに言われた。

はあ~ まあ~。 やっぱ、直接来れば良かつたかな……

「あ 「じめんなやー」……」

背伸び薬の事を隠して、じつひ説明したら誤魔化せるかと、頭をフ

ル回転させていると

「ワタシのせいで、ユキハさんに時間を取らせてしましました。

ドンちゃんが あたしを かばうように頭を下げる。

シードは、そこに誰かがいる事を認識していなかつたように、

「書」

。母はひきせきやがめな妻。

(シード、怒つてゐる？ 顔が、怖いよー！)

「魔道府事務局三課のドン・ケアリーと申します。」

監修でエントリーナンカ答へる

サルビア・エリ

汗噴いてるよ！玉になってるよ！

ノーブラの副乳用ゴム

(ひ二
...
) 駄が、 ポニョコやぬよ。 ...)

その緊張した空氣を解いてくれたのは、お爺ちゃんのおねい姉
だった。

「ヨキハゼドンヒー緒じやつたか。」
「一つものゾブの道草に付きましたよ。」

ほほほ、と笑しながら お爺ちゃんが曰いた。

「道草？ 仕事中に？」

シーデの眉がつり上がる。

仕事に関して、シーデは ちやんとしてるっぽい からなあ……
バリバリ仕事をこなします、できる男ですって感じだもんな。
ドンちゃんの、のんびり・お気楽スタンスは 理解も共感も出来
ないだらうなあ～

でも、お爺ちゃんはドンちゃんを『仮』に入っているみたいで

「栄養補給じやの」

茶田つ 気たつふつて かづかづつ

「書類を貰おうか。 託けるのも 有るだじや」

ヒードンちゃんを机のある奥の部屋まで すこしうと連れて行って
しまった。

そして、奥の部屋から声だけで

「シーウォルド。お前も 気を付けて行きなやー」
見送るやうな事を言つた。

3話 謎の抱擁 ~side翼~

「シード。どこか、いくの？」

ドンちゃんに まだ、何か言いたそつだつたシードに聞く。

シードが微妙な表情のまま

「仕事で国外に出るんだ。 半月位は来れないから ユキハの顔を見ておこうと思つて来たんだけど……」

シードの顔が曇る。

半月…… ずいぶん長い出張？

準備とか 忙しいだろうに、遅くなつて 悪いことした。

「いっ、出かけますか？」

出発は、いつなんだろう？

戦争が始まりそだからつて あたしが召喚されたのに……
ここ以外の場所で しかも外国なんて、想像出来ないけど 危なくないのかな？

「今日。 急に決まって 今から出る。 もう、行かなくちゃ……」

溜息がこぼれそうに、シードが呟つ。

(突然、長期出張とかが入っちゃう仕事なんだ。 執務室つてすごい大変なところだなあ)

「シードに会えない、さびしいでーす」

半月も会えないの 初めてだね……
仕事だから、仕方無いんだけどね…… 心細いな

シードは忙しい。

みんなの話から、それは分かった。
でも、3日と置かずに訪ね来ては いろいろ話したりしていく。
あたしの事を気にかけてくれているって分かつて すくなく、嬉しく。

召喚者の責任つてやつ?

実家に来るよう言つてくれたり（弟さんの結婚で無理になつたけど）、ここで暮らしやすいように心を配つてくれたりと シードは责任感の強い人なんだな。きっと。

だから、おつかいの帰りが遅くなつたのも 心配してくれて……
仕事で海外に行く人に、心配かけて ダメだなー あたし。

凹んだ あたしの頭に手を置いて
「寂しく思つてくれるの? ユキハ」
シードが少しかがんで あたしの顔をのぞいた。

う。

シード。

顔が近い。

ドキドキするから、少し離れて。

自分が かつこいいつて自覚ない?

「うん。」

（寂しいです）

首をすくめて 「クククと うなづく。

うすいオリーブグリーンの瞳が、フツと和らぐ。

そんな、優しい目で見られるの 慣れてなくて、困る。

でも、さつきのサリエス先生も、話すときの距離が、やたら近いかつたけど、ドキドキしなかったのはなんでだ？
綺麗過ぎて、作り物っぽいから？

シードに見つめられると、逃げ出したくなるのは、なぜだ？

頭を撫でていたシードが、ふと

「ユキハ、今日は髪の毛を留めてないんだね？」

不思議そうに聞く。

「留めてたんですが、もう、聞いてください。」

サリエスせんせーに、むちゃくちゃされて、ピンとれましたー

ホント、迷惑な人ですよねって……何？

どうして、固まってる？

「サリエスが？」

シードが、信じられないような目で見てるけど、何？

「ひつ、ぐしゃぐしゃに触られました。変な人でーす」

(変わった人ですよね。いい人だけど)

くらつて笑うと、むつとした顔になつて

ぐしゃぐしゃぐしゃぐしゃ……

「ふわわわわわわっ！」

思いっきり、頭をかき回された。

先生は、表面を撫でただけなのに、今度は、髪の毛の中までシードの長い指を突っ込まれて

「んぐうう……」

シャンプーするみたいに、くまなく わしわしされて
(ぞわぞわ する~ ヤメてええ)

こそばいやら、寒氣がするやらで 眼淚が出てくる。
鳥肌が立つて、頭がクラつときた。

髪の毛が、これでもかつていつほど ぐしゃぐしゃになつた頃。
ぞわそわするあまり、真つ赤にのぼせて思考が停止した。あたし
の姿に気が済んだのか
シードは、よつやく手を放して 毛羽立つた あたしの髪を手櫛
で整えた。

そして

「 もう、誰にも触らせいや ダメだよ?」
と、満足そうに にんまり笑つて言つた。

(好きで触らせた訳じやなによつ...)
ギリッと睨みつける。

身長が違はずぎて、上皿遣いになつちやうのが悔しい!

そんな あたしをみたシードは、急にヒーャンと溶けた様な顔になつて
頭を両手で挟まれたと思ったら、おでこを あたしの頭にくつつけた。

「 ユキハ、解つた?」
やけに熱っぽい声が 降つてきた。

.....。

えーと.....

えーと えーと

この状況を、どう受け止めたらいいのでしょうか?

なんだか.....

なんだか.....

これは
ものです”ぐ、恥ずかしい気がするんですけど.....

もうそろそろ、放してくれたら 嬉しいんだけどな

両手でシードの胸の辺りを、ぐいーっと押してみた。

うつ。

動かない。

さらに力いっぱい押してみる。

うわ ん。

やつぱり、動く気配もない

あつ！

動かない上に、頭両腕の中に抱きこまれた

がつちり、ホールドされちゃつたあ
ダメじゃん。あたし。

じたばたと もがいてみると、ビクともせず……

「ユキハ。返事は？」

頭上から聞こえる低めの声と、シードがつけている香水の甘く
スペイシーな大人の香りに
クラクラする
理由も分からず 熱くなる。

「ううう。わかったー」

「わかつたから、はなしてー」

シードの吐く息もわかつてしまつ距離に
慣れない あたしはもう泣きそうだ。

「いい子で、お留守番してて」「

シードはうつむつと、頭にチョットキスを一つ落として 放して
くれた。

「行つてきまーす」

優しく告げるシードに

もう、びっくりして ふくらみ反応も出来なくなつた あたしは

「こつてらひしゃこ」

と、びつにか言つて送り出せたが、さうと耳まで真つ赤だつたはず。

シードの後姿を見送りながら、びつじてこんな事になってしまったのか考える。

サリエス先生の話になつてからが、おかしかつた……

シードはサリエス先生が嫌いとか？

あたしの言葉が悪くて、何かを勘違いしてるとか？

うん。

考えても、わかんない。

といあえずは、シードの前でサリエス先生の話は無しにして……
後は、言葉を留得する！

シードが帰つて来るまでに、もつと上手に話せるようになつてー。

きっと、言葉が足りないから、過剰でハードなスキンシップになつちやうんだ！

そうだ！

そうこういつて、元気にしておいでー。

よし。

頑張つて、勉強しよ。

4話 たぐりむ者たち（前書き）

とある場末の酒場での 一幕

4話 たぐらむ者たち

色街近くの酒場に似つかわしくない男が一人、その店の個室に席を取つた。

目立たぬように粗末な形^{なり}をしているが、身に纏う^{まと}雰囲氣は上流階級のそれで、貴族である事は容易に見てとれた。

しかし、当の本人はその事に気付かない様である。

男は、目の前に置かれた二つの杯の片方に 出された酒を注ぐと、何の気なしに口をつけた。

しかし、次の瞬間には 眉をしかめ、二度とその酒を口にすることはなかつた。

普段待たされる事等ないであろう その男の忍耐が限界に達すると思われる頃。

「おまたせしやした」

卑屈な笑みを浮かべながら、堅気とは縁遠い風貌の小男が 男の待つ部屋にスルリと音も無く滑り込んだ。

何の気配もさせずに部屋に現れた小男に 優^{わざ}かにひるみながら男は

「例の物は、持つてきたか?」「
と、高圧的な物言いを保つた。

「旦那はせつかちでいけやせんねえ。 もちろん、持つてまいいや
したが……」

まずは一杯などと言いながら、小男は空の杯に酒を満たし一気に呴^{あお}つた。

そして、大して減つていない瓶の酒と 男の杯を見て

「おぼつかないやつの口に、場末の安酒は合ひやせんでしたか…… ケケ」

下卑た笑い声を上げる。

「五月蠅い。早く出せ」

男は苛立ちを露にして、声を荒げた。

「へいへい。ホント、せつかちで いやせんねー」

小男は、白髪の混じり始めた無精髭が生えた口元を、手の甲でグイッと拭うと、隠し持っていた皮の汚い袋から 艶のある丸く平らな石を数個取り出した。

「丁寧に扱え！」

無造作にテーブルに転がされた石を見て、男の顔色が変わる。

「へいへい。すいやせん」

反省の意が全く感じられない謝罪を 小男が囁く。

男は、「全く、これだから低能な輩は……」などと口の中で悪態を吐きながら、小男が出した石を明かりにかざしたり、表面を撫でたりして確かめた。

真剣な面持ちで、全ての石を確認し終わると

「これで、全部か？」
と、小男に問うた。

鼻をほじりながら 暇そくに酒を飲んでいた小男は

「へい。それで全てでやす」
手を服で拭きながら答えた。

「本当だろうな？」

もし隠し持つていたなら、今、此処で、すぐに出せ。

お前には分からぬだろ？が、これは危険な物なのだ。

知識も無い、魔力も「え？」お前らが扱える代物では無いのだぞ

男は、言葉を区切りながら齧すように小男に言った。

「隠すなんて、めつそうも『いやこやせん。』盗掘をお皿にまし下
すつた、旦那を騙すなんて、考えたことも『いやこやせんで……』
哀れな声を出して テーブルに額を擦り付けるように、小男がひ
れ伏す。

その態度に気を良くしたのか

「ならば良いが、へたな氣を起しきやぬ事だ。お前達の遭遇など、
どうにでも出来るのだからな。無事に暮らしたければ、おとなし
く俺に従えば良い。悪いようにはしない」

男はそのまま口づき、隠しから皮袋を取り出し小男に投げた。

小男は中身を確認すると、口元を密かに綻ばせたが やおり情け
ない声で

「旦那あ。 お情けで『いやこやす。』もうひとつ、色々な
ねえと、あつしら おまんまの食こ上げでやす」

男に懇願した。

「足りぬと申すか。 強欲な……」

男は眉をひそめながらも、あと数枚銀貨を取り出し テーブルに
置いた。

小男は銀貨を素早く袋に入れると、

「ありがと『いやこやす、旦那。』また ようしくお願いいいたしや
す。 それじゃ あつしは、これで失礼いたしやす」
もつ用はないとばかりに 早々に部屋を後にする。

しかし 部屋を出る直前、チラリと振り向いた小男の目には 愉悦に歪む男の顔が焼きついだ。

そして、じらえ切れずに漏らした男の一言を 小男の耳は拾っていた。

「ククク…… 見ていろ。あの女、ズタズタにしてやる。魔物の牙に引き裂かれ、瘴気に犯されて、美しい顔も体も 腐り落ちるがいい……」

「あんちゃん。あんちゃん。遅かったから オオオ…オレ、心配した」

一階の個室へ通じる階段を降りてきた小男に、頭の弱そうな大男が駆け寄つた。

「ああ、すまねえな。ちいと、手間かけやがつてよお」

小男は そう言つと、ガチャガチャ、ワイワイと酔っ払いの立てる音がうるさい一階のホールへと足を向けた。

そして、目立たない席を選ぶと 酒と料理を注文し、不安げな大男を安心させるように 今の一幕を かいづまんで話してやつた。そして、酒も回ってきた頃

「俺たちや、黒蟻兄弟だ。

黒蟻の通つた後にや何にも残らねえ。

俺たちが掘つた後にも、何にも残る訳もねえ。」「

いつものセリフを上機嫌で言つた後、小男は急に声をひそめて

「弟よ、実をいうと 奴に渡した石は全部じゃねえんだ。 とつと
きのが まだ一つ残つててよお。 そいあ金の卵だ。 大金に化け
る。 俺たちにも運が廻つて来たぜ」

ニヤニヤと笑いながら小男が言つた。

「すげえな！ あんちゃん。 オオオ… オレ、金いっぱい うれし
い。 うまいもん腹いつぺえ 食いてえ」

大男は顔を パツと輝かせた。

「おおさ。 いつぺえ食いな。

どつかの御大尽おたじいじんにでも売りつけりや、 死ぬまで金にやあ困らねえ。
それに、さつきの ぽんぽんからも、金はがっぽりせしめたから
な、暫くはコレで楽しめそうだ」

小男はニヤリと、男からせしめた金の袋を 大男にひらつかせた。

「あんちゃん！ オレ、女も 欲しい！ 酒も 飲む！」
大男が興奮して、叫ぶ。

「ああ。 懐ふところは温ぬるけえんだ。 好きに、やんな」
小男は 狡賢きわいそうな目を弛ゆるませて、はしゃぐ大男を見ている。

騒がしく、雑多で活氣の溢れる歓楽街の喧騒けんそうは、今日も明け方ま
で続くのだった。

4話 たぐらむ者たち（後書き）

男は、女に相当恨みがあるようになります。

今日はお爺ちゃんも外出していて、1日いないのでお休みになつた。

好きな事をして過ぐしていくって言われたけど、特に出来る事もない。

お買い物に行く お金も持っていないし、街に出たことが無いから勝手が分からない。

あんまり外に行っちゃいけないみたいだし……
 庁内をぶらぶらしていると、どうやら神殿の近くまで来てしまつたみたいだ。

向こうから歩いてくるのは……

ロニーさんと二ーナさんだ。

二ーナさんは、あたしの代わりに召喚された依巫よひましで ロシア人だ。
すごくキレイなお姉さん！

28歳って言ってたけど、そんな年には見えないっていつか……
夢見る乙女風な、ほんわか 天然な人だ。

肌が抜けるように白いのは、この世界に来るまで、ずっと病院のベッドの上の暮らしだったから。二ーナさんは、子供の頃から心臓に障害があつて 移植待ちをしている状態だつたそつだ。
でも提供者は見つからず…… 体は限界に来ていって、あと数ヶ月の命と診断された。

それが ロニーさんに召喚されて、サリエス先生が魔法治療で治して、
今では歩いたり 普通に生活出来るらしい。

(やっぱり サリエス先生って、スゴイ人だつたんだ!)

召喚者のローナさんは、二ーナさんに一目惚れして 猛アタックの末、現在一人はラブラブ同棲中だ。

「二ーナさん、ローナさん。」んにちは
手をつないで歩いてくる一人に 声をかける。

「あら。 ユキハちゃん、んにちは」

「ユキハちゃん? こんな所でどうしたの?」

二人そろって、まぶしい笑顔。

幸せがあふれていますね。

でも、背の高い一人が田の前に並ぶと、壁のようです……

「天気がいいので、お散歩です。 お一人は? 神殿に御用ですか?
?」

「ええ。 神殿で依巫の試験だったの。 本当に私に神を降ろせる
か、ちょっと試されたのよ。

それで、ホラ。 これが 依巫の衣装なんだって。」

クルリと回つて衣装を見せてくれる。

三条さんに見せてもらった 巫女装束と全く同じトザインで、色
だけが真っ白だ。

白装束……

二ーナさんはウェディングドレスみたいだつて言つけど、白すべ
めの装いからは 他の事が連想されて笑えなかつた。

「……依巫に、試験なんて あるんですね
話をそらす。」

「本当に降ろす訳ではないけどね

明るく話す二一ナさんとは違い、少し複雑な表情でロニーさんが言った。

ロニーさんは、私に依巫の事を話したくなさそうだ。

あまり詳しく聞いてもいけないのでどうか？
望んで失格に扱つてもうつていてるから 強くは言えないけど、気にはなるんだよね～

試験内容つて……どうこうのが合格なの？
聞きたいけど、聞けない。

すると、話題を変えるように、ロニーさんが
「それより、ユキハちゃん。言葉、すしく上手くなつたね～ 二
ヶ月経つてないのに上達、早すぎやんよ～」

そう言って、明るく笑つ。

目は心なしか 笑つてないよう見えるけど……

仕方ない、あたしも これ以上田の前でイチャつかれても反応に困るので、口の辺で失礼させてもうおつ。

「お爺ちゃんのおかげです！ もつとかちゃんと話せぬよひに、猛勉強中です！」

あたしも 勉強方法については、詳しく追求されたくないのでは、わたしはこれで！ サようなら～」
二人に手を振つて、そそくあと別れた。

二一ナさんと一人なら、もっと一緒にいたかつたなあ。

* * * * *

神殿には すぐ近くまで森が迫つていて、あたしは その森を散策することにした。

木々の新芽が キレイ。

ぽかぽかした 春の日射しが気持ちいい。

気持ち良過ぎて、ぼーっとなる。

サリエス先生の薬を飲み始めてから ぐっすり眠れていな夜の間 骨が軋むように痛むせいだ。

成長痛？

骨が伸びる時、痛くなるんだよね？

計つたら 伸びてるかな？

少しくらい 痛くても我慢しなくちゃ……

そう思つて 飲み続けるけど、さすがに睡眠不足になつたかな
？

ああ だるい……

少し 座ろう……

あの 大木の根元が 気持ちよさそう

大木の根元は、少し開けていて、教室程の広さの広場のようになつていて、やわらかい午後の日差しが降り注いでいる。芝生のよううに蜜に生える下草の淡い緑が、日の光に照らされて輝いていた。

「失礼します……」

木にことわりを入れて腰を下ろす。

なぜつて？

だつて、御神木っぽい大木なんだもん。

トト〇とかが 住んでそなんだもん。

座つて、木にもたれて ボーっと上を見る。
木漏れ日と、小鳥の鳴き声が心地いい。

「平和だ~」

自分の世界の事が、嘘みたい。
なんて、やすらか。

しばらく、呆けていたけど居心地がいいので こじで少し勉強するにした。

スカートのポケットから小さな辞書を取り出して、お爺ちゃんから借りている魔法具のルーペみたいなのを片手にあてる。
すると、見たものが頭の中に記憶されるという 反則な道具だ。
古代の遺物だそうで、どういう仕組みになっているのかは不明、
お爺ちゃんも解説しようとしたけど 技術が失われているので再現
は無理だと諦めた、超貴重品だ。

もつと早く習得したいと言つた あたしに、お爺ちゃんが貸してくれた。

ただ、長時間使うと脳に負担がかかるので 1時間使つたら、1時間休む といつ約束をした。

気が付くと

2時間くらい辞書を眺めてた。

ふあああ～
疲れた。

じゅんと、横になる。

伸びをすると、すぐ気持ちいい。
自然とまぶたが重くなる。

温かい日差しに、気持ちよく、ウトウトしてたのに、
鼻がツーンとしてきて、金属臭いニオイが……

ああ……鼻血だ。

魔法のルーペ、使い過ぎたか。

何度も使いすぎで、そのたび鼻血を出してるから、今更びっくり
しないけど……
さすがに寝ながら鼻血をたれ流すのはマヌケなので、ハンカチ
を探してポケットをさぐる。

無い。

何も、入つて無い。

しまった。

何で拭こう?

ぼやけた頭で考えながら、無理やり起き上ると
いつからいたのか、仔犬? が一匹、ほんのすぐ近くに座つていて
あたしの方をじっと見ている。

犬?

形は、確實に仔犬。柴犬の子供っぽい。

でも、色が……赤と、青だ。

赤い仔犬は、白地に、耳・口の周り・足・尻尾・背筋が赤い。

青い仔犬は、それの青い版だ。

こっちの犬を初めて見た。

色が違うんだね

などと、鼻血垂れ流しで感動していると、仔犬があたしの前まで歩いてきて、いきなり飛びついてきた。
うわ～可愛いーー！と悶絶するあたしに 一匂はよじ登る勢いで顔面掛けてダイブしてきた。

そして

ペロペロと、あたしの鼻を 舐め始めた。

ペロペロ ペロペロ ペロペロ

鼻が くすぐったい

ペロペロ ペロペロ ペロペロ
うーん

くすぐったいな

ペロペロ ペロペロ ペロペロ

もう……

いいかげんに、しつこい

顔が、べとべとになつたよ！

一匂を、自分から引き剥がして地面に置く。

一瞬、私の鼻血を徹底的に舐め摑むこの子達が、肉食であたしを食べようとしてるかもって思つたけど、小さな尻尾を 一回振つて いるのを見たら、そんな考えは吹き飛んでしまつた。

「かわいい」

犬、大好き！

毛色が多少違っていても、可愛いものは可愛い！
あたしの 手とかにじやれつく仕草も、かわいすぎー。

一匹は ちょこんと並んで座っている。

赤が左で青が右。

その様は、なんだか…… そつ…… なんだか……

お湯と水？

水道のカラソだよ～

あははは！

突然笑い出した あたしを一匹は不思議そうに見ている。
手を差し出すと匂いを嗅いでペロリと舐めた。

尻尾をぱたぱたと振つて、頭を撫でてやると手にまとわり付いて
じやれてきた。

「名前つけていい？」

通じるとは思つてないけど、聞いてみる。
以外にも クウーンと鳴いて、尻尾を振る。

「言葉、通じてるの？」

じゃあOKつてことで。 何がいいかな？

赤と青…… まんまか。

お湯と水、ホットとクール…… ファイアとアクア…… 良いじゃ
ない！

までまで…… 周りが洋風の名前ばかりだし、あたしが付ける

んだから和風のがいい！

う~ん……

温オンとレイ冷レイ。

安直アキラカ？

気にするな！

よし！ 決スルまつた。

君達の名前は 温オンとレイ冷レイ

「気に入った？」

と 聞くと

「アン！」

と答えてくれた。

尻尾振つてるし 気に入つてくれたところ。

夕刻を告げる神殿の鐘が鳴り出すと、オンとレイは落ち着かなくなつた。

日も傾いてきたし、お家に帰る時間なのかな？
あたしも、そろそろ帰らないと……

「オン、レイ。 お家に帰る時間だよ。 楽しかつたし、また遊んでね」

そう言つと、分かつたばかりに あたしの周りをぐるぐる駆けてそのまま森の奥に走つていってしまった。

「また、会いたいなあ

名残おしかつたけど、むりやり連れて帰る訳にもいかないし、また会える事を祈る。

そして あたしも ミコが心配するといけないので、部屋に戻つた。

6話 魔獣1 S side 花音（前書き）

花音がぐるぐる悩んでいます。

アルが第2師団の訓練で 宮を3日空けた最後の夜は、灰色の厚い雲が 月だけでなく音まで覆い隠してしまったような 静かで重い夜だった。

私は蒼玉宮の居室でソファに座り いつもと変わらず侍女のエマのように 湯上りの髪を乾かしてもらっていた。

念入りに髪の手入れしながら、エマがふと口を開いた

「お淋しゅうじますね」

え？ 何の事？

私が怪訝な顔で振り向くと

「明日の夕刻には、お戻りになられると 侍従長が言つておりました」

につっこりと微笑まれる。

ああ。 アルのことか。

「別に…… 待つてないし……」

反論してみるが、効果の無い事は実証済みである。

アルが常に、『カノンは照れ屋さんだね』とか『素直じゃないな』とかいうものだから、侍従も侍女も皆して私の事を 誤解してしまった。

私がアルに関して どんなに文句を言つても、愛情の裏返し的に捉えられてしまって 今のエマの様な暖かい眼差しで 見守られてしまうのだ……

私は小さく溜息を一つ吐くと、明日にアルが帰るなら　今夜くらいは　皆、ゆっくりするようにと　エマに言伝て、下がらせた。アルが居ると来客も多いし、何かと用事が増える。人手が足りない訳ではないのだが、余つてもいい。彼らにも　羽を伸ばす日があつていいだろ？。

私はソファから立ち上がると　うん、と伸びをして室内を見渡した。

壁に取り付けられている光源不明の照明からは黄味がかつた光が放たれ、広い部屋をやわらかく照らしている。陰影の濃い部屋は物音一つせず、自分以外　誰も居ない事を静かに教えてくれる。

（この部屋、こんなに広かつたっけ……）

金髪頭の派手な男一人が居ない所為で　こんなにも部屋が味気なくなるものだろうかと、王子様の存在感に少し感動しながら

（そういえば、こっちに来て2ヶ月近く経つけど　アルと離れるの初めてだ）

3日間アルと離れたことで　隣にアルがいることに慣れてしまった　自分で気が付いた。

一人で居る事なんて平氣なはずなのに……
子供の頃から両親は不在がちだつたし、お手伝いさん以外に家族がいることなんて　滅多になかったから、人の気配がしない方が普通だつた。

それなのに、決して暗くはないはずの部屋が　仄暗く見えて、背筋がゾクリとした。

その感覚を誤魔化すように 私は寝室に向かいドアをぴつたりと閉めると、ベッドに腰を下ろして一冊の本を手に取った。

その本は、さまざま花木が纖細な筆遣いで手描きされている文字を覚えたての子供向けの物だつた。さすが王宮の図書館所蔵の物だけあって 絵本というより画集と言う方が相応しい。ベッドの読書灯を点けると「口口」とうつ伏せに寝そべり、その本を開けた。

文字が読めないのは、思つていたより かなり不便だ。

ちょっとしたメモの意味も解らないし、意思の疎通が会話のみになると 手間が掛かる。

それに、この世界は娛樂が少ないから、夜が果てしなく長く感じる。

本でも読まないと、時間を持て余す。
なにより、自分がバカになつたみたいで、耐えられそうにない。

元の世界に帰つてから何の役にも立たない言葉を覚える事に躊躇していた私を踏み切らせたのは、永山さんだつた。

いっちに来てから3週間程経つて ゆりやん永山さんと会つて が出来た。

その時、彼女と話してお互いの状況を確認したんだけど、永山さんは 家に帰れない事情があるからと、この世界に3年留まる事に決めたそうだ。

そして指輪無しでも不自由しないつに、すでに公用語を勉強していた。

私は彼女の事を誤解していた様だ。

あの子は、以外に強い。

永山さんは、自分の言いたい事を言えずにいじめられていた氣の弱い子では無く、状況に応じて生き抜く強かさを持っている子なの

ではないだろうか。

私はといえば、現状を受け入れているとは 言いがたい。元の世界に帰る事も、アルと共に生きていく事も決められずにアルのお陰で何不自由無く快適に過ごしている……こんな中途半端じや、ダメだよね。

ベッドの上で膝を抱えて、頭を膝頭にコシンと乗せる。

私、変だ。

今まで、家柄や財産目当ての男たちを信じられないなどと言つてきたのに、いざ 自分自身の価値で勝負することになつたら 自信がまるで無いなんて……

だつて、後宮の女人達つて とんでもなく美人でスタイルも抜群にいいんだもん。

そりや、日本の女子中学生の中では 少しは可愛いはずだと言えるけど、選りすぐりの西洋美人と日本人を比べる時点で間違つていると思つ。

根本的に造りが違うんだから。

それに 魔法のある世界で、言葉も違う常識も違う中で 自分の中身でどうやって勝負するんだろう?

性格?

考え方?

キャラ? (癒し系じゃないよね? 絶対)

ああ…… 自信ない、それ。

美人慣れしているアルの目に、自分がどんな風に映るのかなんて

想像出来ない。

毛色の変わった女が珍しいとか……

戦争が終わってからも影響力があるっていう、巫女として珍重しているだけかも。

いつのこと、私に愛想が尽きれば 二人の間に距離が出来、帰り易くなるのではと 冷たい態度や我儘を言ってみたりしたけど、全く変化が無かった。

むしろ二二二二、 献身的。

あれ？

王子って、M系？

甘い言葉をかけたり、スキンシップ過多の割には 押しが強くないしふS系ではないと思つけど。

頭の中がグシャグシャになってきた……

そもそも 私は、アルのことを どう思つているんだろう？
それが一番大事だろう？

……。

考えたくない。

ぼすん と横向けに倒れこんで枕に顔を埋める。

だつて、フェアじやない。

ここは異世界で、元の世界には 簡単に帰れなくて、
アルは王子様で、
紳士で、

かつこよくつて、
優しくて、
しかも私の事が好きとか言つて、
すごく大切にしてくれて……

これで、アルの事を好きにならない女の子なんて いないと思つ。
でも、それってどこか愀然としない気持ちが残るんだよね。

ある日、「カノンが運命の女だと思って愛してきたけど、もつと
好きな人が出来たから帰つて」なんてアルに言われたらどうする?
ほら、人魚姫の王子様は 別の娘と結婚しちやうよ?
それに後宮は側室OKだしね……

自分で考えていて、落ち込んできた。
アルがそんな人じやないだらうつて、私も思つている。

でも、

『好きになつちゃつた。 しかも、とつても』
なんて認めたら最後、帰れなくなるでしょ?
そう感じたから、今まで突き詰めて考えないようになしてきて
ど なんだかそれも限界にきているみたいだ。

アルに「カノン」つて呼ばれるだけで、心が温かくなる。
もつと呼んで欲しいと思つ。
アルの傍でなら、素直に笑えそうな気がする。

でも、自分から飛び込むのは 怖くて、怖くて、怖くて……
裏切られたらどうする?

今ままなら、いい思い出で終われるから、嫌われて 家に帰ろ

うつて囁く自分もいる。

「好きだから 愛されたい」と「怖いから 逃げ出したい」の狭間で
私の心は定まらずに 揺れ続けている。

今日もまた、気持ちを決められないまま眠りにつくのかと
そつと 目を閉じた時

カシャーン

隣の部屋で、物音がした。

耳を澄ます。

パリン

ガラスの割れる音がする。

(何? 誰かいるの?)

カシャン

カシャン

続いて2度ガラスの割れる音がした。

窓から何かが投げ込まれたようだ。

?

一体何だろうと、そつとドアを開ける。

部屋の中に 何かの影が浮かんでいる。

コラリ

影が動く。

思わず、ドアを閉める。

胸はドキドキと早鐘を打ち、冷や汗が背中を走る。
こめかみを流れる血流の音が煩い。

ヤバイ。

本能が危険を告げている。

一目見ただけだけど 隣の部屋に居る物は、自分の知る何にも当てはまらない『生き物』だった。

光まで吸い込んでしまったかのよつて それは黒いシリエットでしかなかつた。

でも足が4本、手が4本。

明らかに化け物的な奴だ。

手には鋭い鍵爪が付いていた。

息を殺して、そつとドアの鍵を閉める。

ドアには術式が組み込まれていて、簡単に破れない構造になつて

いると聞いていた。

そして、足音を立てないようにドアから離れ、ベッドの向こう側にうずくまつた。

歯の根が合わずに 力チカチなつてしまつ。

親指を噛んで音を消し、必死で呼吸を整える。

落ち着け！
落ち着け！

自分に言い聞かす。

このまま見つからなければ、あれは どこかに行くかもしない。
どうか、気付かずにどこかに行つて！

祈りも虚しく

ガリツ！ バリツ！
ドアを引っ搔く音がした。

次いで

グオオオオオオグワアアア

全身が総毛立つ様な 咆哮が上がり、今度は激しくドアがガタガタと揺れ始めた。

私は恐怖で震えながら、必死で自分に言い聞かせる

大丈夫。

今の中で、誰か来てくれる。

蒼玉宮には警備の衛兵もちゃんといる。

アルが不在の今、必ず駆けつけてくれるはず……

でも、お願ひ早く来て！

ドアは今にも破られそうで、ミシミシ音を立てている。
何かで押さえたいけど、もう そんな時間があるとは思えない。
というより、足がすくんで動けない。

永遠にも感じられる時間が過ぎ（実際には僅か数分の事だらうけれど）隣の部屋に多くの人間が入る音と悲鳴がした。

「カノン様！ ご無事ですかっ！」
「うわっ！ 何だこいつ等は？！」

グオオオオオオン

衛兵たちの声と、猛獸の威嚇めいた鳴声。

ドアに爪を立てるソレは 休み無く斬り付けているから、一匹ではない事が察せられる。

何匹いるのだろう？

絶望的な予測に、体の力が抜けていく。

私の命は、こんな得体の知れない生き物に奪われて終わるのか……？

床にへたり込んで、震える体をきつく抱きしめながら、私は恐怖の余り気が遠くなつた。

死ぬ前には走馬灯のように

過去の事が脳裏に浮かぶと聞いていたけど……

今 頭に浮かぶのは アルの

笑顔

困った顔

悲しそうな顔

驚いた顔。

アルの 笑顔

もう一度見たかった

冗談じゃない

まさに死にそうな目にあつて いるのに
どうして、アルの事ばかり 頭に浮かぶ？

もう一度アルに会いたい
アルフレッド、助けて！

アルは帰らないのは 知っているのに
アルに助けを求めるのを 止められない。

助けて！助けて！
助けて！助けて！

映画などの作り物とは全く違つ 産毛の一本一本に感じる振動や、
胃袋がひっくり返りそうになる位 不快なその生き物の気配。
鼓膜にビリビリと響く音達に 恐怖の臨界点を超えてしまったの
か、頭の血の気が引いて行くのを感じた。

もう、ダメかな？

ここで 死んじやうのかな？

衛兵が来たはずなのに 止まないドアの軋みに、諦めかけた時

「カノン！」

アルの叫び声が 聞こえた気がした。

7話 魔獣2（前書き）

単位の説明

1メテル = 1メートル

1セテル = 1センチメートル

アルフレッドが訓練場の天幕に敷かれた術場から蒼玉宮の術場へ転移してきた時、蒼玉宮は恐慌状態にあつた。

侍従や侍女が駆け回り、顔には恐怖の色が濃かつた。

術場に出現したアルフレッドの顔を見つけるやいなや 一人が「お部屋に魔獸が！ カノン様がまだ中に！」

悲痛な叫び声を上げた。

侍従の言葉が終わらない内に、アルフレッドは全力で走り出していた。

カノンが居る筈の居室の前は、衛兵達が抜き身の剣を構え、騒然としていた。

どうやら入れ替わりで 中の魔獸に攻撃を仕掛けている様だった。

「何があった。 カノンは何処だ？」

アルフレッドは叫んだ。

「突然、魔獸の咆哮が上がり 駆けつけましたところ部屋に3体侵入している模様です」

「カノンは？」

「おそらく寝室におられると思われます」

衛兵は搾り出すような苦しい声で アルフレッドに告げた。

アルフレッドは弾かれる様に扉に向かい、一瞬の逡巡もなしに中へ飛び込んだ。

「カノン！」

飛び込むと同時にアルフレッドは剣を抜き放つ。

彼の剣は 攻撃魔法の術式が込められ鍛え上げられた 魔剣と呼ばれる物で、中でも最強の部類に入るであろう逸品だ。

魔剣は込められた術式が強力であればあるほど、使う者の魔力を必要とし また扱いも難しい。

その魔剣を抜いたアルフレッドは、普段 蒼玉宮に暮らす時の温和な雰囲気とはまるで違う 魔道騎士団 第2師団大隊長の冷厳な顔をしていた。

その実力を買われ 癖の強い第2師団の隊長に抜擢されて以来、苦労しながらも まとめ上げてきたアルフレッドが発する怒気は、彼の前に立ち塞がるものなど 塵に帰される運命を確信させるものだった。

アルフレッドは「仄かに光を放つ魔剣を高く掲げると、扉の正面で威嚇する」一体に向かつて 軽く振り下ろした。

眩まばゆい光と共に 床と魔獣の足に深い傷が入る。

カノンの寝室のドアを破ろうとしていた一体が動きを止め。

「さあ！ お前らの相手は こっちだ！」

アルフレッドが剣を構えなおして 叫んだ。

グギャアアアア

鼓膜が破れそうな 不快な鳴声を上げながら、傷つけられた一体の内一体がアルフレッドに飛び掛けた。

三体の中では最も小さい その魔獣をよけながら、アルフレッドは 捆みかかる腕を斬りつけた。

フシャーアアアア

気体とも液体ともつかぬ体液が噴出し、辺りの空間を紫に染める。アルフレッドは素早く飛びのき、体液の霧から距離を取った。剣を持ったままの腕で口元を覆い、三体との間合いを計る。魔獣の体液のかかつた床や家具が黒く変色を始め、崩れだした。

「瘴気か……」

厄介な。

アルフレッドは頭を巡らす。

瘴気は毒である。瘴気にあてられると、物は朽ち、生き物は身を腐らせる。室内などで戦うのは最も不向きな相手だ。通常の対応である。封印系の魔法を発動さすには人手が足りない。瘴気を封じる魔法を掛けている間に、他の2体に襲われるからだ。しかも、カノンが奥に取り残されている。

大技で焼き尽くすか？

この際、宮殿など、どうなっても良い。カノンを無事救出する事だ第一義だ。

多少の被害は止むえない、と、発動にかかりたその時

「隊長！」

「ご無事ですか？」

聞きなれた声の持ち主らが、部屋に飛び込んできた。

軍服を身に纏つた2人を確認すると、アルフレッドは短く指示をだした。

「3体いる。手前の黒いヤツは瘴気を吐く。その横の緑色のは不明。足止めを頼む。私は奥のを倒す」

「はっ！」

アルフレッドの部下と思しき2人は、狭い室内に魔獣が3体もいるという異常事態に臆することなく、剣を抜いた。

彼らの剣も もちろん魔剣である。

魔道騎士団は、名前の通り 攻守共に魔法を使う騎士団で、団員も全て中級魔道士以上で構成されている。

戦争の時は もちろんその才を遺憾なく発揮させるのだが、平時魔獸が出た時などは その能力を請われて駆除に当たるのである。故に、富付きの衛兵などとは違い、魔獸への対応は専門といつてよいであろう。

そんな彼らにとつてしても、宮殿内に魔獸が しかも一度に3体も出現する事は前代未聞の珍事。

準備無しで 使える味方は3人だけ。
分の悪さが ひしひしと感じられる。

カノンが居るであろう寝室のドアを切りつけている 長い爪を持つ魔獸へアルフレッドが向かった時、緑色のぶよぶよした魔獸がアルフレッドの行く手を遮った。

「邪魔だ！ どけっ！」

アルフレッドは 魔剣で魔獸の腹を切り裂いた。

ブニヨン

しかし、切先は肉を切り裂かず、弾かれてしまった。

弾力のあるぶよぶよした体は刃物を滑らせ、食い込ませない。

「ならば！」

アルフレッドは剣に炎撃系の魔法を発動させ、
形を自由に変えながら伸び上がり 3メテルの高みから アルフ

レッドに覆い被さりつとしている魔獸田掛で、今度は下から上へと切り上げた。

グアアアアオ
ン

叫びともつかない振動だけの声を上げながら、魔獸が後ずさる。切り裂かることの無かつた魔獸の体には、赤く燃えた溶岩のように一文字の焼け攀れが出来ていた。

(切り裂く事は出来ぬが、焼く事は出来そうだな)

アルフレッドは少し息がつけた気がした。 対処法が解ればなんとかなるものだ。

しかし、その時カノンの扉が破られる音が響いた。

「カノンっ！」

アルフレッドは己の全身の毛が一瞬で逆立つたのを感じた。

「おまかせを。 」ちぢみは、焼きます

第2師団面々は優秀である。 アルフレッドが動けるよう、即座に縁の魔獸を引き受け 術式の発動にかかる。

アルフレッドは、それこそ飛ぶようにカノンの部屋へ駆ける。寝室の物音に、冷や汗が噴出す。

カノンの柔肌に、あの魔獸の長く鋭い爪が食い込み赤い血潮が噴出す様が脳裏にちらつく。

息が詰まり、呼吸が速くなる。 頭から血の気が音を立てて引いていくのが 分かる様だった。

(カノンが殺されてしまつたら?)

その問いは、彼の心を暗闇で覆い、全身を恐怖で粟立てた。

破壊された入り口まであと少し という所で、アルフレッドは中から飛び出してきた黒い塊にぶつかりそうになり素早く身を翻した。ひるがえ

条件反射で、振り向きざま切り捨てようと振り下ろした剣の軌道を、彼は すんでのところで反らし 塊の正体を信じられない面持ちで見つめた。

「カノン……」

「アル？ アルっ！ 中に化け物がいるつ！」

カノンは居る筈のないアルフレッドに一瞬戸惑つたが、すぐに恐怖の源である魔獣へと注意が行き……

「わあっ！ 外にもいるつ！」

思わず小さく叫び声を上げるカノンを、アルフレッドは思わず抱きしめた。

「カノン…… 無事でよかつた……」

こんな状況にもかかわらず、カノンの温もりを確かめずにはいられない自分に失笑しながら、アルフレッドは決死の覚悟で主人を追つてきた衛兵達にカノンを渡した。

衛兵は自らを盾としてカノンを取り囲み、ゆっくりと壁際に身を寄せた。

グルルルルルルル

寝室からの物騒な唸り声に、アルフレッドは魔剣を構え直した。

キ カシヤ

鋭い爪が床を搔く不快な音がする。

寝室のドアから姿を現したソレは 漆黒の剛毛で覆われた体に、蜘蛛の様な4本の足が生えていた。

長い腕を床に引きずり その先端に付いた鎌状の鋭利な爪が 大理石の床を削つて 耳障りな音を立てていた。

大きく裂けた口からは腐臭が漂い、紫色の舌が尖った牙の間から

ダラリと垂れ下がっている。

その狼とも、蜘蛛とも猿とも言い難い姿は、アルフレッドの知識の中の一つと合致した。

魔獸ゾレググ…… 大昔、戦のたびに魔召喚されていたという魔獸

凶暴かつ攻撃的。

四肢を切り落としても、喰らい付いてくる しぶとい魔物。瘴氣は出さぬし、対処法は……

「貫いて、一気に潰す」

そう呟くと、アルフレッドは袖口に仕込んである聖針せいしんと呼ばれる対魔物用の長針を ゾレググに向かい数本投げつけた。

ゾレググは聖針がよほど気になるのか、体に刺さった針を抜こうともがいた。

アルフレッドは一瞬で間合いを詰めゾレググに剣を深く埋め込むと飛びのき

「炎槍、散つ！」

鋭く呪を唱える。

魔獸の体に埋め込まれた剣からは無数の炎の槍やりが 2メテル四方に突き出し、霧散した。

ゾレググだつた物体は、ブスブスと黒煙を上げて床に崩れ落ちた。

「戻れ」

アルフレッドが命じると、屍の中から剣が浮かび上がり キラつと光つたかと思うとアルフレッドの鞘に納まつた。

アルフレッドが他の2体へと視線を向けると、部屋の窓が大きく破られ、2体共が外へ逃げ出していた。

「逃がして、どうする……」

蒼玉宮の壁にぽつかりと空いた巨大な穴を見つめて、アルフレッドは部下に向かつて呟いた。

しかし そうは言つても、この狭い室内空間で 瘋氣を発するタイプや 高熱の炎で焼ききらねばならぬ魔獣と 対するのは得策ではない。

幸い、王宮と神殿一体は魔術結界が張られているから、市街地へ逃げ出すことはないだろつ。

が、いかんせん結界の範囲が広い。

神殿の森に逃げ込まれたら、山狩りにどれくらいの人員が必要になるだろつ……

只でさえ魔道騎士団は訓練の為 必要な者以外は全て王都から出払っているというのに。

その手間と時間を考慮ると、つい 逃がさず処分したかったと言いたくなるのも 仕方の無い事だ。

アルフレッドは、手早く 念話で主要な部署へ連絡を済ませると カノンの元へ取つて返した。

アルフレッドの駆け寄るのを確認した衛兵が スッとカノンの前から脇へ身を除けた。

3人の衛兵が盾のように守っていたカノンは、突然目の前が開けた事に目を見開き、胸の前で両手を硬く握りしめながらも、気丈に立っていた。

真つ青な顔色のカノンを気遣い

「カノン？ 大丈夫？ 怪我はない？」

アルフレッドが優しく問い合わせ、そつと手を肩に回すと、カノンは急に力が抜けたように カクンと膝を折り 崩れた。

アルフレッドが慌てて抱き抱えると、カノンは激しく震えていた。

「大丈夫。怪我はしていないの。 ちょっと、びっくりしただけ……」

それでも、自分を落ち着かせようとするとるように カノンは大丈夫と繰り返した。

「カノン…… すまない。 怖い思いをさせてしまったね……」

アルフレッドは力一杯 カノンを抱きしめた。

「よかつた…… カノンが無事で。 本当によかつた……」

カノンが生きているのが嬉しくて、温かさを感じていたくて 思い切り腕の中へ閉じ込めた。

もぞっと カノンが身じろぐ事すら喜びで、ついには

「………… アル 苦しおう」

カノンに弱々しい 悲鳴を上げさせてしまった。

慌てて力を緩めると カノンはハアハアと大きく息をつき、ジロリとアルフレッドを睨み上げた。

「折角助かったのに、アルに殺されたところだった」

カノンはむくれながらも少し照れた顔で文句を言い、ふと 消えた2体の魔獣が居た場所に目をやつた。

何かを喋ろうと息を吸い込んだ時、何か喉に引っかかった様にコホコホと咳き込んだ。

それを見たアルフレッドの表情から甘いものが引き カノンの鼻と口を片手で覆つた。

「カノン。

手で口を押さえて、なるべく息をしないように」

そして、アルフレッドは空いた方の手で 部下と衛兵に撤退のサインを送る。

カノンの口元の手を除けると、彼女は自分で さつと口を押される。

その子供っぽい仕草に アルフレッドの頬が緩みかけたが、彼女の全身に目がいくと、眉間に皺が寄った。

カノンが今夜身に着けている夜着は白い薄手の物で 彼女の柔らかい体の線をくっきりと浮き上がりさせ、先ほどの恐怖で潤んだ目元と相まって 何とも言えぬ艶かしさを醸し出していたのだ。

アルフレッドは無言で自分の纏っていたマントを肩から外すとカノンを包み込み、彼女の膝裏に手を入れ 横抱きに抱え上げた。

カノンとアルフレッド、衛兵達は 無言のままで 素早く廊下へ出た。

廊下は 衛兵からの通報とアルフレッドの念話により駆け付けた者達で 驚然としていた。

アルフレッドらが部屋を出るのを待ち構えていた騎士団の調査班が部屋を封鎖し、別室では救護班が傷を負った衛兵を治療していた。

「本隊から呼び寄せたのか？ にしても、早いな。」

「いぶか
訝るアルフレッドの問いに

「師団長より、またとない実地訓練の機会を 余す所無く活用して

「い」と厳命が下ったんですよ」

答えたのは、副隊長のセシルだった。

「お前まで来てたのか……」

「隊長の報告に歸団長、盛り上がりますよ。今から魔獣狩りだ
あ～とか言い出して、訓練内容変更するそ～です」

「王宮の結界内に 部隊を展開させる気か？」

「気ですね」

「モメるぞ」

「モメますね。王宮警護の近衛あたりとは、まあ、確實ですね」
アルフレッドは盛大に溜息をつくと、今だ彼の腕の中にいるカノ
ンに向かつて、心底申し訳なさそうに告げた。

「カノン。すまない。行かなくてはならなくなつた」

カノンは下を向いたまま、アルフレッドの上着を ギュッと握り
締めている。

普段の彼女からは想像できない その姿にアルフレッドはハツと
息を飲んだ。

そして、部下の前では絶対しないと決めていた普段の口調に戻り、
彼女にだけ聞こえるよう小声で言った。

「ごめんね、カノン。傍にいてあげたいんだけど、揉め事が起
りそうなんだ。

なるべく早く戻るから……

そうだ、神殿に行く?

アルフレッドの問いかけに カノンは俯いたまま、頭を横に振る。

「神殿は嫌い…… アル、アルが一緒にいて」

小さな声だった。

今までカノンの口から発せられることのなかつた、氣弱な言葉。
小刻みに震えるカノンに、アルフレッドの心は揺れた。

今、この手を放してしまふと 二度と会えなくなりそうな……
そんな危うさをカノンから感じて、アルフレッドは躊躇した。

「カノ……」

アルフレッドが口を開きかけた時

「お取り込み中申し訳ありませんが、隊長。 黒い方が『赤の庭』
に出ました」

副隊長セシルの緊張した声が、アルフレッドの言葉を遮った。

セシルの声はカノンにも届いたらしく、一瞬体を強張らせた後、彼女は握り締めていたアルフレッドの上着を手放した。そして、身じろぎをしてアルフレッドの腕の中から、廊下へ降り立つた。

ふらつく足を踏みしめて、青ざめた顔で彼の顔を見つめると

「また、誰かが襲われるの？」

確認するように聞いた。

「心配しないで。みんな警戒しているし、第2師団が戻るそうだから、すぐに捕まえられるわ」

「アルも戦うの？」

「多分。実物を見ているし……」

「アルが怪我したりするのは、嫌なの」

「大丈夫。僕は強いよ？でも、気を付けるよ。ありがとう」
一コリと微笑むアルフレッドを見て、カノンは彼の中の騎士としての誇りと自信、隊長としての責任感のようなものを感じたのか、それ以上何も言う事はしなかった。

「必ず、無事に戻るから……神殿に行かないなら、僕の寝室に居てね、カノン。あの部屋が、この宮の中では一番頑丈に造られているから。エマ、カノンを頼んだよ」

アルフレッドは侍女のエマにカノンを託すと、魔獣と師団と衛兵が待つであろう『赤の庭』へ急いだ。

あんな気持ちの悪い生き物を、私は初めて見た。

奴が寝室に入った瞬間、全身の毛が垂直に立つたのを感じた。見た目も長く鋭い爪とか怖かつたけど、奴が発する気配そのものが全く異質で受け付けなかつた。

それと、一オイ。

なんともいえない嫌な臭いが、荒い呼吸と共に放出されて……

吐きそうだった。

何の手立ても思いつけずに、自分の意思とは無関係にガタガタ震える体を無理やり動かして、ベッドの脇から、ベッドの下にもぐり込んだ。

肉食獣から身を潜める小動物のように、息を殺して奴の動きをつかがう。

すると、奴はベッドの横を素通りして、私が明日着ようと思つて出しておいた巫女の装束の方へと足を向けた。

そして、臭いを嗅ぐような仕草をした後、金属性的で鋭い爪で、装束をバリっと引き裂いた。

次は自分の体が切り裂かれる番だと、心臓が縮み上がり悲鳴が飛び出そうになつた。

拳を握り締め、噛み締めていた親指からは血が滲んでいた。

奴が装束から顔を上げ、中に向かつて鼻をヒクヒクさせた時、自分の存在を気付かれたと覚悟した。

しかし、奴はおもむろにクローゼットの扉をこじ開け始めた。
たしか そこには何着か巫女の衣装があつたはず、……
奴がクローゼットに入った その隙が最後のチャンスだと、私は
床を思い切り蹴って、出口へと転がり出た。

破壊された扉の外に出た瞬間、何かに抱きとめられた。
それは、この場に居るはずの無いアルフレッドで……

信じられなかつた。

「アル？」

名前を口になると、泣きそうになつた。

でも、私に気付いたであろう奴が 背後に迫り来る氣配を感じて
「アルっ！ 中に化け物がいるっ！」

叫んでいた。

そして、アルの肩越しに居室を見ると薄暗がりの中に2体の化け
物が目に入った。

「わあっ！ 外にもいるっ！」

寝室の1体だけではないと予想していたけど、想像以上の惨状に
声を漏らしてしまつ。

後ろには恐ろしい化け物、前にも2体もヤバそうのがいる。
なのに。

「カノン…… 無事でよかつた……」

そうアルに囁かれて、抱きしめられると不安がすう一つと引いて
いく。

アルの腕の中は安心だ、と
ずっと此処にいたと感じてしまう。

しかし、当然 状況はそれどころではなく、私はアルの腕の中から宮の衛兵達の元に託され
壁際で震えながら、ひたすらアルの無事を祈つていた。

化け物の断末魔のような叫び声が響いた後、私を取り囲んでいた衛兵達の壁が開いた。

すると田の前にはアルが 泣きそうな顔をして立つていた。

実際には いつもと変わらない表向きの表情なんだけど、私には何故だか 今にも泣き出しそうに見えた。

なのに

「カノン？ 大丈夫？ 怪我はない？」

私にだけに聞こえる位の小さな声で、私を気遣い優しく抱き寄せる。

「大丈夫。怪我はしていないの。 ちょっと、びっくりしただけ……」

だから、そんなに心配しないで。

安心させたいのに、膝が震えて上手く立てない。

…

「カノン…… すまない。 怖い思いをさせてしまったね……」

アルが私を抱きしめる。

じんわりと、緊張の糸がほぐれていく。

「よかつた…… カノンが無事で。 本当によかつた……」

アルは今までに無い位の力で 私を抱きしめている。

その所為だろうか？

布越しに、微かにだけど 確かに感じるアルの震え。

化け物をやつつける位に強くても、怖かったのかな？

恐ろしい化け物だつたもんね。

当然だよね。

助けてくれて、ありがとう。

そんな思いと心地良さを噛み締めていたけど……

ちょっと……

力、込め過ぎじゃないかな？

かなり、苦しいんだけど

アルは緩めてくれない……

「 アル 苦し……」

酸欠で氣を失いそうになつて、アルが放してくれた。

ちょっと花畠が見えたよ？

でも

その時見上げたアルの顔は、切羽詰まつた顔から 普段の表情へと近づいているようだつた。

私が在る事で 少しでもアルを癒せたのなら、すこしく嬉しい。そう思つたけど。

抱き込められて、息の上がつた私の口から出た言葉は

「折角助かつたのに、アルに殺されるところだった」
だつた。

それからアルのマントに包まれて、お姫様抱っこをされて部屋を

出た。

非常に恥ずかしかつたけれど、化け物の毒か何かを避けるためと、私の足が震えて歩けないとで仕方なかつた。

仕方なかつたんだけど、照れくさかつたけど
ちょっと

いや、かなり嬉しかつた。

化け物が迫つた時は、アルとはもう会えないと覚悟していたから

……

廊下に出ると、私が知らなかつただけで 化け物と戦つて怪我をしてしまつた衛兵達がかなりの数いることが分かつた。

それを見て 改めてゾッと寒気がこみ上げた。

私も もうちょっとで大怪我どころか 死んでいたかも……と思ふと あの恐怖がぶり返す。

「アル、アルが一緒にいて」

情けないことに、アルに弱音を吐いてしまつて困らせた。

神殿は安全だということなんだろうけど、化け物も戦神も得体の知れないものという意味では 大差ない。

初めて神殿に行つて倒れてから、アルに付き添われて何度か『神の間』に入つたけど まだ怖い。

底知れない恐怖を感じてしまふのだ。

でも、『赤の庭』に化け物が現れたと知らせが入り……

アルの顔つきが変わつた。

アルと離れるのは嫌だけど

アルが怪我しないか 心配だけど

何も知らない他の人が襲われるの

防ぎたいと思つた。

そして何より アルフレッドが 騎士団の隊長の、またアースリ
ンド国王子の『顔』になっていた。

これは自分の我儘を通して良い状況ではないと感じた。

アルフレッドは公人でもあるんだ。
上に立つ者の責任。

元の世界で私が放棄していたもの。

そんな私に アルフレッドを止める訳が無かつた。

私は、アルフレッドから身を放した。

アルフレッドが『赤の庭』へ向かつた後、私はエマに手を取られ富の一室に急遽設けられた診察室へ入った。
師団の治療班が瘴氣の影響などを診てくれたが、極微量だつた為体に障りは無いと言われ、治療らしい事もせず、アルの寝室へと廊下を移動した。

アルの書斎の前と寝室の扉の前を、師団から派遣されたであろう騎士が2人づつ警護している。

エマは騎士に軽く会釈しながら

「アルフレッド様の寝室は蒼玉宮の中で 壁もドアも一番厚く、先ほど師団の方が防御結界を何重にも強化されましたから、ご安心下さい」

と、私の不安を和らげるよつて微笑んだ。

部屋に入ると私は崩れるよつてソファに沈み込んだ。
そんな私にエマは

「すっかり体が冷えてしまわれましたね。湯浴みをして 温まればお疲れも取れ、気分もきっと良くなりますよ」

と勧めてくれたけど、無防備な裸になれる気分では とてもじやないけどなかつた。

私は、ソファで丸くなり膝を抱えてマントに顔を埋めた。
アルが掛けてくれたマントからは、アルの匂いがして それに包まれていると何だか アルに守られている気がした。

マントの前をギュッと合わせて、小さくなる私に それならばとエマが暖めた飲み物を手渡してくれた。

温かいカップを持つと、自分の手が冷たく痺れるほどにマントを握り締めていた事に気が付く。

「あたたかい……」

やつと少し息が出来た気がした。

カツプを顔に寄せると
とてもいい香りが立ち昇った。

一口含むと とろりと甘く濃厚な飲み物は 何かの果汁だろうか、

「あー、だから強引に和の体を離してくれたよ」
カツブを空にして、まつと息を吐き出した私に、エマはそっと

寄り添うと

「アルフレッド様が戻られるまで、お傍に居ります」

と利を安心させると、は優しく抱きしめてくれた

それから暫くは 遠くに聞こえる外の音を、ぼんやりと聞いていた。さっきの飲み物に お酒でも入つていたのだろうか？ エマと話していくのに だんだん体が温かくなつて いつの間にか私はうつらうつらと眠りに落ちていたようだ。

なる。

1刻が2時間だから、4時間。

私の感覚では、今、だいたい午前2時くらい。
「アーバンアート」の「アーバンアート」。

更に、外からは風の音が聞こえたのだ。

寝室は元々 壁が厚く、防音もされているという寝室は

一光が差し入る

体が消えて壁になつてゐた。 そんな部屋にまで届く風の音は、天

候の悪化を暗に告げていた。

遅い。

第2師団の人達も順次転送されて 訓練場から戻つてきていると聞いた。アルが駆けつけてくれた時より魔道騎士の数は揃つているはずなのに……

大人数でも手に負えない 強い魔獸だつたんだろうか？

アルが心配……

もしも、大怪我をしたら どうしよう？

怪我じゃなくて、死んでしまつたら？ 私は どうしたらいいんだろう？

こんなに心配になるなら、『行かないで』って止めればよかつた？ でも、アルは王子で騎士団の隊長……そして、危険を部下に押し付けて自分の保身を図る様な心の持ち主ではない。

アルが第2師団に配属された時、出身が平民であるとか貴族だとか関係なく 皆が『国を守り家族を守るのは自分達である』という誇りと決意を持つていて驚かされたと そして王子である自分は 今まで何をしてきたのだろうと恥ずかしくなり奮起した結果、今の自分があるのだ。師団の皆は大切な友であり仲間である と、語ってくれた事があつた。

そんなアルが仲間だけ危険にさらす訳がない。

「はああ」

私は何度も溜息をつく。

私はどうしてしまつたのだろう？

アルに会いたい。

アルに抱きしめられたい。アルの腕の中は温かくて、安心できて 自分が此処にいていい場所に思える。

アルの事がこんなに心配なのは、アルが死んでしまうと元の世界

に帰れないから?

違う。

殺されると思った時、思い浮かべたのは元の世界の誰でもなく、アルだった。

私は、アルの事が好きになつたんだ。
どうしよう?

私、アルが好きなんだ。

でも、此処での私は 何も持つていない只の小娘だ。 アルは王子で、私は小娘。

前は余計な肩書きが邪魔で仕方なかつたけれど、何もない事でこんなに不安になるなんて知らなかつた。

『戦神の声を伝える巫女』

この恐ろしい肩書きにさえ縋つてしまふくなる。

アルが私に優しいのは、自分が召喚した巫女だから?

アルに会いたい。
アルに会つて、ちゃんと話したい。
アルの気持ちが知りたい。

私は、アルが戻つたら 今日こそ自分の気持ちを伝えようと心に決めた。

10話 魔獣5 side花音（後書き）

大変お待たせ致しました。

この機会に1話から見直しをさせて頂きました。
その結果、かなりの箇所が少しづつ変わっています。

（細かい設定変更や、補足説明の加筆などです）

大まかな話の筋や設定は変わりありませんが、話の印象が少し違う
かもしません。

未熟者です。

お許し下さい。

花音がエマに刻限を聞いてから およそ半刻後、不意にエマが立ち上がり、花音の座るソファが揺れた。
物思いに耽つていた花音は驚いたようにエマを見て、エマの視線を追つた。

すると、その先にある寝室と書斎を繋ぐドアが開いており 書斎から明かりに照らされた長身のシルエットが佇んでいた。
その影は無言で寝室に入り、今にも走り出しそうな勢いで ソファまで来ると、花音の前にフワリと跪いた。

逆光で影になっていた顔が、吸い寄せられるように花音に近づく。

アルフレッドだった。

髪から、雫が滴っている。

よく見ると、アルフレッドの全身は激しい雨に打たれたのか 濡れていた。

アルフレッドは花音の手を取ると、手の甲に自分の想いを込める様に そっと口付けを落とし
「カノン……傍に居てやれなくて すまなかつた」と心より詫びた。

金の前髪から 雨水の雫が花音の手にかかる。

花音は空いている方の手でアルフレッドの手に掛かる前髪を横へ撫でつけると そのままアルフレッドの胸に倒れこんだ。

「アル。 アル。 無事でよかつた」

花音は自分の夜着が濡れるのも気にせず アルフレッドの首にしがみついた。

「アルにもしもの事があったら バシリよいつて……私 すぐへ、
怖かった」

「『めん』

アルフレッドは花音を強く抱きしめた。

「襲われて、死ぬのかと思った」

いつもの勝気な花音からは考えられない 傾げな声だつた。

「僕も心臓が止まるかと思った。でも、もう大丈夫だから……」
だから、安心して……と アルフレッドは花音の背をさすった。
花音の体温を感じてアルフレッドもまた やつと張り詰めていた
神経が緩むのを感じた。

自分の首筋に額を着けたまま じつとしている花音の頭に手を伸
ばすと、滑らかで絹糸のような髪が いつもと同じに指に触れる。

花音の体温。

花音の匂い。

抱きしめたやわらかさも、声も、眼差しも。
ちょっと気が強くて、愛情に餓えている事に気が付いていくなくて
傷つきやすい心も……

もう少しで 永遠に失くしてしまつところだった。

アルフレッドは 震えて頭が真っ白になるほど恐怖を感じたも
のの正体を理解した。

自分にとって、花音の存在がどれだけ大きなものであるのかを
彼は、今日初めて体感したのだ。

首に幽かに感じる花音の吐息。
その愛おしさに甘い痺れが彼の中に広がる。

花音はアルフレッドに抱きしめられたままで

「アル。死ぬと思った時、私の頭の中に浮かんだ事……何だと思

う？」

ぐぐもつた声で問いかけた。

「……何だうう……家に、帰りたかった？　こんな恐ろしい国が嫌いになってしまった？」

アルフレッドはひどく辛そう答えた。

「ううん。違う」

花音は顔を上げると、今度はアルフレッドの目を見つめて言った。「自分がもう死ぬと思った時に、思い浮かんだのは　家族や子供の頃からの友達や、好きだった人の顔でもなく、あなただった。アルの顔しか浮かばなかつた。

アルにもう一度会いたかったの」

「本当に？」

アルフレッドは信じられない気持ちで　聞き返した。

「本当に。」

アルは来ないと分かつていたはずなのに、アルに助けて欲しくてずつと心の中で叫んでた。

助けてって……

だから　アルの声が聞こえた時、夢を見ているのかと思った……アルに抱きしめられて、このままずっとアルの腕の中に居たいと思つた

花音の頬は　心なしかほんのりと色付き、潤んだ瞳と相まってアルフレッドの理性を激しく揺さぶつた。

「ずっと……ずっと僕の腕の中に居たらいい

彼は驚異的な自制心をもつて己の衝動を押さえ込むと、花音に対する想いを素直に告げた。

「もう一度怖い思いはさせないと誓つから……カノン。僕が君を守る。

君のことが好きだ。

だから、僕の傍にいてほしい

花音の視線の先には、アルフレッドの決意のこもった瞳が強く光っていた。

「でも……私　ただの女の子だよ？ 巫女の役割だって果たせてないし、アルの役に立たないよ……」

アルフレッドの勢いに押されてか　花音の言葉は弱々しく口の中に消えた。

そんな花音に

「役に立つ立たないの問題じやない」
アルフレッドがピシャリと言った。

「カノンはそんなもので好きになつたりするの？」
アルフレッドの澄んだ青い瞳に見つめられて　カノンは思わず目をそらした。

「そんなので好きにならない」

花音は　口を尖らせて　ぼそりと呟いた。
^{つぶや}

「僕もだ。

僕の欲しいもの、何か分かる？」

アルフレッドが　片眉をわずかに上げて微笑んだ。

「？」

花音の目が分からないと開かれる。

「僕の欲しいものは、家族。
普通の家庭が欲しい。 愛する人に囮まれて暮らしたい。
好きな人を愛して愛されて、結婚して、子供が生まれて、家族に
なる……僕の憧れだ。

もうずっと諦めていたんだけどね」

そう言つたアルフレッドの目は、過去の何処か遠くを見ているよ
うで、花音の心を締め付けた。

「僕は王家に食い込む為の手段であり、贅沢をする為の財源としか
見てもらえなかつた。 僕自身を認めてくれたのは王立魔道師養練
所で一緒だつた数名と、第2師団の連中くらいだ。

だから、国民の為になればいいと、召喚者になつたんだ。

もちろん、喚んだ巫女のことは大切にしようと思つていたよ……

ほら、こっちの事情に無理やり巻き込むことになる訳だし……
カノンを一目見たとたん、そんなこと頭から飛んでしまつたけど

ね」

「正直に言つよ」

いつになく照れくさうに、しかし真剣にアルフレッドは居住い
を正した。

「一田惚れしたんだ。

召喚で喚び出されるのは召喚者の運命の女だつていう意味を分か
らせられたよ。

正に心臓を驚きにされた感じかな？ カノンが綺麗で可愛らし
くて目が離せなくなつた。

何より、僕を見つめる カノンの真っ直ぐな瞳に 魂まで奪われたよ。

こんなに人を欲したのは初めてだ。

カノンが欲しい。

カノンと一緒にいたい。

カノン。

愛している。

ゴメン。

元の世界に帰してあげられそうにない。

カノンと離れたくないんだ

カノンと家族になりたい……

最後の方は、彼の本心を搾り出したかのように声がかくれていた。

「家族……」

花音はつわ言のよ^{つぶや}うに呟いた。

「そう。

カノン

」

アルフレッドは花音の両手を自分の手で包み込むと、花音の目を

見つめて僅かに躊躇した後

「僕と、結婚してほしい」

一息に告白した。

11話 魔獣6（後書き）

続きます

「アル……そんな風に思つてくれてたのね……
うれしいよ とても」

花音の黒曜石の瞳に 雪が浮かび上がった。

「でも……

殺されそうになつた時、私 親の顔も浮かばなかつた。
私は きっとすごく薄情な人間だよ。 アルの事しか浮かばない
なんて……」

花音は涙が落ちる前に顔を伏せようとしたが、アルフレッドの手
が下顎あごを捕らえると 彼に顔を向けたまま、涙を一筋零ほじきした。
そんな彼女の涙に アルフレッドはくちづけると、彼の顔はこれ
以上はないほど満面の笑みを浮かべていた。

「カノン。 悪いけど、それ 無茶苦茶うれしいよ。
カノンの心が 僕で一杯になつているなんて……物凄く うれし
い」

そう言って、頬にまた唇を落とした。

「ゴメンね、カノンは何も悪くない、薄情なんかじゃない。 全部
僕が悪いんだよ。
僕がカノンをこの国に無理やり連れてきて、家族から引き離した
んだ。
だから、みんな 僕の所為だ」

そう言いながらも、アルフレッドは嬉しそうに笑っている。

「私がアルを好きになってしまった、家に帰りたくないなつたのも？」

すこし拗ねたように花音が問う。

「僕の所為」

今度は頭頂に くちづけた。

「私の心が、アルで一杯になってしまったのも？」

「僕の所為」「額に一つ。

「カノンが家に帰れないのも、僕の所為。

巫女という役目を無理やり押し付けられたのも、僕の所為

自分の所為だと言う度に、アルフレッドは花音のそこかしこへ
ちづけを落とす。そして、艶やかな笑みを浮かべて

「だから 僕の全部をカノンにあげる

心も、体も 命も 未来も……全部、カノンにあげる」

最後は額と額を合わせると、アルフレッドはまるで祈るように
花音に言葉を捧げた。

「アル……」

「だから、僕の傍にいて 君を放したくないんだ」

熱い吐息で呼びかけるアルフレッドに、花音はチロリと上目遣いで睨みをきかせると

「嘘つき」

はつきりと、しかし 照れを多分に含んだ声で花音が言った。

「全部は貰えない。アルは自分の役割を投げ出さないから……
今日だって」

「あああ、ゴメン。 そつだね。
困ったな。

そういう所以外の全部……ではダメかな？」
降参という風にアルフレッドが笑い出した。

「…………仕方ないなあ」

花音がクスリと笑みを漏らす。

「込み…………でいいよ。
逃げずに頑張るといろ 尊敬しているから。
私には出来なかつた事 だから…………

そのかわり、必ず戻つてきてくれるって 約束して。
私の隣に帰つてきて。
絶対 独りにしないで」

花音が真顔になった。

「約束するよ。
何があつても 必ずカノンの傍にいる。
僕の帰る場所は、カノンだけだよ」

アルフレッドも真剣に答えた。

「じゃあ、私の居場所も アルの傍だよ。
アル。

私

帰らない。

もう、何処にも行かない。アルの傍にいる

彼を真っ直ぐに見る濁りの無い花音の瞳は、神秘的な輝きを帯びてアルフレッドの心に幼い頃から空いていた闇を温かいもので埋めた。

「うれしいよ。カノン」

アルフレッドは溢れ出す喜びに生まれて初めて満たされた。思わず花音を強く抱きしめてしまい、

「役に立たなくとも、他の美人に目移りしても、返品は不可だからね。

帰れって言つても、帰つてあげないからね」と、アルフレッドの腕の中で花音が注文をつけても「うん。浮氣はないよ。カノンだけを愛するよ」甘い言葉だけがこぼれる。

「私は欲張りだから、アルの全部を欲しがつてしまつよ?」

「欲しいだけあげる」

「我儘も言つよ?」

「好きなだけ言つて」

「死ぬまで、私だけを愛してくれる?」

「僕の命が尽きる瞬間まで カノンだけを愛する事を誓つよ

一人だけの部屋に 静かで神聖な空気が流れた。

「じゃあ。

私を あげる。

アルフレッドに、私をあげる。

私はアルフレッドのもので、アルフレッドは私のものだよ

互いに見詰め合う二人の間を隔てるものは もうなにも無かつた。

「ああ 僕はカノンのもので、カノンは僕のもの な
んて甘美な言葉だろ?」

アルフレッドは 喜びを噛み締めるようにカノンに唇を寄せた。
花音も柔らかな笑みを浮かべながら 自然にそれに答えた。
初めは啄^くばむように、そして 徐々に熱情を帯びて……

お互いが お互いを見出した彼らに それ以上言葉は要らなかつ
た。

12話 魔獣7（後書き）

次回からシードと雪羽の話に戻ります。

13話 魔獣8（前書き）

たいへんお待たせしました

『蒼玉宮に 突如 魔獸が出現し、巫女姫が襲われた』

『3体中、1体をアルフレッド王子が仕留めるも、2体は逃走』

『現在、王城及び神殿の結界内に潜伏しているもよう』

この知らせが届くと、執務室は殺氣立つた。

執務長官ジョナス・ラズモントの号令の元、事実の把握と 現状の確認、王への報告と評議会の招集、王宮の警護及び魔獸の掃討の手配……等々 やらなければならない事は山のようにあつた。

王城に魔獸が出現するなど、前例のない非常事態の上に所轄争いが早々に始まつていて、混乱を避ける意味で、国王直下の組織である執務室が采配を振るう事になつたからだ。

そもそも巫女みこと依巫よりましも召喚が行われた時点で、魔道府全体の仕事量は増加し 必然的に執務室も慢性的な人手不足を抱えている。本来の業務以外の仕事に借り出される者が多いのだ。

普段のオーバーワークに加えての急務に、現在 王都にいる執務室職員は全員徹夜で対応に追われ 夜が明ける頃には皆 疲労の色がべつたりと顔に塗られていた。

「ロニー！ どうして、こんな事になつているんだっ！」

王宮のそこかしこに夜通し焚たかれた松明たいまつが 朝日に役割を譲る頃、シーウェルドの叫び声が『赤の庭』に木霊した。

「通商会談に借り出されて半月もこき使われた挙句、やつと帰れたと思ったら 魔道府に転移出来ずに王都の外れに飛ばされ、今の今

まで足止めを食わされてたんだぞ！

なんとか話を通して戻つてみれば 座る暇も無く、お前に強引に連れ出されて……

いい加減に説明したらどうだつ！

「あ 怒鳴らないでくれるかな～ 徹夜明けの頭に響くんだよお。

はいはい。君の言い分は『もつともです』

説明します

昨夜、蒼玉宮に魔獸が出現、2体が逃走、王宮警護と第2師団で繩張り争いの末、本日正午までに警護が始まれば出来ない場合は第2師団が演習がてら狩る。

ラズモント長官からは『師団を動かすな、修繕費が掛かる。王宮警護の近衛なんぞ最初から数に入れるな、四の五の言わずに片付ける』だそうです

魔獸の討伐なんて、魔道師^{アカデミー}養鍊所の卒業試験以来じゃない？ それをサクッと片付けろって？ 長官の方が魔物？ どんなけ人使い荒いの？

あ～～っと、ちょっと意識が飛んでたわん。

えっと、魔獸は瘴氣を吐くのと、焼き殺さないといけないヤツ。やっかいだよね～

と、いう訳で シーウェルド。 がんばってね

そう言って友人にウインクするロニーはすっかり徹夜の所為で、精神が飛んでいるようだ。

しかし、魔獸が逃げた後の庭園で出現場所の警備に当たっている兵に聞こえない様配慮したつもりだらうか、ロニーの説明は かるうじて小声であつた。

ロニーの緊張感のない話にシーウェルドは青筋を立てたが、気をとり直して現状の確認を取つた。

「被害は？」

「蒼玉宮の一室が大破へ 負傷者数名、死者ゼロ。 巫女姫様とア

ルフレッシュ王子は無傷へ」

「やうか

一言ロニーに返し、歩き始めるシーウェルドにロニーは不思議そ
うな声を上げた。

「あれえ？ ユキハちゃんの事、聞かないの～？ 会ってないんだ
ろ？？」

シーウェルドの歩みが止まる。

「ユキハに……何かあったのか？」

前を見つめたままシーウェルドが問うた。

「いや、何も……無いと思つ。 魔獣が逃げた直後に結界が張られ
ているから、討伐関係者以外は建物から出られないし、ザンバルデ
アの所か～、居住区に居ると想つけど……会いたくない？」

「ロニー、その可愛く傾げた首を折つて ぐるっと一周回していい
かな？」

再びこめかみに青筋をたてながら、シーウェルドがにっこり笑つ
た。

「愚問……だつたね」

ロニーはシーウェルドの沸点が いつになく下がっているのを感じ取ると素早くシーウェルドと距離を取つた。 そんなロニーを横
目で見ながら、シーウェルドはまばらに伸びた無精髭^{ぶじょうひげ}に手をやりながら ぼそりと漏らした。

「俺だつてすぐにでも顔が見たいわ……でもなあ、こんな格好で
会えないだろ」

「あ～確かにやつてるねえ。 昨日は風呂入つてないだろう
し～下手したら2・3日？ あはは！ そうだよねえ～ ユキハちゃ

「…………」シード、汗臭いですっなんて言われたくないよねえ

「そこまで、酷くはない……が、そんなところだ」

シーウェルドは_{ぶぜん}撫然とした顔で続けた。

「コキハさえ無事なら、後で時間など幾らでも取れる。コキハが無事なら……今はそれでいい。仕事をさつと終わらせて、ゆっくりと余^まにに行けば。その為には、師団に引^ひつき回されたくない。長官の言つとおり仕事が増える。

それに戦闘なんて、俺も久しぶりだからな……勘が鈍^{まづ}つていてもかぎらんし、手間取つては拙^{まづ}い。

時間は無駄にできない。

追うぞ」

シーウェルドは血^{じみ}を鼓舞するよ^うに言つと、魔獣の逃げた先に駆け出した。

* * * * *

雪羽が目を覚ました時、同室の三つはすでに出かけた後だった。

「いつも 無理やり掛け布を剥がさなければ起きない朝寝坊なのに……」

不思議に思いながらも、雪羽は身支度を整え朝食を摂りに食堂へ向かうが、その朝はどうも居住棟全体がザワザワと浮き足だつている様に思える。

食堂に三つの姿を見つけると、雪羽は混み合^{あつ}つ中をすり抜けて声を掛けた。

「ミリ、何かあったの？ みんな いつもど^う違つよ？」

「コキハ……今、呼びに行こうと思つていたところだったのよ……」

「？」

「魔獸が出たのよー。この、王城にー。」

「まじゅー？」

「魔獸よ。ま・じゅ・ー。すりこ凶悪なヤツでねー。もーるんだつて！ キャーー。『ワーィー！』」

雪羽が声を掛けるまでミリとお喋りをしていたミリと同年代の女官達も、笑いながら『ワーィー』と声を揃える。

その様子は、怖がつてこないとこうよつ、楽しさでこらのように雪羽には思えた。

「怖いものなのですか？ まじゅうは、魔獸を見たことのない雪羽は、一体どうこつものなのか見当もつかず、素直にミリに訊ねる。

「うーん。どうかなあ。私も本でしか見たことないし……あつ、そつそつ。建物に結界が張つてあるから、魔獸は入つて来れないの。昼までに近衛が退治するつて話だから、運が良ければ窓から魔獸が見れるかも」

「はあ……？」

「それよりもよー。演習から戻つてきた騎士団が詰め所に入りきらなくて居住棟の広間で待機しているのー。」

「はい？」

雪羽はそう言われてもピンとこない。

「有望株のチェックと、今年入団した子の発掘をいかに効率良く行うかを皆で検討しているのよー」

そう言つたミリは、とても楽しそうに笑つた。周りの娘達もキャーキャーはしゃいでいる。

非常に楽しそうである。

女官といえども、皆、つら若き乙女達なのだ。この非常事態に不謹慎だなどと野暮な事を言つ上役は、どうやらいないらしく。騒がしい食堂で、上役が朝食を摑つている姿も見えるが、せいぜい苦

笑を浮かべて『程ほどになさいね』とたしなめる程度である。

「ユキハも一緒にいく？ 私達、広間の世話役を命じられたのよ」

「あたしは……おじいちゃんに聞いてからにします」

「そう？ 老師の了解が取れたら来なさいね。イイ男の見分け方を教えてあげる」

「……はあ」

この世界のイイ男が見分けられる事に大した利点があるとは思えなかつたが、誘いを無下にすることもばかられるので、とりあえず手早く朝食を済ませると、雪羽はザンバルデアの元へ向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0703/>

巫女と依巫

2011年5月25日01時04分発行